

517
243

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



517-243



三島章道著

おめでた結婚

東京關根書店出版

大正
12.5.16
内交



おめでたき結婚 目次

二圓五十錢の馬……………二
種ヶ島の名人……………三
おめでたき結婚……………七
金の話……………一七
彼の鶏と野良犬……………一四
小品五題……………一五
I 船上のギニアファオル……………一六
II 海邊の笛……………一八

おめでたき結婚

其他

III 秋の那須野にて……………一六

IV 布哇の半日……………一七

V 潜航艇の線……………三二

武士の子の死……………三九

喧嘩……………四五

(了)



二圓五十錢の馬



「坊ちやま、北海道の熊爺が参りましたよ。」

かう女中に云はれると、私共兄弟は、

「どいどい。」

とせきこんできいて、

「お立關の書生部屋に居りますよ。」

と云はれると、もうすぐ、

「熊爺——い——」

などと調子の高い黄色い聲を張り上げて、襖をバツとあけて子供室を飛出して、立關の

方へ走つてゆくのだつた。

立關の書生部屋には、大きな火鉢の前に、熊爺は圓く、脊をかめてかたまつてゐる。バタ／＼と云ふ子供の足音がして勢ひよく障子がガラツとあいたので、こつちをふりむいた熊爺は、そこに私と弟の姿をみつめて、

「これは／＼、はあ、ほんちやま、えらう、大きう、ならしやりましたのう。」

などと云ひながら、テカ／＼としたくり／＼坊主の頭を、ビョコ／＼とふりたてゝ、お解儀するのだつた。さういふ時、私共兄弟は、先を争つて、熊爺に飛びつくのだつた。

「熊爺、いつ來たの。」

「へい／＼、只今、はあ、まゐりましたのでござります。」

「熊爺、お話しをしてくれ。」

「へい／＼。あとでゆつくりいたしませうぞ。」

「熊爺のお話しだぞ。」

「へい／＼。」

熊爺はなんでも「へい〜」と云ふ辭があつた。そのへい〜の云ひ方は東京式の云ひ方と反對でへい〜のいの字を強くだん〜と強く云ふ云ひ方である。

私共は、長い旅をへて着いたばかりで、疲れてゐる老人に、遠慮もなく、すぐもうお話をねだるのだつた。しかし、さういふ時、熊爺は心から嬉しさうに、にこ〜して、二人の坊ちやんをうまくなだめて、話しをまぎらすのだつた。

さういふとき、いつでも、私と弟は、夕の御飯がすんだら、早く熊爺の話をして貰はうと思つて、大いそぎで、むしやくしやとかつ込むで箸を膳の上に置くやいなや、又、

「熊爺——い！」

と云つて食堂を飛び出して、書生部屋へ行くと、熊爺の両手を、兩方からとつて、

「さあ、お話だ、お話だ。」

と云つて引つたて、子供部屋につれてくるのだつた。熊爺は、恐縮しながら、にこ〜して、

「く〜。く〜。」

とテカ〜頭をふりたてながら、二人に引つばられてついて来るのだつた。

子供室に引つばつてくると、私と弟は、まん中の火鉢のわきに熊爺を坐らせるのだつた。そしてその兩側にチヨコンと二人も坐つて睫毛をばち〜させながら、淺黒い熊爺のふとつた顔をのぞき込むのだつた。

火鉢のわきには、ランプがチーチーと幽かな音をたて、燃えてゐる。その黄色い光が、テカ〜した熊爺の頭を照して、熊爺が頭をふる度に、チラ〜と輝やく。

「爺や。お前の頭にはどうして毛がないんだ。」

弟が、不思議さうに、しばらく頭をのぞき込んでゐて、やがてこんな事を突拍子もなく云ひ放つ。

「へい〜。私は、頭の毛をはやして居りますが、えらい嫌ひでございましてのう。それで、かう、いつでも、クリ〜と剃つて居るのでござります。」

熊爺は、太い指のガザ〜とあれた掌で、頭を二三度くる〜となでて、そんなことを云ふのだつた。

「熊狩りの話を、早くしておくれよう！」

「へい／＼お話でござりましたのう。……それはかうでござります。……昨年も又、えらい、大きな熊をとりましたぞい。」

なぞと、大きな聲でぶつきら棒に云ひ放つて熊爺は、急に頭をキュツとちやめて、首を襟の中にうづめて、さう恐縮したやうな形をして、

「このやうな大きい聲でお話してはなりませんな、もつと、おちついて話しませんと、いけませんのう。」

なぞと云つて、誰か隣りの室なんかで笑つて居はしないかと伺ふやうに、耳をそばだててあたりをみまはして、それから、又ぐつと唾をのみ込んで、こんどはぐつと聲の調子をおとして、

「近所の者が、子をつれた大きな熊が出たと申しますので、私は、鐵砲を持つて、さつそく山へのほつて、参りました……」

なぞと話したすのだつた。二人は、もうぐつと目をするて、熊爺の顔をのぞき込んで、

その話にきゝとれるのだつた。二人の頭には、もう雪のちら／＼ふつてゐる、まつ白い山が展開される、そこを藁を着た熊爺が鐵砲を片手に持つて、のほつてゆく有様が映る。熊爺はガサ／＼と云ふ音にも、耳をそばたてゝ注意ぶかくあたりを見まはしつゝ登つてゆく。そのうちに熊の足跡がみつかる。その方向をたよつて熊爺は探してゆく……。

熊爺の話はだん／＼面白くなる。私と弟の頬は、もう興奮してまつ赤になつてゐる。熊爺が首をふると一所になつて首をふつてゐる。やがて話は熊爺が熊をみつけて一發はなした所までくる。

「さうしますとのう、熊はがさ／＼と、その藪の中に入つてしまひました。私はすぐそのあとを追つかけて藪に入りましたが、ひどい藪でござりましてな、何が何だかわかりません……私は血のあとをたよりにそれでも、藪をかきわけてゆきました……」

話は又、こゝで廣がる……。熊爺はその一發たまをくらつた手負ひの熊を、木の根、藪をわけ、それから川を渡つてさがしあるくのである、やがて……

「さうすと、坊んさま、そのえらい大きな木のう。その大きな木の横からふいと熊

があらはれて、かうやつて……私の前に立ち上りました。私はこゝぞと思つて、鐵砲をかまへ、ねらひを定めますと……「己はお前の命がほしいんぢや」と大聲に申しまして、ドンと一發やりました。彈丸は美事に熊の咽喉にあたりましてのう。熊はどつと倒れました。へいへい。その「己はお前の命がほしいんぢや」ちゆうてうつたのが念所にあつたんでござります……それで私は腰の鉈をとりまして、熊に近づきました……」

なぞと、熊爺の話はつゞくのだつた。もう私と弟は、まるで自分等が熊をとつたやうな喜びである。

かうして、熊爺の話をきくと、又あしたの晩も又熊爺の話をせびるのだつた。同じ話をする事もあれば、又熊爺が北海道へはじめて、渡つた時の話や、又、北海道へ行く前、彼がまだ四國の讃岐にゐた頃の話もするのだつた。

熊爺は、私の家の北海道の地所——私の家では北海道に山林を少し持つてゐた——を番をしてゐる爺やであつた。たいてい彼は一年に一度、お正月に東京に出かけて來た。出か

けて來ては北海道の色々の話をするのだつた。私等兄弟にとつては熊爺は仲々の人氣ものだつた。熊爺も又、我々二人の坊ちゃんを可愛がつてくれた。そして、くるといへば、話をした、同じ話もあつたがしかし毎年新しい土産話を一つか二つはきつと持つて來た。そして熊爺は來ると三四晩とまつて、又寒いへ北海道へかへつて行つた。その三四晩の間、熊爺は二人の俘虜同様になつて、お話をせめられるやら遊びの相手をさせられるやらした。熊爺はよろこんで、その相手になつて、子供のやうに嬉々としてこゝくして話したり遊んだりするのだつた。

二

かうして熊爺は毎年、渡り鳥のやうに、お正月になると、北海道から東京にやつてくるのだつた。私と弟は毎年、熊爺の來るのを楽しみにして待つのだつた。そのうちに四五年がたつた。そして、私はいつしか中學の一年生に、そして弟も小學の五年生になつてゐた。

そのお正月、熊爺はいつもの通りやつて来た。私達の姿を見ると、熊爺は、
「坊んちさま方も、えらう大きいならしやつたものだ。まあ、一年見んと、すんとせいものびしやつしやる。」

なんぞと云つて、顔中に皺をよせて、にこ／＼して云ふのだつた。

「どうだい、熊爺、かはりはないかね……このごろどうだ、馬や牛も少しはふえたか？」
私はもうそんな事を云ふやうになつてゐた。

「へい／＼。ありがたうござります。お蔭様で、爺の所もみんな丈夫で居ります。馬も今では三頭、牛もこまいのまでまけて四頭になりました……坊んちやまは、一つ、北海道へござらつしやりませんか。夏は涼しうて、ようござりますぞい。」

「うん、行きたいな、馬にのりたいからな。」

「坊んちやまに乗つて戴きたい馬がござります。種馬でござりますが、えらうおとなしうござりまするで……」

「種馬ぢやこわいなあ。」

「なに／＼。大丈夫でござります。それはのう。道廳から、借下けの馬でござりましてのう。なんとか云ふむづかしい西洋の名のついた、いゝ馬でござります。」

「さうか。それからどんな馬が居る？」

「それからのう……さう／＼坊ちやま、面白い馬が居りますぞい、二圓五十錢の馬が居ります。」

「二圓五十錢の馬？……爺、何を云つてゐるんだい。それは二圓五十錢で買った馬かい？」

「へい／＼。二圓五十錢でかうたことになります。」

「どうしてそんなに安いんだ。」

「それはかうでござります……」

とかう云つて、熊爺は、一口唾をのみこんで、體を前の方にのり出した。それは、熊爺が「お話」をする時のいつもの癖だつた。面白い話、お得意の話をする時、爺はいつもさうやつた。それで、私等兄弟は、爺のさうやるのを見ると、こつちも、つひつり込まれて、反射的に膝をのり出す程、その爺の癖にならされ、又その爺の癖を愛してゐた。

熊爺はテカ／＼頭をふりたてながら話をはじめるのだつた。

「私は、親から離れたばかりの仔馬が欲しいと思ひまして、探して居りました所が、私の居ります所から、五里ばかり離れた所に、仔馬を賣りたいちうて居ると云ふことを、村の者からきゝましたので、私は早速、それを見に出かけたのでござります……行つてみますと、その家はお百姓でありまして、北海道としては、かなりいゝ方のくらしのやうでござりました。私がまゐりました時、その主は畑かきに出て居りましたが、私が仔馬を見せて貰ひに來たのぢや申しますと、早速、若いかみさんが呼びにいて下さりました。主はすぐもどつてみえしやりましたが、人のよささうなまだ若い男でござりました。私は早速家中に入りまして、馬を見ますと、仔馬は親馬と一所にせまい馬小屋に居りましたが、圓々とふとつてのう、鹿毛馬のよい仔でござりましたので、私はそれを見ますと、もう欲しくてたまらなくなつたのでござります。それで私はその主さんに、「なんほで、賣らしやりますお心算ですか」と尋ねますと、「六圓なら賣らう」と申します。それで私はどうか「五圓に負けて戴けませんか」といろ／＼申しましたけれど、「今迄見に來た人にも、どうしても

六圓でなければ賣らんちゆうたのだし、わしは決してかけねはようせんのだから、どうかあんなも六圓で持つて行つてくれ」と申して仲々きゝません。私も困りまして、どうしても五圓でなければ買はん云ふ。向うもどうしても六圓でなければ賣らん云ふ。二人でかうして云ひあつて居りますと、そこへ、さつきのかみさんが來まして、「あんたはどうしても五圓でなければ買はんちう。主人はどうしても六圓でなければ賣らんちう。それならどうも困りますきに、この馬は今迄もどうしても六圓でなければ賣らんちゆうた馬ですけれど私が中に入りますきに、あんたも私にもう五十錢出してお呉れんでせうか」と申しまして、又主のはうには「見た所このお方も、馬が好きで、可愛がつておくれさうなお方だけに、お前さんも、五十錢、私におくれた氣で、五十錢まけて、五圓五十錢にして上げておくれんだらうか」と申したのでござります。するとその主さんも、それを承知してくれましたので、私も五圓五十錢で買ふ事を承知して、いよく仔馬を小屋から引き出したのでござります。するとその若い夫婦のものはのう、えらう馬を可愛がつてゐたものと見えまして、かみさんは水をくんで來るやら、御亭主は薬やボロで、仔馬の頭や脚をふくやら、水で洗ふやら

して、別れを惜しんで、人參を喰はしてやるやらいたしました。それで、私はなんだか氣の毒になりましたので、六圓拂つてやりますと、いやよろしい五圓五十錢でようがすからどうか馬を可愛がつてやつて下されと云つて、五十錢銀貨をかへしました。それで私も可愛がる事を約束いたしましたので。馬を引き出したのでござります。親馬がヒン／＼云へば、仔馬もヒン／＼云ふ、私も困りましたが私は欲しいと思つた仔馬が買へた嬉しさに五里の道を引いてかへつたのでござります……」

私の頭には北海道の原野がのべられてゐた。森の前の、みすほらしい藁屋根の百姓家、そこに若い百姓の夫婦が立つて名残惜しげに仔馬を見送つてゐる。馬小屋では母親が、仔馬を呼んでヒン／＼いな／＼、熊爺は尻をはしよつて、ピン／＼とはねて、ヒン／＼鳴く仔馬を引つぱり／＼とほ／＼と細い道をかへてゆく。……こんなシーンが、それから、それへと活動寫眞のやうにのべられてゆくのだつた……

「だつて爺やそれぢや二圓五十錢ぢやなくて、五圓五十錢の馬ぢやないか？」

「へい／＼さうでござります。所がそれから、二圓五十錢になつたわけがあるのでござり

ます……それはかうでござります。」

こゝで、又爺は、一口例の如く唾をのみこんで膝をのり出して話しつゝけた。

「その頃、道廳のおふれがござりましたのう、牡馬の去勢をする事を御獎勵になつたのでござります。そして、牡馬を去勢したものには三圓下されると云ふおふれだつたのでござります。しかし、皆、仲々馬を去勢しなかつたのでござります。やれ、弱くなるぢやとか、やれ死ぬぢやとかいうて、よう馬をつれて、お役所へ出る者はござりません、しかし坊んちやま軍馬になるには皆、去勢をしなければなりません。又、使ひ馬にするにも去勢をした方がおとなしうなりますし、喧嘩はしませんし、牝馬をみてもギャン／＼云はなくなりまして、ほんとは大へんいゝのでござります。それを百姓共は馬鹿で知りませんに、私が皆の一つ手本となつて、お國の爲になつてやらうちゆう考へを出しまして早速その五圓五十錢で買ひました馬を引つぱつて、郡のお役所へつれて参つて、イの一番に去勢をして戴いて金三圓、頂戴したのでござります。それで、この馬はつまり二圓五十錢で買つたわけになるのでござります。所が去勢をしてからの馬も大へんいゝ具合でござりますので、村の者

共もだん／＼と牡馬を去勢して置くやうになつたのでござります。つまり私は皆の手本となりまして上に、金三圓をいたゞいたわけでござります。」

「成程それで二圓五十錢か、……その馬も大きくなつたか。」

「へい／＼大きくなりました、よく私をのせて走ります。」

「二圓五十錢の馬に僕ものつてみたいなあ……爺い。僕が北海道へ行く迄にその馬、賣つちやいかんぞ！」

「へい／＼、賣る／＼つちやござりません。坊んちやま、どうぞ早ようお出下さりませ。」

私はもう北海道へ行きたくつてたまらなくなつた。種馬もみたい、二圓五十錢の馬にもやりたい。それから爺の話によると、うちの山林の中には沼もあつて魚もゑると云ふ、大きな櫻桃のなる林もあると云ふ。行きたくつてたまらなかつた。私は早速、父母に、北海道にこの夏休みに弟とやつてくれと云つてみたが、弟がまだ小さいので、來年になつたら二人で行つていゝと云はれた。私は多少不服であつたけれど、しかし來年を楽しみにして弟と二人で、時々來年北海道へ行く話をしては、色々とその計畫を立てたりした。

三

その翌年の夏休みは來た。私等兄弟は去年からの約束であつたので、やうやく北海道行きを許されて、二人して旅立つたのであつた。

私等兄弟にとつては、初めての大自然なので、見るもの聞くもの珍らしいものばかりであつた。私等は小鳥のやうにはゞたきもかろくあちこちと駆けまはつた。しかしなんだか夜などは二人きりで淋しかつたり、こわい事もあつた。青森から汽船にのつて函館に上陸してから、大沼公園で一泊して、翌日、熊爺の居る、私のうちの山林のある赤井川へ行く事にした。

翌日はどんより曇つた日だつた。ガタビシとゆれる、小ツボケな三等客車にゆられて、赤井川驛に下車した。

驚いたのは、この淋しい停車場で下りたのは、私と弟と、それから百姓の爺いさんが一

人、たつた三人きりであつた。停車場を出ると、我々は、東京で父にかいてもらつた地圖をたよりに、熊爺の家を探してあるいたけれど仲々わからない。大きな藪をぬけたり原つばを横ぎつたりして、石のごろ／＼した大道をあちこちとあるいたが、仲々それらしい家がない。私等は、曾て熊爺から、度々熊の出る話をきいてゐるので、若し熊でも出たらどうしようと心配でたまらなくなる。

しかし、暫らくあるいて、やうやくそれらしい家が見えた。穢らしい茅屋で、家の横側には防寒のためか、穢い板がやたらにぶちつけてある家だつた。その家のわきには、藁屋根ばかりのやうな小屋があつた。そのわきにはこはれか、つた雪糺などが、置いてあつた。

私等は、その小屋のわきを通つて、茅屋のはうへ行くと、熊爺が居た。

熊爺は、頬冠りをして、バツチをはいて、何かしきりと仕事をして居た。私共をみると何かけんの顔をして居たが、やがて我々だと氣がつくと、

「まあ。まあ。これは。」とくりかへして、「坊ちやまがた、よう来て下さりまし

た。今年の夏はお來でぢやちゆうけに、爺は毎日々々、お待ち申してをりましたぞい。」と云つて、頬冠りをとつて、飛びつかんばかりに走つて來て、それから茅屋の方をむいて「これ。これ。お時やい。ござらしやつたぞ。ござらつしやつたぞい。」と、どなつて、家の中にかげこんで、それから大いそぎで、着物をきかへて出てくるのだつた。

爺の女房のお時も出てくる。野良へ出て居る倅の由太郎や、お花も迎ひに行つてつれてくる。一家中での大歓迎である。

「さあ／＼坊んちやま。何から見えていたゞいてよいやら……爺は、あれもこれも、見ていたゞきたいものばかりでござりますぞい。おうちの山の樹もえらう大きうなりました。ほかの所の山々は、皆、そばからぶつたぎりますので、このせつは北海道もだん／＼はけ山になります。おうちの山は、木が茂つて居りますぞい。この爺が一生懸命で、木をそだて、居りますので。」

熊爺はに／＼してゐる。

「さうか。まあ、山はあとでいゝ。僕かあ、馬がみたいんだ。ほろ／＼二圓五十錢の馬にのつてみたいんだ。」

さう私が云ふと、

「へい／＼、さうでござりましたのう。」

と云ふが早い、茅屋の後の、穢い馬小屋に飛込んで行つて、ピン／＼はねる立派な馬を引き出してくる。ヒヒーンといなく馬の聲が、どんよりした空に響きわたる。

「ドー。ドー。ドーよ。ドーよ。はい。はい。……まづ。まづ。坊んちやま。これをさきに見て下さりませい。これは種馬でござります。こゝに血統書がござります。」

爺は、ほろ／＼になつた血統書を懐から出して渡す。

「第六スチーンバフオマーつて名か。爺にはこれぢや覺えられないね。ハツクニー種だねいゝ馬だね。僕、こいつにのらう。僕の馬の上手な所を一つみせてやらうか……いゝ流星だねえ、おやこゝどうしたの？」

「牝馬にでも蹴られましたのでござりませう。」

「さあ。こんどは二圓五十錢の馬を引いてこい。」

「へい／＼。」

爺はその馬を、わきの樹につないで、又馬小屋に入ると、北海道の特産の小馬をひいて来た。いやにたてがみのもちやく／＼した馬だ。

「この馬は體こそ小さうござりますが、えらい強い馬でござりますぞい。五里や六里の道は、そく（ギヤロップのこと）でとんでゆきまして平氣でござります。これなら小さい坊んちやまがおのりになつても大丈夫でござります……」

「成程、こいつが二圓五十錢の馬か。かあいゝ奴だ……」

私は鼻をなでながら云つた。

「牛は野原へおつばなしてござりますけに、あとで、山を見て下さるとき一所にみて下さりませい。」

爺はさう云つて、「坊んちやま、もうおひるぢやござりませんか。おひるめし上つてから山へ出かけませう。」

さう云つて我々を茅屋の中に案内した。大きな、くすぶつたるろりがある。障子は黄色くなつた新聞紙ではつてある。

やがて、お時や、お花の、腕によりをかけて作つた御馳走が出る。豆や、おいもや、皆爺と由太郎の努力の結晶である。

おかずは仲々うまいが、御飯は少しくさくて閉口したが、私はわざとおかはりをした。食事がすむころには、泣き出しさうだつた空からポツリ／＼と雨がふつて来た。

「おや、わるいものが降つて来ましたのう。これでもお出かけなされますかいかい？」
「ゆくとも／＼。」

我々はお出かける事にした。

先頭は、爺が、鎌で草をわけながらゆく。次に私が種馬につてゆく。それから弟が二圓五十銭の馬につてくる。それから由太郎とお花が、破れた番傘をさしてつてくる。

所々で牛が、首に鈴をつけて遊んでゐる。白樺、落葉松、山毛榉の森林に入る。名も知らぬ小鳥がなくて梢をわたる。栗鼠が枝をチヨロ／＼渡つてあるいてゐるものもある。樹々

の根元の所には一ぱい齒菜類が繁茂してゐるのが、よくある西洋の繪のやうである。沼には一ぱい浮草が浮いてゐた。魚などが澤山居ると云ふ。

私はこれらの山々も我々の所有かと思ふと、なんとなく懐かしい気がする。そしてこれらを爺が大切にしているのかと思ふと爺にも心からのなつかしさと感謝がわくのだつた。

それから我々は山でさん／＼見物したり、遊んだりして、夕方の汽車で赤井川驛を立つた。汽車が黒い煙りをはいて動き出した時、プラットホームには、熊爺の親子が淋しく立つて、きたない手拭をふつてゐた。私は名残り惜し氣に窓から半分體をのり出して、その質朴な温かい心を持った人々をながめるのだつた。汽車はどん／＼速力を増して熊爺親子の姿は見えなくなつて了つた。

四

それから六年ばかりがすぎた。

私も、もう或る大學の高等豫科に入つて居た。

それは或る晩の事であつた。私は本を読むのにもあきたので、ふと自分の書齋を出て父の居間へ入つて行つた。——晩になると父の居間に、御機嫌伺ひのやうに出かけて行くのが、私等兄弟の楽しみの一つであつた。父は、その頃一かど有名な政治家であつたので、かなり多忙であつたが、しかし、晩に一寸子供相手に楽しく語り合ふことを、父も亦、一つの楽しみにしてゐた。父には何の道楽もなかつた。只、一家と楽しく團圓するのが一番うれしいらしかつた。しかし、父は常にいそがしい體なので仲々そのひまはなかつた。父はたいてい夜のかへりがおそくてゆつくりすることが出来なかつた。折角家に居て私等兄弟が晩に父の居間に出かけて行つても、たいていはお客があつて應接室のはうに居て、居間はがらんどか、母一人居るか、それでない時は、書類を見るのにいそがしくて「今日はいそがしいから、あつちへお出で」と云はれる日が多かつた。しかしたまに少しでも時間が出来れば父は子供等とよろこんで色んな話をするのだつた。

その晩、父の居間の襖をあけると、父は室に居た。そしてその前に、熊爺が猫のやうに

圓くなつて、かたまつてゐるのを見た。父は熊爺に、

「まあ、そんなわけだからね……お前にも氣の毒だが、どうぞ我慢しておくれ。お前の氣持はよくわかるよ……お前も、お前がまつたくたんせいした山林は可愛だらう。お前にはほんとうに氣の毒だが……」

と云つてゐた。すると熊爺は、只ペコ／＼と頭を、畳にすりつけては、

「へい／＼、旦那様。仰せは、よう解つて居りますが……私は悲しうなりますのでござります……お宅の山は木がよう茂つて居ります……北海道の山の中でも、あんな立派な山は少いのでござります……私は一生懸命たんせいしたのでござります……」

と云つてゐたが、ふと、私のはうを見て、私の入つて來たのに氣がつくと、
「まあ、これはこれは。若旦那様……なあ、お前様は北海道の山を見て下さりましたからよう、御存じでゐらつしやれますのう……え、山でござりませうが……私は手離すのが惜しうて……惜しうて……身が切られるようで……涙がこぼれます……」

と云つた。日に焼けた熊爺の顔には、大きな涙が二ツ三ツ流れたのを、爺は拳固でそれを

拂つて、氷ッ鼻すゝつてゐる。私は一寸なんの事だかわからなくて面くらつたが、私は若しやと云ふやうな不安が頭にひらめいた。その不安はすぐ的中したことが知れた、それは父がそのわけを簡単に話してくれた。

それはかうであつた。其頃私の家の或る親類で、事業に失敗してたふれかゝつた人が居た。その人は父の従弟になる男だつたが、他に助けをたのむ人がないので父に泣きついたのであつた。それで父はいつもの義侠心を出して、その人を救ふ工夫を色々考へたのであつた。しかし、私の家にはそれに出す金がすぐ出来なかつたので父は色々心配したあけく、たうとう北海道の地所を手離す覚悟をしたのだつた。こゝで助けねば従弟の一生はもう浮ばれない——地所と……従弟の一生とはかへられぬ……と父は思つたのであらう……北海道の地所を愛してゐた父にとつて、それを手離すのはたしかに苦痛であるに違ひなかつた。……しかし脊に腹はかへられぬと思つたのであらう……父はゆかりの者のだれにも親切で、皆に慈父の如く慕はれてゐた。そして誰にもよく面倒をみてやり世話をし助けてゐた。今度失敗した従弟も日頃から、父が愛してゐた男だつた……。

父の従弟を父が助けると云ふ事は私も数日前から知つてゐた。しかし、北海道の地所を手離す覚悟をした事はうすく知つては居たものゝ、何か他にやり方もあるだらうと思つてゐた私は、今、父がいよくその覚悟をして、熊爺を呼びよせて相談してゐるのだと知ると、あの地所を手離すのが私も熊爺と共に、ほんとうに惜しい氣がして來た。あの白樺の林、齒朶類の繁茂した森、栗鼠の走る岡、私の頭には六年前、馬に乗つてあるいた山の景色が浮ぶのだつた。それと同時に、あの穢い熊爺の小屋や、女房や娘や伴の事をも思ふのだつた。地所が賣られたら、あの一家族はどうするだらう。こんど買つた地主は、私達のやうに熊爺一家を可愛がるだらうか……私は、ほろ／＼と涙を流してゐる熊爺が可憐でたまらなかつた。

私も父に色々、他に方法はないのかと尋ねて見たが、それもないらしく、又父として一旦助けると明言した上は、どこまでも助けねば氣がすまぬ性質である事をよく知つてゐるので、私も、もう仕方がないと思つた。私は頭のどこかで、あの地所もいまに當然僕のものになるのだが、今賣つて了へばそれも僕のものになれないのだぞ……と云ふ氣もして

るた。しかし私自身としてはそんなに地所なんか欲しい気がしなかつた。それより、父の従弟の一生を救つてやるはうが、どれだけ尊いことかと思つた。とにかく私としても、助けると云つたからは、父の言葉も立てさせてやりたいし、と云つて熊爺も可哀さうだし、ほんとうにどうしていゝか解らなくなつて了つた。

父と熊爺の話はいつまでも結局両方で同じ言葉をくりかへしてゐた。父はやがて風呂に立つて行つた。そして熊爺は一度、玄關の書生部屋に引き下がつたが、又のこゝと風呂場へ行つて、父の入つて居る風呂の戸の外で、かたくなつて縮こまつてしくくゝないで居た。私は通りがかりにそれを見た。そして、なんだか、子供でもないで居るのを見たとき可哀さうだと可愛いとごつちやにしたやうな心持をこのあはれな老人に感じるのだつた。父は風呂から上つて戸をあけて、熊爺の泣いてるのを見ると、びつくりして、

「お前まあ、どうしたのだ……さうかゝお前の氣持はよくわかる……よくわかる、可哀さうに……心配するなお前にもな、己がいゝやうにしてやるから……」
と云つた。

やがて數日後、北海道の山林は、或る人の手に渡つたが、しかし、父は熊爺が可哀さうだからと云つて、他の方法で少し金をつくつてその或る部分の、最も爺がたんせいをした地所を残した。そしてそれと同時にその地所の一部分と金とを、永年の功勞に對する賞として、熊爺に與へたのであつた。

熊爺はそれをきくと一方には喜んだが、私は地所なんかいたゝかなくつていゝ。私は只あの地所に住つて、時々見まはるのがたのしみなのだ。あの山の樹を切られるのは我身を切られるやうなからだから……と云つて賣らずにすむのなら、賣らないでと、ひつゝこく云つて居たが、しかし、どうしてもだめだとがてんゆくと、がっかりして、しほれて、北海道にかへつて行つた。

それでも、彼にとつては或る部分の、しかも爺の愛する地所がのこされたのと、そして一部分の地所が貰へた事はせめてもの慰めであつた。爺が土地を貰つた事については爺は父に、心からゝ禮を云つて感泣してゐた。父もそれを見て、涙をうかべてゐた……

それで北海道の私のうちの山林はずつと小さい、前の四分の一もないやうになつて了つ

たが、しかし熊爺はそれからやはり、例年の通りお正月には、かゝらず、東京の私の家
にやつて来た。

まるで渡り鳥のやうに……

五

それから又数年が過ぎた。

私は大學の本科在學中に、父を失つた。そして私は若い戸主にならねばならなかつた。
熊爺は、やはり相變らず、毎年やつて来た。或る年の事であつた。熊爺は、いつでもたいて
いお正月に来るのであるが、その年にはどうしたのか來なかつた。そして五月頃やつて來
た。私達が、朝の食事をしてゐる所へ、熊爺はひよつこり入つて來た。

「おや熊爺、お正月に來ないからどうしたかと思つてゐたよ……珍らしい時に來たね。」
と母は云つた。

「へい〜。私はその……お正月に上らうと存じましたが……その……暮に女房をなくし
ましたので……その……仲が御遠慮したがいゝ申しますけに……」

と熊爺は、さも云ひにくさうに——こんな事、云つてよいものか悪いものかと迷ひでもす
るやうに云ふのだつた……

「まあ、おかみさんが……」

と母が云ふと同時に、私も、

「えッ、お時がかい、さうか、それはかはいさうに……」と云つた。

「へい、ひよつこりゆきましてのう……」

「ちつとも、知らなかつた。しらしてくれ、ばい、のに……」

「へい〜……」

「いくつだつた？」

「七十になりましたがのう……」

「さうかい……それはまあ……何の病氣だつた……」

「へい〜……田舎では卒中と申します……東京では何と申しますやら……」

「さうかい……卒中それは脳溢血……それはまあ……それぢや、こちらの旦那様と同じ病氣だね。」

と母は云つた。夫をなくして淋しい餘生を送つてゐる母には、妻をなくした熊爺の心持にも充分の同情が湧くらしかつた。その上、同じ病氣で死んだと思つてみれば、なほ感慨が深いのであつた。

「それで、お前は、その時、家に居たの？」
と母はきいた。

「へい〜、それが不思議なのでござります。私はその時、三里ばかり離れた所に用事がござりまして行つて居りましたが、なんだかうちの事が氣になつて仕方がござりまんげに用事をいゝかけんにいたしまして歸る事にいたしましたのでござります……蟲の知らせでござりまするのう……所が……お前様……うちにかへりますと、急に、女房が具合が悪うなつたちゆうて、よい所へかへつてくれたと云ふ始末でござります。その朝までは女房

も、どうもなかつたのでござります……それで私はすぐ、お医者様へ行かう思ひまして……」
「お時や、己は医者様へ行つてくるで、お前は氣をたしかに持つてをれ」と申しまして女房の事は伴にあづけて、私は早速、馬を引き出して、それに鞍を置き、それを引つばつて三里ばかりあるお医者にかけてつたのでござります……私は氣がせてをりますので、乗つて行きたうござりましたれど、乗つて行つては馬がつかれて、歸りに走れんようでは困ると思ひましたけに、たづなを引いて、かけて行つたのでござります……やがて三里の道をかけまして、お医者様へ参りますと、丁度お医者は、少し風邪氣味だちゆうでねて居られました……そしてお医者様の奥様が「今日は少しかけんがわるいで、どうぞかんべんして下され」と仰せられましたけど、私は女房の死ぬか生きるかの事でござりますから、どうぞ、先生様に會はして下されとおねがひすると、お医者はいゝ方でござりましたのう……出て來られました。」

「お前、初めてそのお医者にあつたのか。」

「へい〜。初めてとござります。お医者様などにかゝる病氣はようせんのでござります

……それで出て来られましたので、私はくはしく、女房の容態を話しますと……お医者様は『さうか、それでは行つてやらう』と云つて、奥様のとめるのもきかないで、出て来て下さいました、私は手を合せておがみたい位ありがたいと思ひました。私のその馬にのつて下さいましたので、私は、その馬の口をとりまして、かけ出したのでございます。一里半程、馬の口をとつたまゝ走りますと、お医者様は『これく爺さん、わしはお前さんがはあく云つて居ると、氣の毒で、馬が追へん。……わしは乗馬の心得はある……かういふ所で醫者をしてゐると、どこへでも馬でゆかんなんので、もうのりなれて上手ぢや、どうだ。馬の口多離してくれい。わしは病人が氣になる。一刻も早く行つてみてやりたいこの馬は道を知つて居るか、道は馬にまかせて走るから、お前さんは、あとから來い』と云はれました。それで私は馬の口を離しますと、お医者様は、馬に一鞭あて、とんでゆかれました……ほんとうに御親切なお医者様でございました……それで私はあとから走つて参りましたが馬はすぐ見えなくなりました。しかし、馬はよう道を知つて居りますのでその先生様は、馬に道をまかせて、私のうちにおつきなされたのでございます……私がう

ちにかへりつきますと、女房はもう事切れて居りました。それでもお医者様はまにあつていろく手當を下すつたのださうでございましたが、もう卒中では仕方なかつたのでござります……それでも先生様がまにあつて下すつたのは何よりありがたい事で、それで心のこりはござりません……』

爺の眼には、いつしか涙が一抔たまつてゐた。母の眼にも涙が光つてゐた。私の眼には、親切な醫者が、自分の風邪を冒して、馬にのつて走つてゐる。その馬がよく道を知つてゐる、女主人の大事の場合に醫者をまにあはせようと、知つてゐるか知らぬか……とにかく道を知つてゐて走る……ひた走る……そしてあとからいきせきつて熊爺がとほくと走つてゐる有様が映つてゐた。

『爺やその感心の馬はどの馬だ？ あの種馬か？』
と私はきいた。

『へい〜。いえ〜。あの種馬はもう人にゆづりました。その馬はさう〜若旦那様はようござり存じであらつしやれます。あの仔馬のはうでござります……お前様も御舎弟様もの

らしやれましたのう……あの時はお前様方もこんな坊んちやまでいらしやつたが……」

「うん……あの二圓五十錢の馬か……」

「へいへいさやうでござります。よう覚えて居られますのう……その二圓五十錢の馬でござりまする。」

「さうか……二圓五十錢の馬も中々働くなあ……」

「へいへい……」

六

それから又数年たつた。熊爺はもう年をとつて、毎年は來なくなつたが、一年おき位にはそれでも來た。ある年の事であつた。熊爺が來た、私はふと思ひ出して、

「どうだ爺、二圓五十錢の馬は速者か……」
ときくと、

「へいへいあれも、病氣で死にました……」
と云つた。

「さうか。それは可憐さうなことをした。」

「へいへい可憐さうでござります……あれも、よく働きましたがのう……」
と云つた。

「それぢや、馬はもう居ないのか。」

「いえへい。居ります。又こまいのを買ひました。伴がたんせいして居ります。伴にも、子供が出來まして……へいへい男の子でござります……へいへいありがたうござります……その子供が毎日、そのこまい馬と仲よう遊んで居ります……」

熊爺の心はもう北海道の我家にとんでゐるらしかつた。可愛いへいへい孫の姿。仔馬とたはむれてゐる、その圓々とした男の子のチョコくした姿が眼の中に一杯に廣がつてゐるらしかつた。熊爺の顔には、はるかに孫の事を偲ぶらしい可愛らしい表情がうかんだ。それは黠くちやの頬がくづれさうな何とも云へぬみるからに可愛い、表情だつた。

もう熊爺の心では、きつとその孫をかたく抱きしめて居るに違ひないと私は思ふのだう
た。

—

種ヶ島の名人

ボカ／＼とした太陽は障子の下方を、眼に痛いまで、眞白く輝やかして、縁側を温めて居る。

稻富喜太夫は、その温かい日光を、體半分下の方に受けながら、障子によりかゝつて、うつとりした心持で、戸外をながめて居た。

静かな日だ。庭の樹々は、葉一枚、動かさうともしない。出たばかりの若葉には、キラキラとした日光が反射して居る。遠方の森は死んだやうに静かだ。

喜太夫は、身も心もとけてゆくやうな感じがした。それは、覺めながら夢む夢心地のやうに心持がよかつた。喜太夫は、數十年來、こんなゆつたりした心持になつた事はなかつた。

「あゝ、いゝ天氣だ。どれ、又、今日も種蒔きでもやるかな。」

喜太夫は、まぶしさうな眼をしながら小菊を顧みて笑ひながら、さう云ふと、大きな體をぐつとおこしてのびをした。

「あゝ、もうどうぞ止めて下さいまし。私は昨日の、種蒔きのお姿を拜見して、涙が流れました。日本一の種ヶ島の達人として、天下に其名の響いた方があのお姿……」

小菊はさう云ひながら、立たうした喜太夫の袂をひいた。喜太夫はこの言葉をきくと「又か」と思つた。この女は、まだ、わしの名を逐はうとして居るのか。この女は、今では、もう心からわしを愛して居る。しかもこの女は、まだ、わしの蔭を逐はうとして居るのだ女にとつて、如何に「天下に響いた名」が戀しいものなのだらう。さう思ふと彼は一寸、いやな氣もしたが、又一方に得意の氣もした。小菊の氣持もわかる。そして小菊が、自分の「名聲」に憧れてゐるのを拂ひのけるのは慘酷の氣もするし、又それは自分自身にとつても又妙な危険の豫覺もあつた。えゝ、又知らぬ顔でゆけ。突嗟の間に、殆んど自分も氣がつかない位に機械的にこれだけの事を考へた。そして、喜太夫は、ひかれるまゝにその

上體を小菊の方によせながら、

「なあに、百姓も昨日やつてみると仲々面白いものだからさ。」

と云つた。そして「お前がさういふなら」と云はんばかりに、持ち上げかけた上體をがたりと音をさせて、又障子によりかゝつて了つた。しかし、内心は、さう我々もいつまでも遊んで居られない。食ふ事も考へなければならぬと思ふと女の心や、種ヶ島以外には又何にも出来さうもない自分が何となく淋しく思はれたけれど「えゝどうにか其時は又なるだらう」と無理にそれを思ふまいとした。彼は只、現在小菊とかうして居るのがたのしい夢のやうな氣がした。彼は小菊に酔つてゆく氣持以外の事は思ひたくなかつた。何もわすれやうとした。しかし、彼の心にはいろんなものが湧いて來た。自分の未來、世間の非難——しかし小菊をみるとそれらの心も只わけもなく消えて、小菊の美しい醫の中にとけこんで了ひたかつた。小菊は豫想通りではあるが、喜太夫がすぐ自分の言葉に従つてくれたのが妙に嬉しかつた。

そして、心に「名聲」の主としての喜太夫を思ひ浮べるのだつた。

「ほんたうに、城内ではあなたの御出仕や御退出の時、遠くからする分お噂するのでございます。ほら日本人一の種ヶ島の達人が通られるとて、誰しも珍らしいものでも見るやうに、あなたをながめます。そんな時、人しれず、私は轟く胸をおさへて居りましたに、今かうして、二人きりで居りませうとは、ほんたうに夢のやうでございます。」

この言葉は喜太夫の心をも、又過去に走らせた。喜太夫は、日本一の種ヶ島の達人として人々に噂され尊敬されてゐる事をよく知つてゐた。そして彼は常に城中やその出仕や退出の折も、しやつちよこばつて、氣どつて、其舉止にわざと偉容をつけようとして居た、あの日頃の、自分の姿を思ひ出した。今の彼にとつてそれはくすぐつたい心持がした。彼がわざと偉容をつけようとした事でも、人々にはそれが眞の偉容に見えるらしかつたのだ。人々は「達人」として、頭から尊敬してかゝつてゐるので、凡て彼のする事なす事は、何でもよく見えるらしいのであつた。喜太夫自身それにはほゞ氣がついて居た。しかも喜太夫は、自分自身にも、わざとそれをさう感じまいとして來たのだつた。そして、彼はつけ偉容をした。そして彼の心は常に小心翼翼として小細工を弄してゐたのだ。しかも彼の評

判は常によかつた。殊に彼が子供の無い妻を失つてから、長く獨身で居た間、腰元衆の間には、殊に彼の「名聲」が評判されるのを、感づいて居た。そして、彼の心には寧ろそれをいゝ事にする氣持があつた。そんな彼の過去の姿を、今、彼は思ひ出すと、なんだか恥かしいやうな氣がした。そしてそんな醜態して居た自分の姿は、すつと遠い過去の氣もするのだつた。しかも小菊はまだその時代の自分の蔭を逐つてゐるのだと思ふと、それは淋しいやうな、くすぐつたいやうな氣がするのだつた。しかし、彼は殆んど習慣的のやうに、それを顔色にも出さなかつた。そして小菊の言葉を軽くうけて、

「お前と初めて口をきいたのは、あの南蠻寺へお参りに行つたかへりだつたな」

と云つた。小菊の心は、その言葉から起る甘い思ひ出にすぐ飛んで行つた。

「あの夜は美しい月夜でございました。しろがねの月が、墨繪のやうな山々に、出たり入つたりして舟を追うて居りました。私は二人の姿が月に見られるのが恥かしうございました。」

うら若い小菊は、初めて喜太夫に云ひ寄せられた日の事を思ひ出すと、すぐ甘い詩的な

感傷的な酔ひ心地になつて行つて、かう云ふのだつた。それを喜太夫は「可愛い、奴だ」と思つた。しかし喜太夫には、美しい小菊には只引づられてゆき、酔はされては行きながらも、しかももうそんな詩的な感傷的な氣分にはなれなかつた。彼は只、だらしなく酔はされるばかりであつた。そしてその自分の心によく氣がついて居ながらもどうにもならぬ喜太夫は、只この小菊の感傷的の氣持を間接に味つてそれを樂しむより仕方がなかつた。そして喜太夫は初めて、小菊に云ひよつた舟の中の事も思ひ出すのだつた。

喜太夫は、大勢の腰元衆の中で、可愛らしい初生な小菊に元から眼をつけて居たのであつた。しかし、それは決して戀と云ふ程ではなかつたのである。第一、喜太夫と小菊とは餘りに年が違つてゐる。喜太夫はもう四十で小菊はまだ十八であつた。喜太夫は自分の子供のやうな年齢の小菊に戀をする氣にもなれなかつたのだ。所がある時、彼は南蠻寺へ参詣に行つた歸途、丁度小菊と一所になつた。小菊は奥方の代参に行つたかへりだつたのである。そして小さな舟で、二人は乗合つた。二人は同じ城中の者で知り合つてゐる所から小さい同じ室に入つたのであつた。その夜はいゝ月夜だつた。丁度戀をさゝやくのにいゝ

場面だった。小菊の顔は美しかった。月に照らされて彫刻のやうだった。そして唇だけは赤かった。喜太夫はふらくとした氣持になつた。そしてふとしたたはむれ心から小菊に云ひ寄つたのだつた。小菊は初め驚ろいた。小菊は喜太夫の「名聲」にはつねに尊意を表し、只わけわからず、偉い人として崇拜してゐた人であつたけれど、餘り年が違ふので若い男に對するやうな「恥かしさ」は感じなかつた。そして、この小さい舟に同室したのであつた。しかし、小菊は、喜太夫の「名聲」に憧憬してゐるものであり、そしてやはり、かういふ小さい船室で、二人切りになれば、或る壓迫は感じて居たのである。それはやはり異性の壓迫であつた。所へ喜太夫は云ひよつて來た。小菊は初め、戲談だらうと思つた。しかし喜太夫の顔は眞面目であり、熱情に燃えて居るやうに見えた。小菊は其時はもう喜太夫の年齢などは忘れて了つた。そして其處に只、彼の赫々たる「名聲」が光つてゐた。多くの人々にもてはやされ、城内に於てもとかく女共の評判になる「名聲」が光つてゐた。小菊はその「名聲」の主に云ひよられた意外の喜びがあつた。そして彼女は、その「名聲」に引きづられるように引つぱられて行つた。そして喜太夫に應じた。すると今迄は、

只「名聲」に引かれてゐた虛榮心は、かはつて初生な處女心の燃えたつのに變つた。そして、彼女の性は、異性の前に只、若々しく波うつつを感じた。彼女は遂に喜太夫の「名聲」から、遂にその「男」にひかれて行つた。喜太夫は初め、小菊に云ひよつた時、きつと小菊が、自分の「名聲」によつて應じるだらうと思つてゐた心が、うまくあたつて來た愉快と得意とを味つた。彼は自分が「日本一の種ヶ島の達人」である事を、彼自身、益々らしいものにも思ひ、同時に有難く思つた。彼には、小菊が「名聲」につられて應じて來た氣持はよくわかつた。しかし彼は、それをいゝ事にして利用してやれと云ふ氣になつた。そしてそのなりゆきにまかした。しかし小菊の純な心が次第に熱しるのを見て彼の心は本統に小菊の心にこんどはひかれて行つた。妻を失つてから、子もなくして愛に飢ゑた喜太夫の心はやうやく本氣になつて、この可憐の異性に向つて行つた。そして遂に彼はもう自分の「名聲」も何もわすれて了つた。そして小菊の愛の中に溺れてゆきたい氣持になつて行つた。小菊は男が熱して來たのでなほ熱した。遂に二人は本統に愛し合ふよふになつたのであつた。

今、喜太夫はあの夜の事を思ひ出した。そして、自分は只もう眞實に小菊を愛してゐるが、小菊は自分を眞に愛しながらまだ自分の「名聲」の蔭に心を引かれてゐる事に気がつくのだつた。いや小菊は初めから「名聲」に引かれてゐるのが、どうして戀に落ちたのか、その自身の心持をよく知りぬく程、自分をみつめないのだ。と、喜太夫は思ふのだつた。しかし「名聲」がなかつたら、何で種ヶ島以外には、何一つとりえない、だめな自分を、しかもその二十も違ふ自分を愛するものかと思ふと、彼は、急に小菊が可憐さうでたまらなくなつた。その可憐さうと云ふ氣持は、可愛い、と云ふ氣持だか、どつちだかわからぬやうな變なものだつた。彼はそんな氣持を味ふと、あの初めて言葉を代はした夜の事を思ひ出して、詩的な追想に酔つてゐる小菊を、思ひつ切り抱きしめてやりたい衝動に驅られた。

彼はぐつと、小菊を引よせた。小菊は狂的の彼の熱情の發作に吃驚したが、すぐ、可愛らしい唇を浮べて、彼の巖丈の腕に抱かれる心持よさに酔はうと見がまへた。喜太夫はその有様を見ると、又可憐さうと可愛い、と、ごつちやになつた氣分がもう一度、二重に心

K. 1. 4

に、こみ上げた。するとそれは、思ひつ切り堅く抱く衝動を、いきなりなくさせて了つた。彼は、そのまゝ、小菊を又元の位置に押しかへした。そして、ぢつと小菊の眼をみつめるのだつた。彼はその熱情に燃えた眼で、小菊の眼の中を突刺すやうな氣持で見すゑた。小菊には、彼の心がわからないので、一寸テレた氣持になつた。そして、その視線をふつと彼のチヨン髷にそらした、すると彼女の視線は其處で、彼の横髷の所で、二三本の白髪に止つた。彼女の視線は、恐ろしい氣持の悪いものに會つたやうに、たぢ／＼とたぢ／＼だ。彼女はその白髪が今度は氣になり出した。小菊は、それを云はうか、よそうかと迷つた。小菊はそんな事を思ふのさへ嫌だつた。しかし、事實、もう見て了つた以上仕方がなかつた。小菊はそれに、喜太夫の、わけのわからない氣持で、テレた氣持にもなつて居たので、思ひ切つて、

「まあ、あなたのお髷に、白髪が二本ばかり生えて居ります。どうぞ、私にぬかして下さいませ。」

と云つた。喜太夫は、これをきくといやな氣がした。侮辱された氣がした。さつきの可憐

と可愛い、とごつちやになつた氣持は、それで、すつかりふつとんでしまつた。その氣持はすぐ彼の顔色に出た。それを見た小菊が、これは悪い事を云つたと思つて、はら／＼してゐる氣持が、又小菊の顔に出た。それを見ると、喜太夫は、又小菊を可憐さうに思つた。そして彼自身の氣持が淋しくなつた。この女はやはり若い男が、のだ「名聲」によつて己になびいて來たもの、やはりこの女は「若い男」をもとめて居るのだ。無理もない。無理もない。だから強ひて己を若い男にしたがつて居るのだ。そんな事を思ふと、横髪に白髪の出るやうない、年をして、こんな子供のやうな小娘にうつゝをぬかして居る、自分自身の臍甲斐無さが、淋しくなつて來た。己も次第に老いてゆく。そして己の「名聲」は世を捨てた以上なくなつてくる。それどころか、己は不忠者の不名譽を世の中から浴びせられて排斥されてゐるのだ。この女がいつまでこの己を慕つて居るだらう。今でこそ、この女は己の「名聲」によつて驕いて來たのも何も氣づかず、只己に夢中になつて己を愛して居るが、それがいつまで續くだらう。續いたとしても、それがこの女の幸福だらうか。こんな事を思ふと、彼は益々なんだか淋しくなつて來た。しかし、彼は小菊が、おど／＼した眼で彼

の顔をのぞきこんで居るのを見ると、又その無邪氣の眼が可愛ゆくてならなく思つた「今の言葉なんか氣にかけてやしないよ」と云ふ所を見せてやりたくなつた。彼の不愉快の顔はさう彼が思ふ事によつて、それがすぐ彼の顔面神経に電氣のやうにつたはつた。彼の不愉快の顔は、急にかはつて、女の心をうけ入れてやる優しい笑ひがうかんだ。

「白髪があるつて、わしは若い時から時々、一二本出たものだ。どれ一つぬいて貰はうか」かう云つて彼は、女の方へ上體をまけた。そして女の膝の上に、頭をおとした。そして柔らかい、なま温かい觸覺が、頬のあたりに傳はると、喜太夫は今の不愉快になつた氣持も何も忘れて、只、うつとりするやうな心持になつた。小菊は彼の横髪の中からも白髪をさがし求めて、つまむで引ぬいた。さうして、もうないかと、又そのあたりの毛をかきわけてみた。

此時、庭の茂みの中から縁側のすぐ先きに、いきなり二人の大男が、飛込んできた。この物音に、ふつと、そつちをむいた喜太夫は、二人の男が飛込んで來たと氣がつくと、いきなり、むつくとはね起きて、キツとなつて、そつちを睨んだ。彼の、心のどこかにかく

れてゐた、武士的の神経が、びんと響くと、緩みに緩んだ彼の筋肉は、きゆつと引しまつた。彼は、久しぶりに、そんな緊張した心持の快感を、胸がすくやうに、ぐつと胸のみぞおちのあたりに感じた。

しかし、その二人の闘入者が、武士である事を氣づき、そして、その二人の顔を見た時喜太夫の、心臓は又別のショックをうけた。喜太夫は夢から覺めたやうな氣がした。この二人の闘入者によつて、喜太夫の世間を捨てた靜かな「夢の世界の中の生活」はもろくも破れねばならなかつた。喜太夫の全身の緊張をした筋肉は、この胸のショックによつて、いよいよ硬化して、こんどは堅くしやつちこばつてしまつた。體の全體は石のやうに堅く、そして顔の邊りががく／＼と軽く動いた。彼の顔は一度、眞青になつた。そして次の瞬間、その青くなつた顔は、こんどは赤くなつて來た。脊中のあたりに油汗が流れ出した。彼の心はどきまぎした。「悪い所を見られた！」と思ふ心持「どうしてやつて來たのか」と思ふ恐怖それから自分自身の武士としてあるまじき振舞ひをしたうしろめたさからくる羞恥、彼はいきなり二人に喰つてかゝらうかと思つた。しかし、種ヶ島ならいざしらず、刃の仕合ひで

はとても勝味がないのを彼はすぐ心に感じた。ことに相手は二人である。そして彼には小菊と云ふ手足まとひがある。彼はどうしていゝか解らなかつた。彼はそれをごまかすために、

「一言の挨拶もなく、庭からしのび込むとは無禮ではないか！」とどなつた。

「無禮もくそもある者か。やいこの腰抜け武士。いや武士と云ふのもげがらしい。この人非人。貴様は何と云ふ恩知らずの犬畜生か。武士たる者が、おめ／＼とよくもそんな面をしてこんな醜態を演じてゐられるな。さあ尋常に己達の繩にかゝれ。手向ひすれば、まづ二つだぞ！」

二人の闘入者のうちの一人が、憤怒の眼をむけながらかうどなりかへした。

「何の御用で、君達は己を繩にかけるのだ！」

「君達だと、馬鹿野郎、貴様のやうな奴は、もう友達ではないわ。武士の風しにもおけない奴だ。さあ手向ひするか。」

一人がかう云ふと、同時にもう一人は、

「しらばつくれるな。わけは貴様の方がよく知つてゐる筈だ。我が君の御出陣の御留守を大阪方から奥方様を入質に取らうと云ふ奸計に、奥方様は女ながら、二人の和子様を刺殺し遊ばして美事の御生害遊ばし、河北石見、小笠原正齋其他の人々、皆奥方様に潔よく殉死致して居るのに、貴様は何事だ。殊に貴様は、お實家、明智方から奥方様にお供をして参つたものではないか。それをよくも思知らずの奴だ。大事の時に、そのドサクサまぎれに乗じてお館を抜け出すとは、しかもこの醜態は何事だ。我が細川家に貴様のやうな者を出したとあつては世に對しても武士道がたぬ。武士道に對して相すまぬ。御家中の人々も、皆貴様を八ッ裂きにしてもまだ足りない」と云つて居るのだ。殊に御家老様は、草をわけても貴様を探し出し、殿様のおん前につき出して上げねば、家來の申わけがないと云つてお出でだ。それで己達は、御家中の者共の意志を代表して、貴様のありかを尋ねるうち、やうやくこゝと知れて来てみれば、あゝ何たるさまだ。見るさへも汚ららしい事ださあ。尋常に繩にかゝれ。ぐつぐつ云へば八ッ裂きだぞ」とどなつた。

喜太夫は、庭先に初めて二人の闖入者を見た時に受けた胸のシヨックが、こんどは胸ぐ

らを捕へられ、そしてぐづぐづと締めつけられるやうに感じた。二人の顔を見た時感じた恐怖の豫覺は、いよゝゝ本物になつて喜太夫に迫つて來た。そればかりではない、喜太夫は羞恥もいよゝゝ激しく心をせめてくるのだつた。喜太夫の體にはやはり武士的の血が流れてゐる。さういふ雰圍氣の中で生活して來た彼の心には、やはり武士道的の氣持を感じない事はなかつた。彼は今、二人の友の顔を見ると、恥かしさにたえなくなつた。いゝ年をして、一婦女子の戀の爲に大事の場所を逃けて來た自分の行爲が、決していゝものだと思へなかつた。いやそれは確かに恥かしすぎた位恥かしい事だつた。しかし、彼は小菊の事を考へるともうどうする事も出來なかつたのだ。我身の名譽にかへても、只、小菊と生きたかつたのだ。彼は今、二人の友の前で心から腑甲斐ない恥すべき自分を見出すのだつた。

「いや、決して手向ひはしない。かうして己が逃れて來たのは、それは己の宗旨からだ。切支丹では自殺は許されないのだ。」

彼は相手にも、又自分自身の心にも辯解がましい事を云つて、自分の恥かしさをかき消

さうとした。しかし彼自身の心にも、それが餘りに口實である事がわかりすぎて居た。そしてかう云つてみると、彼はそんな口實を云ふ自分の心がなほ恥かしくなつた。

「口實を云ふな。宗旨なら奥様方も切支丹だぞ。しかし奥方様は日本武士道を完うして貞烈な御最後を遂げられたのだ。その御家來ともあらうものが……いやもう言葉はめんだうだ……さあ。來いと云つたら來い。おい君面倒だ。引つばつて行かう！」

と一人はもう一人を顧りみると、二人の武士は、いきなり土足のまゝ、縁側に上つて、喜太夫の両手を、いやと云ふ程、堅く握つて引つばつた。喜太夫はよろ／＼よろけて縁側から下に、引きづりおろされた。

二人の武士は、ぐん／＼と庭先から彼を引きずつて行かうとした。喜太夫はもう恥かしさも何も忘れた。そして心には只、反抗がむらく／＼とわいた。しかし力にはかなはなかつた。彼はそして只小菊の事が氣になつて、小菊の方をふりむくのだった。

小菊は二人の武士が、庭先に入つて來た時から、どうなる事かと、只、青くなつて震へて居たが、今、喜太夫が二人に引つばられて行くのを見ると、夢中になつて、庭先の喜太

夫めがけが飛びついた。

「どうぞ、私も一緒につれて行つて下さいませ。どうぞ私も……！」

さう云つて喜太夫の裾にすがりついた。

しかし、二人の武士はそれを足で蹴とばした。

「もしお二人様、どうぞ、私もおつれ下さいませ。これには仔細のあることでございます喜太夫様一人が悪いのではありません。みんな私が悪いのでございます。お上に出て、私も一言申上げたう存じます。どうぞ、おつれ下さいませ。」

小菊の聲はヒテスリツクにかすれて居た。手足が、ぶる／＼と震へて、みだれた髪の毛がびり／＼うごいて居た。しかし二人の武士はぐん／＼喜太夫を引つばつた。

「貴様には用はない。己達は只、こいつを制裁すれば、いゝのだ。」

と武士は云つた。そして小菊を又足で拂つた。

「あゝ、あぶない。早くどいて／＼……お前は達者でくらせ！」と喜太夫は小菊に云つた
「いゝえ。／＼。一緒に。一緒……！」

小菊は云つた。ぬれた眼から涙がつきなかつた。そのうちに、このもみ合つてゐる四人のかたまりは、いつしか、庭から、そとに出た。そして、細い人の居ない道をもみ合ひ、どなり合ひながら、半町ほど歩いた。すると其處はもう街道筋である。根元のあたりが砂埃のために白くなつてゐる大きな松の並木が兩側に延々と續いて居る。

丁度その時、向ふのはうから、大名らしい殿様が、馬に乗つて家來をぞろぞろつれてやつて來た。しかし、もみ合つて居る四人には、其大名らしい殿様が來た事は氣がつかかなかつた。その行列がだん／＼近くなると、馬上の殿様は、行手に喧嘩でもして居るやうなものが居るので、

「誰か行つて静めろー」

と云つた。すると四五人の家來はすぐ、その方へとんで行つた。

「おい。静まれ。お通りだ。松平下野守様のお通りだ。下に居ろ。」

四人の耳にかういふ家來衆の聲が入ると、四人は、それはもう一度頭の中で考へる暇もない程速く、それはまるで習慣運動のやうにすぐ、全身の神経は末梢にまでその聲が響き

わたつて、四人は電氣にでも感じたやうに、ハツと地べたに平伏した。そこへ松平下野守の行列はやつて來た、やがて下野守がくると、

「何事だ。」

と彼は、平伏してゐる武士をみると云つた。一人の武士は「た」と思つた。少しでも手柄をかういふ身分のある人にきかれる事は、何かのために利益であるのを彼等はよく知りすぎて居た。一人は、早速、

「恐れながら、稻富喜太夫を召捕りました所でございます」と云つて又平伏した。

「なんぢや、稻富？ うん。誠にお前は、稻富だな。めづらしい所であつた。お前は如何したのだ」と云つて、下野守は袴もはいて居ないし、刀もさして居ない、亂れた喜太夫の姿に眼をつけた。

喜太夫は、只もう恐縮した。穴に入りたいやうな氣がした。そして全身の神経は感覺を失つたやうにほんやりして、それで全身の筋肉は、石のやうにかたくなつた。彼は、もぐらのやうにかたまつて平伏して了つた。

二人の武士は、いよ／＼うまくなつて来たと思つた。

『恐れながら、私から申し上げます。』

かう一人は口を切つて、それから、實は、細川忠興候の奥方が、大阪から人質に招かれるのを行かないで館に火をつけて自刃された時、多くの家來共は皆殉死したのに、こいつは逃げ出して、しかも腰元風情と、こゝに潜んで居たのを、私共が武士道の爲に引つとらへた所だと、二人代る／＼で話した。

それをきくと、下野守の心の中の武士道的の血はカツとなつた。下野守の額頭のあたりがビク／＼とした。

『たわけ者！ 腰ぬけ武士！』

と、どなりつけた。この言葉に、喜太夫は、そのもぐらのやうにかたまつた體を又キユツと一層縮めた。そして額を土の上にすりつけた。脊中には、煮え湯と水と同時にかけ入れられたやうに、脊筋のあたりが、ぞつとした。喜太夫は暫く額をすりつけて居たが、さうすると涙さへ出て来た。自分自身の臍甲斐なきがくやしいのか、何だか、わけのわからない

い涙だつた。

下野守はその恐縮してかたまつてゐる喜太夫を見て居たら、なんだか可憐さうになつて来た。それに彼が涙を流してゐるのを見て居たら、どうやら『もしや』と云ふやうな『或る考へ』が彼の心の中に浮いて来た。彼は元から稲富の『名聲』に大いに尊敬を持つて居たものだつた。それ故益々、その考へが本統らしくも考へられて来た。そればかりでなく下野守はすぐ人に好意を感じる好人物だつた。下野守は一時はかつとなつたが、彼の心に或る考へがうかんでくると、ひそかに自分の尊敬して居た男が、自分の前に恐縮して涙をうかべてゐるのを見ると、彼は何か好意を表はしてやりたい氣もして来た、彼はそれに今自分の考へついた考へを、發表してみたい衝動にもかられた。

『しかし、まてよ……』と下野守は遂に口を切つた。

『天下に其名を謠はれた、種ヶ島の名人、稲富喜太夫ともあらうものが、一婦女子の戀に溺れて、武士道を捨てたとは受けとれない。これは何か深い仔細があらう……うん、さうだ。若し稲富が死んだなら、折角オランダ人からその秘法をつたへられた名人がなくなる

わけだから、それで恥を忍び人の口に臆病者不忠者と云はれるのを忍んで逃れたのであらう天下に種ヶ島の秘法をたやすのは誠に惜しい事である。さうだ。それに違ひあるまい、お前の苦衷は察しても餘りがある。お前こそ、眞の勇者だ。よくわかつた、それに違ひなからう、稲富、さうであらう』下野守の口元には、一種の得意の色が浮んだ。下野守は、自分の頭が、かういふ時に臨んで、いつも機敏に働らいて、一寸面白い獨創的の論法を考へ出す特長を持つてゐると云ふ得意さがあつた。いや、たとへそれはそんな獨創的の見解でなくとも、とにかく彼の「地位」が、いつも彼の口の通りに何でも處理さす力を持つて居るのである。そして彼は今迄に、凡ての人から排斥されて居るやうな者を、彼一流の解釋の仕方、度々理窟をくつゝけて救つて來た。しかも其度に彼は「天晴れ名君」だと人々に賞められ、へられて來た。彼にとつてそれは一寸道樂的の面白さがあつた。彼は今、喜太夫をかう云つて救ひ出す事が、彼が又「名君だ」と云はれる結果になるだらうと云ふ。意識しない位、臆氣の豫想が、心のどこかにはあつた。

かう下野守に出られると、喜太夫はびつくりした。それは豫想だにしなかつた事である

しかし、彼は自分の心の中を考へてみると、全然そんな氣がしなかつたとも云へないと思つた。と云つてそれならその爲に逃げたのだとは正直の所やつぱり云へなかつた。彼は何と答へていゝかわからないので、唯、黙つて平伏して居た。しかし彼の心では、地獄で佛にあつたやうなほつとした氣持になつて來た。

「どうだ。さうだらう。うん。さうに違ひはない……わしは日頃からお前の腕前が羨しく思つてゐるのだ。いや尊敬も持つてゐるのだ。わしもお前のやうな腕を持ちたいと思つてゐるぞ。」

と云つた。そして彼は益々、稲富に好意を感じて來た氣がした。

さつきから、話の風むきが大分違つて來たので、二人の武士は、少し妙なそわ／＼した氣持になつて來た。そこで一人はそのテレかくしに「いや恐れながら、殿様の御勇名は、天下誰とて知らぬ者はございません。近き關ヶ原の合戦に、眞先に立つて島津義弘本陣にせまり拔群の功を立てられ、御父上、大御所様も大へん御賞め遊ばしたと云ふ事も、誰知らぬ者はござりません。殿様の御腕前こそ御美事かと存じます。」

と云つた。下野守は、それを聞くとうれしい氣はした。しかし、此場合、やはり稻富をほめてやりたかつた。

『うん、わしの腕前も多少は勝れてゐるかもしれぬ、しかし、それは一つには、わしの地位と名が助けてくれるのだ。わしが強いと云ふ事は、敵も味方も知つてゐるのだ。それでこのわしが名のりを上げて行くと、戦はぬ先から、向ふは弱味を感じるのだ。だから、わしは、眞にわしの腕がどの位強いかためす事すら出来ないのだ。ところが、稻富の種ヶ島は違ふ。ねらひが狂へばあたらぬのだ。いつも本統の腕が明白にわかるわけだ。さうだらう。稻富。』

下野守は、人のいゝ好人物の笑ひを口にかべてうまいことを云ふだらうと云はぬばかりの顔をしてかう云つた。そして又『うん、わしはいゝ事を考へついた。わしは細川殿に添書を書いてやる。それを持つて、行け。細川殿もそれがあれば決して悪くはなされぬであらう。お前はその種ヶ島の砲術の秘法を、細川殿の部下に傳授してやれ。それに今後は益々天下は多事だ。これからまだ、世を上げて戦ふに到るかもしれない。其時、お前は充分

お前の腕を振ふがいゝ。そしてお前の眞の心を示してくれ！』と云つた。

下野守は、家康の息子であるこの自分が添書をやれば細川も何とも云へまいと云ふ事がよくわかつて居た。そして稻富が教はれるであらうと云ふ事も愉快であつた。稻富がそれで種ヶ島の秘法を傳へれば、それは細川の爲にもいゝ事だ。と思ひながら又、この稻富の種ヶ島を、來るべき大戦争に大いに利用してやれと云ふ氣持もどこかにあつた。彼は、稻富を助けようとする自分の心の善良さに、そんな利己的の氣持がついて居るのを意識した。そして、かういふことをすることが常に後後、實際いゝ事になつて彼の身にまはつてくる経験も知つてゐた。しかし、彼はそんな事より、今實際、危地にあつた、日本一の種ヶ島の達人を、自分の論法で救つた事が何より愉快だつた。そしてさういふ事が自由自在に出來、それが「名君」として喧傳されるに到る自分の「地位」の優越さを一方に於てくすぐつた。いやうなすまないやうな氣がしながら、一方に於てはそれをいゝ事にして利用してやれと云ふ心持と兩方が渦巻いて居た。

喜大夫は、初めと風むきがすつかり違つて來たので、やうやく心持が落ちついて來た。

喜太夫には、下野守が、自分を、買ひかぶるふりをしながら、やはり心のどこかでそれを信じてゐる氣持もわかるし、「地位」を利用して彼を助けて愉快がつてゐる氣持も何もかもよくわかる氣がした。しかし、彼の心のうちにわざとそれらの下野守の心持を分折する考へを退けて、下野守の人のいゝ善良な氣持だけを、有難くうけ入れようとした。そして又自分自身の「名聲」と云ふものが、如何に凡てをチャチファイするものかと云ふ事もつくづく有難く思ふのだつた。そして彼は「いや己は實際、日本一の種ヶ島の名人だから、この位のことであつていゝのだ。實際下野守の地位と云ふ助けのある「名聲」より己の本統の腕前の「名聲」の方が上だからな」と云ふ氣もした。そして、さう思ふと、彼の心はもう早やくも「野心」が湧いて來た。下野守でさへこの位、己を大切に思つて居られるのだ。實際、己はこの次の天下の戦いで、又己の腕を示してやれ。種ヶ島の大砲で天主閣位を、ぶつとばす位の事をしでかしてやるぞ。と云ふやうな愉快な氣持さへ湧いて來た。

下野守は、家來から矢立を出させて、懐紙に何かかきつけて居た。

「うん。これを持つてゆけ……わしからも直々の使者をも立てやうが……」

下野守は、さういつて、その紙を小さく折つたものを家來に馬上から渡した。家來は恭しくそれを受取ると、平伏して居る稻富に渡した。稻富はそれを受取ると、もう今自分の腕を得意がる氣持も「野心」も何もかも忘れて、それを幾度か押し頂いた。只、「ありがたい」と云ふ氣持で胸の中は一ぱいになつた。そして今度は、腹から湧き出るやうな眞實の涙がはらはらとこぼれた。それを見ると下野守は、さも満足さうにつこりした。そして心の一方では「あゝよし」と彼を愛撫してやりたい氣持にもなり、又一方では「己はやつぱり、いゝ事をした」と、人のいゝ心持になるのだつた。

「下野守様は御名君とかねてきて居りましたが、この御明察と御なさけとに親しく接し只々、私共は感激の至りでございます。私共は、私共の浅い考へだつた事が只々お恥かしく存じます。どうぞ私共の浅慮をお許し下さいますやうおねがひ申上げます。稻富の事は委細、私共も心得ましてござります。くはしく、細川侯にも申上げるでございませう」と、武士の一人は云つて平伏した。

「いやお前達も又悪い考へでやつたのではないからよい。稻富の事はよく細川殿へ申上げ

ろ。」

と下野守は云つた。そして心の中では「又名君がもう早速はじまつたな」あゝこれで又「名君」と云はれる事が又一つふえたかと思ふやうな、くすぐつたいやうな、もつたいないやうな心持になつた。しかし、心は愉快だつた。彼は馬をすゝめた。家來共は、己達の殿様は、やはり他の方々と違つた偉い所を持つてゐるさる、と思ひながら、そしてそれ／＼自分達自身が今の事をやつたやうな氣持になりながら得々として意氣揚々と従つて行つた。彼等が行つて了ふと、喜太夫は、狐につまゝれたやうにほんやりした、しかし、下野守の方をみては、何度か心の中に伏し拜んだ。そして氣がつくと小菊の姿が見えなかつた。たぶん下野守の前で居た、まれなくて、家へでもかへつたのだらう早く歸つて喜ばしてやりたいと思つたが、しかし、何だか不安が胸にあつた。

「それでは、このまゝではあまりひどいなりですから、一寸着物をきかへてからお供させて下さい。君達も、まあ一ぶくやつて下さい。穢い所ですが。」

喜太夫は、二人の武士に云つた。二人はくすぐつたい氣持になつた。

「いや、私共の淺慮からとんだ失禮をいたしました。決して悪い氣でやつたものではありませんから、どうぞ將來とも、よろしくねがひます……それでは一ぶくいたゞくとしませうか。」

喜太夫も、妙にくすぐつたい氣持がしたが、又、こきみよい氣もした。彼等二人は、又喜太夫の隠れ家に入つて行つた。

喜太夫は庭づたいに家に上らうとした時、何だか胸さわぎを覺えた。彼はそれで走るやうにして、縁側に上ると室の中に飛び込んだ。同時に彼は、頭をガンとうたれたやうな氣がした。彼は一寸、立つたまゝ、身動きもしなかつた。

彼の不安な豫覺はあたつて居たのだ。小菊は、短刀で乳の下を突いて、うつ伏してゐた。これを見るなり一瞬間、髪の毛一つ動かさなかつた喜太夫は、次の瞬間、脱兎のやうな勢ひで、その死骸に飛びついて行つた。そして小菊を引起してみたが、もう事切れて居た。「あゝ、小菊。小菊。早やまつた事をして呉れた。早やまつた事をしてくれた。あゝ、小菊。小菊！」

彼は夢中になつて叫んだ。彼女の血潮は、彼の兩腕から、胸のあたりを染めた。

「何と云ふ事をしてくれたのだ。この己を残して……お前はまあ、何う云ふ事をしたのだ」
喜太夫はさう云つて、彼女の體をゆすぶつた。彼の眼から涙がながれ、彼女の胸からはどくどくと又なまぬるい血がたれた。

二人の武士も、喜太夫につゞいて、家の中に上つてくると、この始末をみてぢつと立つたまゝ動かないで顔を見合せた。

「いつの間にかへつたのであらう。お通りの前までは確かに居たんだが……」

「きつと、もう居たゝまられなくなつたんだらう。下野守の前に稻富殿と引きだされるのが。」

「早まつたことだつたなあ。」

二人の武士は小聲で云つた。

小菊の死骸の脇には、小さい紙切れにはしり書きで、「私故に天下に其名を謠れた日本人の種ヶ島の達人に、かゝる恥辱を與へた事は何より申わけなく、そのおわびにはこの身は八

ツ裂きにしても足らぬとは存じ候へども」と書いてあつた。それを見ると喜太夫は、

「あゝ、お前は己の心を知らぬ。知らぬ……とう／＼知らずに死んで了つたのか」と云つた。そして心の中では——この女は己の「名聲」によつて己のものとなり、そして又己の「名聲」のために死んで行つた。己は何物にかへてもこの女と生きたかつたのだ。生きられるだけ生きたかつたのだ。道德にかへても、名聲にかへても。しかもこの女はその己の心を知つてくれなかつたのだ。あゝこの女は己を眞實に愛しながらしかも己の本統の心をつひぞ握つてくれなかつた……いや。それは己が悪かつた。己がそれを知つて居つゝ握らせなかつたのだ……己が悪かつたのだ……しかしもうだめだ。己はもうこの女なしには生きてゆくのにさへ絶えられない氣がする。この女も可憐さうな事をした。可憐さうな事をした。あゝ己達のしてゐる事がまるで夢のやうな事だ……こんなことを一人心中でつぶやいた。

其時、二人の武士は、小菊の遺書をみて「うむ、流石は小菊殿。でかしなすつた、これこそ武士の體面が立つ。稻富殿の體面も立つ。これで稻富殿も、お館へかへり、忠勤を勵まれ、天晴れな眞の武士の腕をも示されるがいゝ。」

と一人が云つた。それは當然かういふ時に、云ふべき臺詞として彼の頭に浮むだ事を、只口から出してみたのであつた。

それをきいても喜太夫は、もうそれは餘りに遠い所で云つて居るやうな気がした。小菊と、さうして自分の名譽回復に、又一つ名人としての自分を振ふと云ふのも、もうなんだかいやになつて來た。世の中はあんまり上面だ。己もあんまり上面だ。この數十年、己はよくまあ上面のことばかりやつて來たものだ。皆、夢だ。夢のやうな気がする。もうあの偽りの多い世間の中に又偽りにかへつてゆくのは、いやになつて來た。今や、彼の心には、世間の中にその「偽り事」の方面ばかりの事ばかりが見えて來て仕様がなかつた。

「さ。おなけきは御尤だが、一刻も早く御出下さい。御出發をお急ぎ下さい。下野守からの御直々のお使も、お館のはうへも行かう。それに對してもぐづ／＼しては居られません。」

「切角の下野守に對して、後れては申わけがなりません。」

と云つて、二人の武士は交る／＼せきたてた。喜太夫は、もういつまでもこゝにかうして居たかつた。しかし、二人はうるさくせきたてた。彼は仕方なしに立つて、仕度をやりだ

した。しかし、心はもういやで／＼たまらなくなつた。やはりいつまでもこゝに居たかつた。しかし、ぐづ／＼考へ込むと、二人からせき立てられ、そして、二人は何かと種ヶ島の事を持ち出した。二人はそれを、喜太夫を賞め、そして勵ますつもりで云ふ言葉であつたが、喜太夫はもうそれをきくなほいやになつて來た。その言葉の度に加速度に種ヶ島なんて見るのもいやなやうに、殆んど、神經的にいやになつて來た。

そして淋しく心につぶやいた。

——あゝ己は今迄「名聲」によつて世間を都合よくわたつて來たが、こんどは世間が己の「名聲」でいやがる己を引きすつて行かうと云ふのか……

おめでたき結婚

序 曲

百舌鳥が盛んに鳴いて居る。
廣い／＼原野である。

其處に一本の高い／＼杉の樹がある。杉の樹は鋭角の三角形をして、その三角形の尖端が空を突いて居る。

百舌鳥は、その尖端にとまつて鳴いて居るのだ。

キ、キ、キ、キ……よく鳴く。よく鳴く。

いやにその聲がはつきりして居るのに、その原野や、高い三角形の杉が朦朧としてゐる。そして、その朦朧さは、よく見やうとすればする程、朦朧としてゐる。しか

1926, 7. 28. W. Y.
1923, 6. 29. K. N.

し、鳴き聲は愈々明瞭である。そのうち廣い原野には霧がかゝつたやうにますますわからなくなつて來た。

こつちの頭がいやに渾沌としてゐるのだ。百舌鳥の聲は、その渾沌とした頭の中を、突き刺すやうに響いてくる。

眼が見えた。

それは原野の景色ではない。

自分の室である。

朝の眠りから時雄は覺めたのであつた。

百舌鳥の聲はまだしてゐる。

障子がもう明るくなつて、その障子の外側の、庭の松の樹で、鳥は鳴いてゐるらしいのだ。

時雄は枕元の時計を見ると、もう七時過ぎである。寢ばうしたなと思ひながら、脇の方を見ると、もう新聞と手紙が置いてある。女中が、もう持つて來たのらしい。

彼は、一通り手紙を見た。三四通のなかには、友からのものもあれば、雑誌社からのものもあつた。その中に一つの立派な角封に入つた招待状のやうなものがあつた。

時雄はビリ／＼と封を切つて、堅い紙の四角の印刷物を引き出した。

それは、案の定、結婚の招待状だつた。

「謹啓時下益々御清適奉賀候陳者今般藤本伯爵閣下御夫婦之御媒妁ニ依リ賢之嗣子賢信ト勇三郎娘花子ト結婚爲致候ニ付聊カ御披露之爲メ粗糞差上度候間御多用中恐縮ニ候ヘドモ來ル十八日(土曜日)午後五時三十分帝國ホテルへ御貴臨被下候ハゞ光榮ノ至ニ奉存候此段御案内迄如斯御座候

伯爵 武藤 賢之

大正×年十月十日

木村 勇三郎

林 時雄 殿

それにはこんな事が書いてあつた。これを見ると時雄の心には強いショックをなけいれられた。時雄はその堅い小さな紙を持つたまゝはね起きた。

「賢信君もとう／＼結婚するな……なんと云ふ突然のことだ……しかしまあお芽出度い事だ……花子さんのあの親父……己にどんな顔をして顔をあはせるつもりだ……へむ。」

時雄の唇には皮肉な笑ひが上つたが、それから彼の頭の中には色々の回想が浮んだ。時雄は、それから、それへと賢信と花子との関係や、それから自分の事や父の事を考へた……。

—

それは今から三年前の事で、時雄がまだ××大學に通つて居る時の事であつた。或る朝、彼がまだ寢て居るうち、女中が彼を起しに來た。

「あの……時雄様。旦那様がお呼びでございます。」

彼はねむい眼をこすりながら起きた。時計を見るとまだ五時だつた。彼は仕方なしに學

校の制服を着て、父の室に行つた。

襖をあけると、父が、いやに沈んだ考へ込んだ顔をして眼を光らしてゐるのが、先づ時雄の心をはつとさせた。これは何か悪い事だなど、とたんに時雄は感じた。

「おはようございます。」

時雄は父の前に手をつくと言つた。

「おはよう。」

父の聲は、かすれて重々しかつた。父の眼がぎろりとした。彼は何事がはじまるのかと思つてびく／＼した。

時雄は、ほとんど、もの心がついてから、父にどなりつけられて叱られた事がなかつた。彼の父は、彼に非常にやさしかつた。いつでも時雄の顔をみると、父はにこ／＼として居た。それだけに、時雄は父に親しくなれて甘へて育つた、子供の時はよく父に時雄も叱られた。しかし、もの心がついてからは、何か悪い事をして、決して父は叱らず、父は必ず愛でさすのだつた。それだけいつもそのきゝめは大きかつた。父は理窟でといてくれ

るので、よく時雄には、その悪いわけが身にしみてわかつた。悪い事をしたと心から後悔させられるのだつた。そしてそれだけ、次の同じやうな悪い事をしなくなるのだつた。時雄は父を愛し尊敬して居た。そして、このごろは時には父の理窟が、時雄の思想とあはぬ場合があつたが——父と時雄とは、二十幾つ年が違つてゐるのだから、どうしてもそれだけ時代的にも思想上にも差異が生じて居るのは止むを得なかつた——そんな場合にも、父の優しさ、愛は、子供を従はせるのに充分だつた。さういふときも、時雄は父に同情し、父の立場を理解し、そして従はずには居られなくなるのだつた。それだけ父の愛は大きく強かつたのだ。父は時雄をこの上なく愛して居たし又時雄は父をこの上なく慕つて居た。今日の父の顔は、いつもさとされる時の父の顔より、もつとこわいものがあつた。父の沈んだ顔には、もつと重たいものを時雄はみてとつた。時雄はそれだけに、何だらうとびく／＼して居た。

「お前は本統に困つた事をしてくれたな……お前に限つてそんなことの心配はないと、わしは思つて居たのだ。わしはお前を信じて居たからな……所が、どうして、こんな馬鹿な事

をしてくれたのだ。お父さんの顔に泥をぬつてくれたのだ。お父さんは……お父さんはな、お前のおかげで恥をかいたよ……がしかし、我子から出た事だからしかたがないと思つて、それは自分の教育が足りないからだ、自分を責めて我慢してあやまつて来たんだよ……昨夜お前に話さうと思つたんだが、わしは會があつてかへりが遅かつたから今朝呼んだのだが……」

父はかう云つて、唇を嚙む。時雄にはまだ何の事だか、わからなかつたので何だらうとはらくして居た。父は『お前はこれに見覚えがあるだらう。』

と云ひながら、机の中から、封筒を五六枚出して来て、時雄の前に出した。

時雄はドキツとした。その封筒は確かに時雄には見覚えがあつた。裏には時雄の名が書いてあり表には、武藤の番地がかいてあつて、武藤賢信様とかいてあるものだつた——

それは、一ヶ月ばかり前、賢信が時雄の所に来て、彼の苦しい戀を語り、そして時雄に封筒を二十枚ばかり上書きしてくれとたのむのだつた。それには勿論花子の手紙が入つて賢信の所へ行くのだつた。それは賢信の家はやかましくて、女文字の手紙がくると見つ

かる恐れがあるから、上封筒だけ君のを使はしてくれと、折入つてたのんだのだつた。彼は色々賢信の話をきき、心から賢信に同情して居た時だつたし、又時雄には戀が悪いものだとは、どうしても思はれなかつた。若いその頃の時雄は『眞の戀愛』の讚美者だつたのだ。時雄は眞劍の戀愛を讚美するだけ、それだけ不眞面目の戀愛は嫌つた。しかし、本統に自然に湧き出した清い愛で、二人が本統に一生懸命になつて愛し合ふ事は決して時雄には、罪惡だとは思へなかつた。彼にはむしろ美しい自然の事だと思へたのだつた。

しかし其頃の『世間』の一般の考へ、ことに彼等の周囲の者の考へとしては、戀愛は汚らはしいものとして考へられて居た『時代』だつた。戀愛をする者は最大不孝者の最大情弱者と罵倒されて、蛇蝎の如く忌み嫌はれた『時代』だつたのだつた。

時雄は、それでなほ反抗的に戀愛は決して悪事ではないとか何とか、若々しい純な心から、いきり立つて、戀愛を罵倒する人々にくつてかゝつてよく論じたりしたものだつた。

時雄には、どう考へても、戀が人を情弱にすると云ふ、彼の先輩の言がわからなかつた何故に戀が人を情弱にすると云ふのか。そんなら夫婦はどうだ。夫は妻を貰ふと情弱にな

るか、そんなら、世は擧げて情弱となるであらう。若し又妻を愛さない男ならなほ悪い。世には妻子のためにと思つてせいを出す人も居る。それなら戀人のためと思つてせいを出す人もあつていゝ。昔から本統に豪い人は戀をその一生いかした人が何人あつたらう。又一體夫婦とは何だ。男と女とが一所になつて愛し合つて、お互ひに助け合つて愛の生活をする事だ。その形式は三々九度の盃を飲むのと、届を役場に出すだけだ。そして、その男は前からの男と何もかはらぬ男で、女もさうだ。それから、こゝに一人の男と女とがあつて、それが眞から愛し合つて愛の生活をするのが、何が悪いのだ。勿論、形式と云ふものも必要だらう。しかし、形式は内容あつての形式で、形式あつての内容ではない。即ち愛あつての結婚で、結婚あつての愛ぢやない。一體、他人から強ひられて愛するのは不自然だ。親や親類から、あてがはれてからそれを強ひられて愛すと云ふのは少し變だ。それも愛せたら、愛すのはいゝ。しかし若し愛せなかつたらどうするのだ。それより眞に湧き出た愛の泉こそ、より本統のものではないか。こんな事が時雄には思へて仕方がなかつたのだ。

又、今の結婚なるものは、餘りに財産や家柄などをきつたして、そんな事でのみ結婚する人が多すぎる。しかしそれは決して清い事ではない。一夜を賣る賣春婦が悪ければ、財産を目あてゝ結婚する事は一生を賣る事だ。それは賣春婦よりけがらしい。又家柄とか爵位とても同じ事だなどと時雄には思へて仕方がなかつたのだ。

又、世の中の人は戀愛をする者を不孝者だと云ふ。しかし、戀愛は人間の自然のものである。戀は決して強ひられて出来るものでない。自然に湧くのが本統だ。そして親が眞に子を愛すのなら、親は子の眞の幸福を考へてやるべきではなからうか。親と雖、人間の心の中の事はどうする事も出来ない事だ。だから子が愛する男(又は女)があれば、親として出来るだけその愛をかなへてやつて、親子もろとも仲よくお互ひに助けあひ愛しあつて生活すべきではなからうか。親が子を没我的に愛せば、又子も親を慕はずに居られなくなるものだ。現に時雄自身の場合がそれだ。時雄は親から愛されて居る。そして時雄は又親を慕つて居る。親が子を自分の所有物として、只可愛い、可愛いと頭ばかりなでて、子の個性を認めず、品物あつかひにして、自分と同じ型のものとして都合よくしやうとするやり方

は、時雄には利己的勝手な親だと思へた。眞に子を愛する親は眞に子の個性を認めて幸福を考へてやるべきなのだ。時雄には常に思へて仕方がなかつた。

周囲から愛されて育つた。世間知らずのお坊ちゃんの時雄として、それは當然考へられさうな考へだつた。時雄は何時までも、純な若い心から堅くさう信じて居たのだ。そして彼はよくそれを口にもした。議論もしたのだつた。時雄が戀愛についてさういふ考へを持つて居ると云ふ事は賢信はよく知つて居た。そして賢信がそれをよく知つて居ると云ふことを又時雄は知つて居た。賢信はそれで自分の苦しい戀をうちあけて同情を求めに來たのだつた。賢信のうら若い純な氣持の愛の話をきくと、一本調子な正直な時雄はすぐ頭から賢信に同情をしてつて、賢信にいろいろと、賢信にやさしい友情のこもつた話をした、そして何處までも眞面目の道を行くやうにと忠告をしたり、周囲に負かされるなど勵ましたりなどした。そのあとで賢信は、云ひにくさうにして、二十枚ばかりの封筒を出して、その上書をかいてくれと云つたのだつた。

時雄は一寸困るとは思つた。しかし、今、大さう憂さうな事を云つた後であつたし、そ

れに心から賢信に同情をしてゐる時だつたので、自分自身の心に「お前は書いてやらねばならない。二人の人の美しい愛を咲かせる事は光榮な仕事だ」などと私かに心の中で云つてみた。この手紙が若しばれたらと時雄は一方にそんな時の懸念をもつて居たのだが、自分自身にさう命令すると、彼は、その封筒をかいてやりたい衝動にもかられたのだつた。そして賢信がどんなに喜ぶだらう。美しい花子さんもどんなに喜ぶだらう。そして己にどんなに感謝するだらう。二人の若い人の心を清い愛の喜びに、おのゝかせると云ふ事は、若い己の仕事としても尊いのだと彼は、自分自身に、半ば云ひわけのやうなことを云つてみた。それは彼の心のどこかにまだ「戀の手紙の上書などをかいてやると云ふのはいやしい事だ」と云つたやうな、因習的の聲がきこえる氣がしたので、無理にその聲をかきけすためにいろいろと、今この手紙の上書をかいてやることについて、自分自身への口實を考へて居たのだつた。そして結局は、友の賢信とあの美しい花子さんと二人に感謝されたくそしてその感謝をみて、自分自ら「よき事をした」と喜びたかつたのだつた。

時雄は賢信の出した二十枚ばかりの封筒に、すぐ彼の前で、その上書をかいてやつた。

そしてその裏には自分の名を書いた。

「これでいゝだらう……」

時雄はかう云つた。

「ありがたう〜。何と云つてお禮を云つたらいゝだらう。そのかはり、君の爲に僕のやれることがあつたら何でも云つてくれ。喜んでやるから。」

「あゝ。あつたらおねがひする。お互つこだからね。お互ひに何でも助けあつて行かうよ」
時雄はさう云つた。そしてそのあとで、

「この封筒は氣をつけてくれ給へ。みつかつたりすると面倒だからね。」

と云はうとしたが、それは止めた。なぜなら一つには、賢信があまり嬉しさうな顔をしてゐるので、そんな『氣をつけてくれ』などと云ふやうなことを云ふと、何だかいやく〜書いてやつたやうにきこえへてそれで賢信のその喜ばしい顔を少しでも不安の氣持に曇らせたくないと思ふ氣持と、もう一つは、彼が今まで賢信に勇氣づけ、又彼の思想として——戀愛讚美者として、そんなことを云ふのは如何にも矛盾するやうだし、又意氣地がないや

うな氣がするのとで、彼はわざと黙つて居た。そして顔では「手紙の上書なんか、かくのは、貴君のためならお安い御用だ。己は貴君と、花子さんと、又二人の愛に厚意を持つ味方なのだからね」と云つたやうな顔をして居た。

賢信は喜んで、その封筒を持つて行つた、そして、その封筒はある機會に勿論全部花子の手許に賢信からやられたのだつた。そして、その封筒を利用して、花子からの手紙は賢信の所へ行き、賢信からの手紙は、花子の或る同級生の親友に上書をかいて貰つたのを使つて、花子の許へ行くのだつた。その事はその後賢信から、彼はきいたのだつた——

今、時雄は父の前に出て、その封筒を五六枚、父からつきつけられたのだつた。時雄はまごついた。そして、これが、どうして父の手許に入つたかと思つて考へたが、どうしてもわからなかつた。それだけに心配になつて父の顔を仰ぐと、父はちつと重くるしい顔附で、彼を見下ろして居たので、彼の視線は、たち〜とたちろいで、又疊の上におとされた。父は又靜かに口を開いて云つた。「實は、昨日、役所に、木村勇三郎君が来て、わしに會ひたいと云ふから、何だらうと思つて會つたのだ。すると木村君の云ふのには、誠に申しにく

い、お恥かしい事だが、私の娘がどうも、この頃素振りがをかしいと思つて、呼んでよく正してみたら、實は武藤伯爵の令息と手紙のやりとりをしてゐると云ふ事がわかつたと云ふのだ。そして、その手紙の封筒を出さしてみたら、それは貴方の御令息の上書きをされたものであつた。それで、いろ／＼と話をきいてみると、どうやら、あなたの御令息にそゝのかされて、そんな事をしてゐるらしいと云ふのだ。あなたの御令息は「親なんか、かまはんから、ぐん／＼と手紙を出せ」とか何とか云つて、娘や武藤伯爵の令息をたきつけられるのださうだと云ふのだ。それで私の所の娘も嫁入前であるし、こんな事が世間に知れると、私の面目もつぶれるし、又武藤伯も同じ事である。早く氣がついてよかつた。娘もきずものにされる所でしたが……と云ふのだ。

それで娘もよく云ひきかせたので後悔してもう絶対に武藤伯の令息との交際を絶つと云つた。それで今後は、私の所も嚴重に娘を監視し、又武藤伯にも内々おねがひして御令息を監視して頂く事にした。武藤伯も「それはとんだ事でした。申わけありません。うちの子はおとなしくて、そんなたいそれた事をしでかすとは思はなかつたのに、それはきつと

悪友があるためでせう
何と云ふ潜越な言ふを
然りし
口知

悪友があるためでせう」と云つて非常に謝され、眞赤になつて恥ぢられたさうだ。そして武藤君の令息ももう止めると明言したさうだ。とにかくそんな事を、木村君は云つたのだ。わしはびつくりした。わしは「私の所の子供も、どつちかと云ふと、内氣でしてそんなことは……」と云ひかけたが、眼の前に手紙をつきつけられて居ては、何と云ふ事も出来なかつた。わしは恥かしさのために、穴があつたら入りたかつた。わしは、とにかくお前の手紙の手紙があるからは、もうあやまるよりは仕方がなかつたのだ。わしは恥をしのんで木村君にあやまつた。お前はわしがどんな地位にあるかよく知つて居る筈だ。そして、その地位にあるわしが、頭を下げて謝す氣持のつらさがわかるだらう。木村君はこれからこの事を「いゝ事」にして、わしに色々の事を「たのみ」にくるかもしれない。そしてわしの其時の恥かしい氣持はどうだらう。お前は察しられるか。お前は何と云ふ馬鹿な事をしてくれたのだ。木村君はお前が、そゝのかしたり、たきつけたりしたと云ふが、わしにはそれは信じられない。お前はそんな男ではない事をわしは信じる。わしはそれでお前が「お人よし」なので、武藤君の令息にたのまれて、仕方なしにそんなものを書いたんだらうと

思つた。わしでこそ、さうとるが誰がさう考へるものがあるか。木村君は自分の娘は悪くないと思ひ、武藤君は自分の息子は悪くないと思ふにきまつてゐる。誰だとして親の情は同じだ。しかし何と云つたつて「おちど」はこつちにもあるのだ。こんなものを書いたのがわるいのだ。お前はなぜ親の顔に泥をぬるやうな事をしてくれたのだ。もうすんだ事は仕方がないし、これもわしの教育のたりぬ所からなのだから自分が悪いのだと思つて、わしは苦しさをこらえて来た。お前も、もう大學生なのに、そんなにいつまでも考へなしでは仕方がない。お前のお父さんがどんな地位に居るか……いやお父さんの地位が高からうが、低からうが、お前はどこまでも、確かりした人間の正しい道を歩めばならない……戀のとりもちをするなどと云ふけがららしいことだ……」

かう云つた時、父の言葉は重々しくかすれて一寸とぎれた。時雄の心には、それは剣でさゝれるやうにつらく感じられた。時雄の頭の中は餘りにもう熱して了つた。時雄は父に同情して、いゝのか、自分に同情して、いゝのた、わからなかつた。熱い涙がはらくと頬を傳はるのを感じた。時雄はだまつてうつつ伏すやうにしてお辭儀をした。

「お父様。すみません。すみません。お氣持はよくわかります。お父様にこんな御迷惑をかけるとは思ひませんでした。」

彼はかう云つたが、しかし、彼は彼のしたこと——手紙の上書をしたこと——はどう考へても悪いことだと思へなかつた。賢信が悪いんだ。花子がわるいんだ。あれを親父に出すなんて、そして、己がそゝのかすなぞと云ふなんて。どの口で云へるのだ。恩を仇でかへす奴等だ。畜生！ 時雄の心は怒りに燃えた。

時雄の父は其時、中央政府のある重い役目について居たのだつた。それ故、父の立場として木村から侮辱された時の父の苦しさには、時雄は十分理解と同情が持てた。時雄の父は、やはり戀愛を罪惡視する一人だつた。その事を時雄は知つてゐた。しかし、時雄は父に、自分の戀愛觀を云ふ氣にはなれなかつた。父は父だ。父の戀愛觀は解つてゐる。しかしそれは「時代」が違ふのだから止むを得ない……とかう時雄は彼自身の心に云つて、父にまともに彼自身の戀愛觀を云つて出る氣になれぬ恥かしいやうな又面倒のやうな又云つても無駄だと云ふやうな心への申わけをして居た。今も、彼はそんな事云ひ出す氣にはなれ

なかつた。それで父の方では又、時雄が、そんな自由な戀愛觀を持つて居る事も知らなかつた。それで、手紙の上書のことなども、賢信にたのまれて、人のいゝ時雄が仕方なしにかいたんだと自らきめて居た。時雄自身の心の中も事實九分通りまではさうだとみとめた。しかし、時雄はそゝのかしたと云はれても、あと一分は仕方がないとも思つた。何故なら時雄はよく、賢信に彼の戀愛觀をきかせ、賢信はいつも彼の共鳴者だつたからである。そんな行きがかりで、彼の手紙の上封も實はかくべくよぎなくされたのであつたと時雄は考へると苦笑したくもなつた。しかし、それにしても賢信と花子のやり方は思知らずのやり方だと彼は憤慨した。彼は父に何と云つていゝかわからなかつた。只、彼は恐縮して、かまこまつてゐた。父はそれを見ると可憐さうに思つた。父は、何もかも自分がわるいんだ、自分等兩親としての教育と監視が足りなかつたと思つて、子供一人を責めるのを可憐さうにも思つたのだつた。

やがて時雄の登校の時間が来た。父も役所へ出ねばならなかつた。それで時雄は引下がつて、それから朝飯を食ふ時間もないので、そのまゝ、學校へ飛び出した。しかし彼は電車

の中でも、學校へついてからも、今朝の事が頭にこびりついて離れなかつた。彼はどう考へても自分のした事が悪いとは思へなかつた。只、父には父の立場としてみて氣の毒でななかつた。すまなく思つた。そしてそれは遂に賢信と花子への憤慨にかはり、そして果ては、みんなが馬鹿の上面の事にとらはれてゐながら、若い者を壓迫すると云ふ今の「世間」と云ふものに對して癢にさわつてならぬ心になつてくるのだつた……

時雄は文科の學生だつた。そして賢信は法科だつた、それで、其日は學校で時雄は賢信にはめぐりあはなかつた。時雄は法科の方へ行つて、賢信にあつて見る氣にもなれなかつた。賢信を責める氣にもなれなかつた。彼は只、胸中で不快に思つて居た。

それから數日たつて、時雄は或日賢信に、ふと學校のかへりにあつた。しかし、其時の賢信の態度は、もうすつかり前と違つて居た。賢信は時雄を避けるやうな態度を示した。そして時雄が、あの事はどうなつたときいても、なんだか、花子との話をするのがいやらしいやうだつた。賢信はとにかく兩親からも非常に叱られたと云ふ事、又「世間」がうるさいからと云ふやうな事を云つて居た。そして花子さんとの關係も、もう止めたと云ふやう

な事を云つた。

時雄はいやな気がした「世間」がなんだ。又「世間」がこわいやうで愛を捨てるやうな意氣地のない事でどうするんだ。「世間」なんてものはうるさいかもしれない。しかし、そんなものは征服してやればいゝのだ。親だつて、賢信が、誠心をこめて話したなら、賢信を愛して居る御両親の事なのだから、きいてやられないと云ふ事はなからう。それをさうしないのはまだ賢信の熱誠が足りないのだ。一寸したこと、すぐはゞまれて止めるやうな、そんな意氣地のない「愛」なら、初めつからやらない方がいいのだ。賢信だつて花子さんに「一生どうかかかうとか」と云ひ合つたこともあつたらう。それを、こんな事で、すぐぐんにやりとまるつて了ふやうな事では、餘りに「愛」に對して責任がなさすぎる……こんな事を時雄は思つた。しかし時雄は一方「世間」と云ふのが、陰險で饒舌で嫉妬深く、常にうるさい事、そして殊に武藤の如き地位に居るもの、そして両親を愛する者としては、なほその事がかなり苦痛だらうと云ふ事に同情はもて、居た。しかし、そんなものは「強い愛」を持つてぶつかれば、いつかは勝てる時があらう、どうせ「世間」なんてものは、影法師のやう

なものなのだからとも思へた。それで、時雄は、そんな腹に思つたことを、すぐ口に出さうとした。しかし其時、又さう云つたなら、自分が、たきつけるとか何とか云はれさうな気がした。それに賢信の、彼を避けるやうな態度が氣に入らなかつた。そんなことから時雄はもう黙つて居た。そして例の封筒を、花子の父が、時雄の父の前にたゞきつけて、時雄の父を侮辱した事も、彼はもう云ふ氣になれなかつた。時雄の氣持は、もうその時、餘りに賢信のそれと離れて了つて居たことを、彼自身氣がついて居た。

其後、時雄は、とき／＼賢信にあつたが、賢信は出来るだけ花子の話を避けた。時雄がそれを云ひ出すと、あわてゝ話をそらした。時雄も、そしてそれを思ひ出すと不愉快になるので、もうその話は次第にしなくなつた。高等學校時代には二人は「一部」で同じだつたので親友だつたが、大學に入つてからは二人は科が違つて、それから周囲の友達もだん／＼違つてくるし、それに二人の學ぶ學科が違ひ、二人の周囲の空氣も違ふと云ふことは、次第に二人をも離して行つた。それに時雄は作家にならうと思ひ出してからは、益々賢信等の法科の政治家らしい人々がきらひになつて來た。そして二人の性格や趣味はますます／＼

つて来たので、なほ二人はもう前のやうに親しくなれなかつた。

月日はかうしてどんく立つた。賢信と花子との問題も、時雄は殆んど忘れて了つた。その翌年、時雄の父は病死した。時雄が涙にぬれながら、父の棺の側に通夜をしてゐるとき、時雄はふと賢信の封筒の上書をしてやつて、それで父が木村から侮辱された事件をふと思ひ出した事があつた。それはその時の、時雄を心の及か何かで切られたやうにひやりと刺した。時雄は眼をつぶつて、口の中で、

「すみませんく。」

と父に云つた。そして、時雄は、木村の態度に腹が立つた。自分の嫌が態をして、他人に封筒をかゝした娘の事は棚にあけて、そのかゝせられた人の親を侮辱にくるなんて、なんと云ふその木村と云ふ奴は非紳士的の奴だ。どうせ、富豪なんて奴はそんな勝手な奴等がそろつて居やがるのだらう。そんな事を思つて、時雄は唇を噛んで、堅く坐つて居た……事もあつた。

そして時雄は、今年文科を出るし、賢信は法科を出たのだ。そして、急に賢信と花子が

結婚すると云ふ通知を受取つたのだつた。時雄は、今、結婚の招待状を手にしたまゝ、こんな三年前の事から、父の通夜の夜の事などを思ひ出して、ほんやりと考へて居たのだつた。時雄は、父が居たら……と思つた。父が居たら、木村は何と云つて、父に顔を合せる心算だと思つた。すると又、父が死んだ事が、只悲しくなつた。父の生きて居た時の色々な事を思ひ出した。それから、それへと關係して思ひ出の糸は胸からほぐしのべてゆかれたが、それは暫くつきなかつた。もう招待状の手に持つた事も忘れ、賢信と花子の事も忘れ、思ひ出は、父の事になつて居た。時雄が小さい子供の時や何か、時雄の胸に浮んでくるのだつた。

二

あつた
賢信の結婚する
と云ふ十八日になつた。

賢信の結婚すると云ふ十八日になつた。時雄は、この披露會へ出やうか出まいかと、かなり迷つたのである。時雄は一體所謂上流の結婚の披露會は好かなかつた。友達が結婚し

てさういふ會に出かけても、そんな會では只一寸、いやに四角ばつた友の顔と、友の妻君になると云ふ着飾つた、すました女を遠くから見る位のもので、親しく友夫婦と話す云ふわけではなし、それに來て居る人々は、少しでも、かういふ會に所謂社會的地位のある人を呼びたがると云ふ世間のならはしから、ふだんはあまり親しくないやうな人までの、なるたけ名の知れたやうな人々が、ごちやくくと來て居るので、それらは又みんなで親しく話しをすると云ふのぢやなし、あつちに一團、こつちに一團と、知つた人同志が、かたまつちまふのでやつぱり幾つかの塊に離ればなれになるだけで、そしてあとは御馳走を食ふだけだ。しかも時雄のやうな若い、そして所謂社會的地位のない者は、いつも一ばんすみつこのテーブルにつくのが常だ。お客の中で一番その主人公と親しい友である場合でも……。だから、時雄はもうなるたけそんな會には行くのは止めにして親しい友が結婚した時には、只、友の所を訪問して喜びをのべる事にしてゐた。それで今度も迷つたのであるが、もう一つは木村と云ふ人を初めて見るのも不愉快だつた。見ればきつと父を侮辱したあの事を思ひ出すに違ひない。そして不愉快になるに違ひないと思つたからだつた。

しかし又一方行つてみたい氣もした。その何とかかんとか豪さうな事を云つて父を侮辱した木村もやつぱり娘をその人に結婚さしてゐるのではないか。こんどは「戀の結婚」ではない。「親同志許した普通の結婚」か。へむ。お目出度い事だ。と云つたやうな皮肉も感じたそれで賢信と花子が、今日を晴れて着飾つて、しやつちこばつて並んで立つてゐる姿も見やりたかつた。それは皮肉の意味であつたが、しかし一方眞面目の意味でも、二人の結婚と云ふ事には、少からず、彼自身も關係がある。彼は眞の意味で、賢信の結婚披露會の末席を汚す光榮を有する一人だとも思へた。そして賢信のために、友情のこもつた心からの祝福を捧げたい氣もした。そんないろくの純な、不純な氣持がごつちやになつて、とにかく時雄は十八日は行く事にきめた。そして行くこと云ふ返事を出して置いたのだつた。夕方になると、時雄はモーニングを着た。時雄は一體フロックコートと云ふ服が妙に嫌ひであつたので、いつもかういふ四角ばつたところに行く時はモーニングにした。そして時間を見とつて家を出た。

電車の中でも時雄は、いろくと賢信と花子の結婚について考へて居た。一體どうして

二人は、あれ以來まるで音沙汰がなくて、今急に結婚するやうになつたらう。かう考へてくると、なんだか時雄には、かうなるのが自然で、もうあのときまつて居た事なのでつまらぬ役をふられたのが、時雄と父とであつたやうな氣がするのだつた。木村の家は富豪だ。とかくに今の富豪と名づくやうな人々には、金にあきてこんどは所有社會的名譽と云つたやうな傾向がある。それも眞の名譽ならそれも結構だが、する分影法師のやうなつまらぬ馬鹿な名譽を好く、例へば華族と縁組をすると云ふ事を、その華族が馬鹿だらうが、放蕩者だらうが、片輪だらうが、喜ぶと云ふ、實に愚劣な傾向があるのだ。してみると富豪の一人である——富豪にも偉い人も、さうでない人もあらうから、一がいには云へぬが——木村氏も又、そんなことを喜ぶ一人かもしれない。しかし又華族なんてことを、ぬきにしても賢信はとにかくいゝ奴だからな。今朝の新聞ちや法科出の秀才とかかいてあつたつけ。まあ人間、死んだ時と、結婚する時だけは、馬鹿でも秀才になれる世の中だから新聞はあてにはならないが、とにかく新しい法學士だし、とにかく相當の頭もある奴だし、お父さんは立派な所謂社會的地位はある人だからな。だから木村氏が娘をやりたがら

ぬのが不思議な位ぢやないか。賢信の家のはうだつて、富豪の美しいお嬢さんを貰ふのは悪くないからな。かう考へてみると、例へ二人の間に、あの事件——愛の問題——がなくしてさへ結婚問題がおこりさうな事だ。それを運よく二人は愛し合つたのだ。こんないゝ棚からほた餅はない筈だ。それをなぜ、あの時、木村氏や賢信の両親やは心配したんだらう。そして二人の愛を中絶させたんだらう。かう考へると、時雄はすぐ心に答へた。「世間」がこわかつたからさ。あの頃は戀は罪惡視されたからな。それをお互ひに息子と娘が戀したなぞと云ふと、「世間」の非難がうるさいからな。その親達の「うるささ」のための犠牲になつて、賢信と花子さんは一寸の間、戀を中止したんだ。いや延期したのか。賢信も花子さんももうまく出來た重寶な人間だな。戀を延期する事が出來る人だからな。時雄は心にかう云つて皮肉に口の中で笑つた。實際あの時若し二人の戀が「世間」にばれたら第一惡徳な饒舌な新聞なんて奴がだまつちや居ないからな。そして嫉妬深い「世間」はそれにすぐ和すからな。こんな事を時雄は思つた。そして、そんなら又何故あの時、木村氏は父を侮辱したんだらうと思つてもみた。いやそれはあながち本人は侮辱の氣ではなかつたかもしれない

只その彼等のこわい／＼「世間」が恐ろしさに、どきまぎして居るところに、己の上書した封筒を見たんで、もう、のほせて父の所へ来たのかもしれない。しかし、邪推を許されるなら、こんなことかもしれない。それは父の地位だ。あの地位にあるものゝ、弱點を握つて、頭を一度下げさして置くのも悪くないからな。それはそれとして、とにかく、所で、今度、もう賢信はいよいよ大學を出る。所で「世間」と云ふうるさい嫉妬屋も、それが「普通の事」であれば、かれこれ云はないからな。今、普通の結婚のやうにして二人が結婚すれば、「世間」はむしろ、兩家に阿諛して来て何かの汁にありつかうところすれ、それが「普通のやる事にして運ばれた事」だと、いゝ事でも悪い事でも、そんな事に反省なんかなく只、悪口は云へないで、結構ですなと、「世間」の奴は云ふのだからな。だからこんないゝ良縁はないさ。もう世間の心配はないさ。又二人の古い關係を知つて、かけで、べちやく／＼とよけいなお世話のかけで悪口をたゝいた極く小數の御連中も、どうもかういふ饒舌家に限つて健忘性で七十五日たてば、みな忘れて了ふのだからな。もう七十五日以上たつたからな。それに又、近頃になつて、やうやく「愛の結婚」とか何とか云ふことが、識者の間にも

云はれ、三年前には戀を蛇蝎の如く恐れ嫌つた教育者ですら「愛と理解の結婚が必要」なんて、西洋の偉人の云つた言葉をそのまま、鵝鵝かなんどのやうに口眞似して云ふ時代にもなつて来たんだから、木村氏も、武藤氏も少しは悟らうぢやないか。それに條件はお互ひにいゝとしてみれば、二人が、暫く音沙汰がなくなつて、今になつて急に結婚するんだつて、何の不思議はない。結婚しない方が不思議の位だ。さうすると、やつぱりつまらない役まはりを仰せつかつたのは己と親父だな……かう考へて来て、又、時雄は口の中で苦笑した日比谷で電車を下りると彼はいそぎ足に、帝國ホテルに向つて歩いた。

立關に入ると、其處には、澤山の新聞記者がその寫眞班の人々と共に、この披露會に来て居る所謂世に時めく大官連や貴婦人を待ちかまへて居た。それを見ると時雄は又皮肉を感じた。これが若し三年前だつたらどうだ。賢信と花子さんのあの若き戀が、この新聞屋諸氏に、あの時知れたなら、如何に諸氏は面白がつて、口をきはめて、所謂「筆誅」をやつたことだらう。二人を罵倒したらう。所が今はどうだ。二人の結婚を口をきわめて讚美しやうと云ふのか、寫眞入で……しかも、賢信は元の賢信、花子さんも元の花子さんでどこも違

つては居ず。そして二人の戀は只、今に延期されただけだ、へむ。又一體結婚と云ふ事がそれ程天下の大問題か。世界中の人は男でなければ女で、それは皆結婚するんぢやないか人間が結婚するのはあたりまへの事で、何も寫真入りで、新聞が報道しなくてもよささうなものだ。所がこれをかきたいのは、賢信は社會的地位ある武藤伯の息子で、花子さんが一代の富豪木村家の美しい令嬢だからだらう。さうしてこの披露會には、世に時めく大官連や貴婦人が来るからだらう。馬鹿な事に、興味を持つものだ。大官連が公務を司る時の事を報道するのは、國民と關係があるから必要だらうが、今日は、大官連と雖ど、只一人の武藤氏の友人として來るのだ。云は、「私の生活」の中に屬する事だ。それを寫真入で、讚美して書いて、それを珍らしがつて、讀む讀者も讀者だが書く人も人だ。大官連や、着飾つた貴婦人のすました連中が、披露會に來たとてそれが何だ。それは天下の問題か。一體の國民とそれが何の關係があるのだ。おまけに結婚する御當人のお二人は、普通の人間で、別に珍らしがる程の片輪でも天才でもない。身分も財産もとつた赤裸々の「人間」として考へてみればこの位の人間は世の中にざらにある普通の人間だ。この位の人間の結婚を

寫真入で新聞が報道しなければならぬのなら、新聞は毎日千頁の大新聞を發行したつておつゝきはしない。へむ。時雄の今日の氣持はどこまでも、何をみても只、皮肉に感じられて仕方がなかつた。

彼は澤山の紳士淑女に押されるやうにして、廊下を歩るきながら會場の方へ行つた。

會場の入口には、燕尾服を着た、しやつちこばつた賢信と、おかけを着た美しい花子さんが各の兩親と媒灼人の間にはさまつて立つて居るのが見えた。お客の人々は、その前に出ると一列縦隊にならむで、その前にでるとびよこくと頭を下けて、

「お芽出度う存じます。今日はお招き下さいまして、ありがたう存じます。」

とか何とか云ふのだつた。時雄の前の方には、時雄の知つてる貴婦人が二三人まじつて居た。その人は木村家の事をよく知つて居るので、賢信と花子さんの戀もその時代にその人は知つて居たのだつた。そして三年前位に、時雄が避暑地の海岸でその貴婦人にふと會つた時、その貴婦人等は其時盛んに賢信と花子さんの事を罵倒して、べちやくと時雄にしやべつた事があつた。その時、時雄は賢信の友人として、どこまでも賢信の肩を持つて辯

じたのだつた。その貴婦人が、しゃあ／＼として、着飾つて、きどつて來てゐるには、時雄は少なからず驚ろかされた。しかもその饒舌家は七十五日以上たつたので、規定通りもうすつかり、あの時代の事も忘れたかのやうに、そして自分等が賢信の悪口をさん／＼云つたのをまですつかり忘れ果てたかのやうに、けろりとして一列縦隊の中に加はつて、新夫婦の前に出ると、さも心から二人を祝つて居るやうに、にこ／＼として、科を作つて盛んにびよ／＼としてお世辭をやつて居た。時雄は又皮肉を感じた。やがて時雄の番が來た。時雄は皮肉を感じながら新夫婦の前に出た。しかし、賢信の顔をみると、時雄の心からは、さらりと皮肉が消えた。時雄はなんだかうれしかつた。熱い友情も感じた。花子さんはお雛様の様に美しかつた。時雄を見て、意味深くほゝ笑むで、厚意ある眼をむけた。時雄はそれもうれしつた。時雄は心から二人を祝福してやりたい氣になつた。時雄は心をこめて、熱い友情を以つて、厚意ある眼を二人の方に向けながら、

「おめでたう。」

と心から云つた。二人も心からそれを感謝を持つて受け入れた。二人は時雄を眞の親友だ

とこの時思つた。實際その時、賢信と時雄は又、三年前の親友になつて居た。皮肉の氣持はすつかりどこかへとんで行つて了つた。時雄はそして二人の前を去つて會場に入つた。會場ではもう餘興のお能が初まつて居た。お客は續いて、ぞろ／＼と入つて來た。それらの人々は皆、入るとすぐ餘興に氣を奪はれた。そしてお客は、今日は賢信と花子との結婚の披露だと云ふ事も何も忘れて面白がつて餘興を見るのだつた。お能の次には、長唄の勸進帳があつた。三味線。鼓。太鼓の響は、西洋館の中にあふれるやうだつた。その次には帝劇の幹部俳優の素踊りがあつた。

それが喝采裡のうちにすむと、いよ／＼次の間の食堂の扉は開かれた。お客はぞろ／＼と食堂に入つた。いつもの帝國ホテルの食堂とは、今日は見違へるやうに變つて居た。まはりには縁滴る青々とした、松竹梅などが植附けてあつて、あたかも大森林の中で食卓をかこむやうな感があつた。松や梅は、苔が生えた老木が、惜しげもなく根元から切られて立つて居た。まん中の大きな食卓の上の中央には箱庭のやうな、小さな富士山が出來て居て、それから一すじに一尺位の幅の小川が、食卓の上を流れて居た。小川の左右の岸には

小さな草花が咲き亂れ、そして盆栽の松や梅や杉などが所々に、立つて居た。木村家の如き大富豪の披露會でなければ到底出来ない豪華極る宴會であつた。

時雄の席は末席だらうと思つて居たが案外にも、指定された席に来てみると、それは新郎新婦のかなり近くで、右も左も、所謂世に時めく大官連なので、時雄は一寸恐縮した。そしてどうして自分をこんな所へ据ゑたのかと、不思議に思つた。一同が席につくと、燕尾服の給仕人が澤山で、所謂山海の珍味が、それから運ばれたわけだ。お客はそれを、きどりながら、うまさうに食ふのだつた。

やがて食事が、デザートコースに入ると、型の加く媒妁人の藤本伯爵が立つて挨拶をした。藤本伯爵は先づ、武藤の家柄が、左大臣何とかの後裔で、我國で名譽ある尊い家柄だとか何とか賞めたて、次に今の武藤伯が、今の中央政府の重い役に就いて國家の爲に奮勵して居られると云ふ事を話し、それから今度は木村の家が、日本の代表的の實業家で、勇三郎氏は又國家の爲に大いに働らいて居られると云つて賞めたて、この兩家が今度縁組をされると云ふ事は實にお芽出度い事で、これからはこの兩家が車の兩輪の如く助けあつて

國家の爲に盡されるであらうと云ふ事を話し、それから新郎の賢信君は、今年××大學の法科を優等で卒業された前途有望の青年で、花子嬢は又××高等女學校を、これ又優等で卒業された才媛である。この御兩家の此御兩人が、今度結婚されたと云ふ事は、實にお互ひにその配偶をよろしきを得て居る。こんなによくつりあつた、立派な配偶を得られた事は實にお互ひの爲め、そして兩家のため、延いては國家の爲に慶賀すべき事である。そして、私はこの慶賀すべき御結婚の光榮ある御媒妁したのは自分ながら、實にいゝ事をしたと思ふ、みなさまからも、でかしたと賞めていたゞいてもいゝと思ふと云つて、お客を一寸笑はし、それから、二人はこれからお互ひに愛し合ひ助けあつて美しい家庭を持ち又國家のために盡すやうにして新婚の二人はまだ何と云つても若い無經驗のものだから、よろしく皆様の御引立を願ふと云つて、喝采裡のうちに演説をへた。

これをきいて居た時雄は、くすぐつたくてたまらなかつた。二人が結婚をした事は國家の爲に慶賀すべき事で、その媒妁をした自分に得意だと自ら云つて、お客を喜ばして笑はせながら、暗に、兩家と新夫婦に祝福と讚美を捧けて居る藤本伯の演説は時雄には、皮肉以

上にくすぐつたかつた。へむ。なんだ。御自分は只媒妁と云ふ名義ばかりで、只結婚式場に列しただけで、すべてお膳立はどうせ兩家の人にやつてもらつたらうに……その名ばかりの媒妁人が光榮ではめられるなら、その前に、この己が賞められねばならぬぞ。この己の方が、よつほどこの結婚に關係があるぞ、しかし、あの時、手紙の上書をしてやつた頃に二人の愛が「世間」にばれたら、この光榮ある兩家は如何に不光榮の兩家と云はれ、國家のためにも慶賀すべき二人の愛が、如何に唾棄すべき愛と云はれたか……同じ二人が、同じことをするのに……へむ。何を云つてやがるのだと時雄は口の中で云つた。

時雄はこんな皮肉を考へて居ると、ふと、あの手紙の上書をして、父が木村氏から侮辱され、そして、その翌朝、時雄は父の前に呼びだされて叱られた日の事を思ひ出した。父が生きて居たら、父が生きて居てくれたら……木村氏は何と云つて父に顔を合はすつもりだこの今の藤本伯の演説を一言、父にもきかしてやりたかつた。父は如何に皮肉を感じるだらう。父がもう二年長くいきでてくれたら……こんなことを時雄は思ふと、くすぐつたい氣持が、遂に不愉快にまでなつて來た。彼は席を蹴つて立ちたくなつた。しかし禮儀正

しく育てられた時雄には、それはなし得なかつた、時雄はいら／＼した氣持で食事のすむのを待つた。

食事がすむと、人々は立つた。時雄は立つて、すぐ出口の方へあるいて行つた。すると彼の後ろから速歩にあるいて來て、彼の前に立止つた人が居た。ふとみるとそれは木村勇三郎だつた。時雄は禮義として一寸頭を下けて、すぐ行かうとした、すると木村は、

「あ、林さん。」

と云つて時雄の姓を呼むだ。

「はあ？」

と時雄が答へて、木村の顔を見ると、木村の顔はにこ／＼として居た。

「林さん、今日はわざわざおいで下さいまして、ありがたう存じます。」

と云つた。時雄がふと見ると、木村の顔は、實に厚意にみち／＼と、もつと云ひたい事、お禮云ひたい事がたくさんありますが、お客の中ですからと云ふやうに見えた。そして、強い熱意と感謝の眼がむけられてあつた。その中には富饒らしいやにるばつた態度もな

く、只、娘の幸福を心から喜んでゐる老年の親の喜びと云ふやうなものが出てゐた。それは赤裸々の人間的の厚意ある氣持だけが、今こそ木村の顔に出て居たのだ。富豪と云ふ背景や會社の社長などと云ふ地位も何も消えて只人間の正直な感謝が見えて居た。それは淋しい老年の皺の中に包まれた心からの微笑であつた。

それを見た時雄ははつとした。人のいゝ時雄の心が、どうしてこの赤裸々の人間的の喜びを快よく受けいれないで居られようか。時雄は、今まで感じて居た皮肉もくすぐつたい氣持も、又それから席を蹴つて立ちたいと思つた怒りの心も、皆消えた。そして、凡てを忘れ、凡てを許して、只その老年の淋しさうな木村氏の感謝の微笑を快よくうけいれたくなつた。

『今日はおめでたう存じます。心からお喜びいたします。』

時雄はさう云つて、心か新夫婦を心に祝福した。そして厚意から微笑を花子の父たる木村にかへした。木村は又それを嬉しさうに受けて、又厚意ある微笑をかへした。厚意ある微笑は二三度、木村と時雄の顔と顔の間を往復した(完)……一九二一・九・十六——

何たる趣味を以て、
此んを小説をなす馬鹿の行の誤か、とん

(馬鹿貴族の権威)

無能な奴にこの小説が

解るか

なまね

金の話

その時、私は丁度、或る展覧會からの、歸りがけであつた。

種々の色彩に強く刺戟された視覚は、心地よくも、疲れ果て、居た。眼球の後ろのはうがいやに重つたいやうな氣持がして、目蓋の上のはうが、時々ビリ／＼と軽く、痙攣して眼球をさするやうな心持がする。眼をぢつと閉ぢて目蓋の上から、指でそつとおすと、あの快感があつた。そしてその神経はずつと後頭部の方にながつて居る事が、意識される位に、後頭部にも朦朧としたやうな、いやに、どんよりした重つたさがあつた。頭も疲れ居る。しかし、この疲れた限や頭や體を、ぢつと椅子とテーブルに凭れさせて、廣い食堂の中に、何を考へるともなく、料理を待つて居る心持は、ゆつとりした又いゝものであつた。頭の中には思ひ出すともなく、今日の繪の印象に残つてゐるのが、代る／＼上つてく

る。

食堂にはもう電氣がついて居た。しかし戸外はまだ明るい。夕靄が、樹々の梢におどんで見える。窓から射す、青白い夕ぐれ的光りと、電氣の黄色い光りとが、不調和にぶつかりあつて、食堂の中は、落ちつかない明るさであつた。

料理をあつらへて了ふと、私はぢつと、室の中を見るときもなく見まはした。誰か知つてゐる奴は居ないかな。こんなことを思ひながら首をあちこちとむけて見た。すると、むかうの隅に、丁度、今來たらしい。洋服の男が、どうも川田らしい。珍らしい男が居るなと思ふとたん、川田は私をみつめた。そして例の、人のいゝ笑顔をしながら、どん／＼こつちにやつて來た。

『やあ、しばらく。』

『する分。しばらくだね……時々君達の事を思ひ出すよ。學校時代のことをねえ。まあかけないかい。ほんとにしばらくだね。』

『あゝ、随分になるね。この前の同窓會には君は來て居たね……あの時あつたつきりだから

ね。今日はね、今展覽會を見て来たんだよ。あの××つて人のかいた「窓によれる女」つてのね。あれはい、んだろ。」

「あ、……さうさねえ、僕も今その歸りだよ。」

「さうかい。あの繪ね。とうく見て居たらほしくなつて、僕買つて来たよ。少し高いけれどね。まあ××つて人が死ねば、値も出るだろ。あは、。」

「××の繪をかつたのかい。あんな繪なんぞ、死ねば値が出る所か、さがるよ。」

私は思はず笑ひながら答へた。川田は私と初め學校が一緒だつた。其後私は病氣で學校を止めて了つたが、川田は法科を出た。そしてそれから、川田はお父さんをなくしたが、その財産を受けついでから、今では、實業界でも少壯新進の事業家として、知られて居る私は學校を出てから、同窓會以外には、殆んど、川田とあふ機會が無かつたが、會へば彼は話上手な、又人のい、性質なので、いつも私も心持も悪くなく面白い話の相手をさせられて、いろんな彼の周圍に起る話を珍らしげにきくのだつた。又私と彼とが、まるで生活が違つて居ることも別のある興味をそつた。そして彼と私とはまるで性格も考へ方も違

ひながら、若い學校時代をずつと一緒に過したと云ふ事と、又其頃のお互ひの家庭が同じ位の生活程度だつたと云ふ事が、妙にある眼に見えぬつながりとなつて、これが他の男ならきつと、お互ひに氣持が、ちぐはぐになつて了ふ筈なのをそんなに私もいやな氣をせずと一緒に話して居られて、又別の面白さがある。それで居て、いつも、その話は私の性格とは餘りに違ふものなのだ。

川田と私は、同じテーブルで久しぶりで食ふ事にした。かうやつて、二人が向きあつて頼張るのだと思ふと、又惡戯坊主時代の事を思ひ出す。それが又あるなつかしさを湧かすのだ。それで居て今の二人のまあ違ひ方は、どうだらう。

「どうだい？ 相變らず君は何かかいてるのかい？」

「あ、相變らずだよ。時に君の方の事業は近頃どうだい。財界が不振だとか云ふが、君の方は別にどうもなかつたかい？」

「あ、今財界一般は弱つてるがね。僕の方は弱りはしないさ。弱るところか、すてきなものを今度見つけたんだよ。」

「さうかい？ すてきなものつてどんなものだい？」

「金さ、金山だよ。しかもシベリヤだよ。こいつが、うまくゆけば、僕はシベリヤの王様になるんだ。」

「へえ……シベリヤに金山なんかあるのかい。」

「金山があるのかいは情無いね。これだから日本人はだめだよ。そりやこんどの金山はすてきだよ。何しろ非常のものなんだからね……」

「さうかね、それはいゝね。」

「それについて又とても、縁起のいゝ話もあるんだよ……」

川田はもうむづ／＼して来た。何か頭の中に、どん／＼話が湧きたつて来たと言はんばかりに椅子をのり出して、つめよせて来た。そら初つたなと私は思った。しかし私もシベリヤの金山の話は妙に興味を引いて、きゝたくなつて来た。そして川田の話がしたいと云ふ氣持を、氣輕に引とつて、さあ話せと云はんばかりに身がまへた。凡てはそれできまつた。そこへ料理がきた。オードブルが来たのだ。二人の手の先にはフォークとナイフの

響がした。

「食べながら、話さうぢやないかい。」

腹のへつてる私は、食ひ物を見ては、先づ川田の金の話どころではなくなつた。川田はオードブルを皿にとるにはとつたが、それは今迄は無意識にやつたので、今の私の言葉で初めて「これはこれから食事をするんだつけ」と氣がついたと云ふ風に、一度皿の中に眼を一寸落して、

「うんたべながら話すよ。」

と云つて、サアジンにぐつと、フォークをさして、口へ持つてゆきかけたが、もうそのうちに、話が始まつて、サアジンを噛むのと一緒に、彼の口からは話が勢よく出るのだつた。

「僕がね、今度、シベリヤに金山をみつけたと云ふのは、まづその初めに、シベリヤの木にめをつけた事から初まるんだ。ねえ君。日本もシベリヤに出兵して、大いに國力の發展をしようと思ふのだろ……うん？ そりやいろ／＼外交上には口實はあらうさ。しかし、

僕達にはさう、さう解釋した方が都合がいゝのだ。いや笑つちやいけない。これは僕のドクマでもなからう。どつちにしろ、事實はさうなるんだ。それで、政府では武力を以つてシベリヤを侵略する。うん……？ 侵略つたつていゝぢやないか。ミタリズムも僕達には結構だ。そのミタリズムのおかげで、僕達は又金まうけにありつけるんだからね。その政府では武力で侵略する。所で我々實業家はよろしく財力を以つて、これを利用して、シベリヤを征服してやるべきだと、僕はこゝに早くも眼をつけたんだね。日本の多くの實業家は、日本の國內でシミツタレタ商賣をして居やがる。ねえ、海國男子宜しく大いに海外に發展すべきぢやないか。しかも、シベリヤのごとき未開の地に活動してこそ、又面白味がよけいと云ふものさ。三井や三菱も、そりや、流石に抜目はない。もうどんく仕事をやつてやがる。しかし僕の方は、財力は到底三井などに及ばないさ。しかし、こつちは小さくて、すばしつこいからね。まあ、君もみて居たまへ。今にこの金山はすてきになるから……所で、その金山の話は、まあ、あとまはしだつたけ……僕は日本軍がシベリヤに入つて、シベリヤが日本の勢力範圍になるやいなや、早速、僕の股肱の臣をだね……そ

の調査員として、シベリヤに派遣したのだ。その男は先づ樺太に渡つて、それから、シベリヤの沿海州に行つたのだ。所が君、樺太の丁度向う側には、ほらあのシホタ山脈があるだろ。其處は千古斧鉞の入りざる大森林だらけなのだ。その材木を伐採すれば非常のものなのだ。殊にその材木は、マッチの軸木に非常に適する木が多いのだ。それでその僕の調査員はだね、早速その材木を伐り出す事を考へたのだ。しかし何しろ、シベリヤは日本の勢力範圍になるにはなつたが、何と云つても外國だからね。日本人の名義では、容易に材木の伐採は許可されないのだ。それには、どうしてもロシア人と共同して、そのロシア人の名義にしなくてはいかんだ。それで、僕の調査員は、ロシア人を一人、手なづける事を考へたのだ。それで一度、先づ樺太に引きかへして、米だの、豆だの、鹽だのと云ふ食料を少し仕入れて、それを持つて、又沿海州に渡つたのだ。沿海州と云つても、浦鹽と、尼港との中途にある、俄里哈と云ふ小さな港にまづ上つて、その附近をしらべたわけだ。その邊は漁業もあるが、獸の皮などを、食料と交換して生活して居る者が少し居るのみなのださうだ。それで、僕の調査員は、その俄里哈のそばの、あるロシア人の親方の處へ行つ

たのだ。所がそのロシア人の親方は、元のロマノフ王朝の役人だった奴で、大の日本最良な奴なのださうだ。それで、早速、其奴と仲よしになつたわけだ。それで、先づ持つて来た食料を、其奴に供給して、獸の皮などを澤山、貰つたのだ。どうしてその獸の皮だけだつて、こつちへもつてくれば、二萬圓からの價値があるだけもらつたんだ。どうだ。中々うまくやつてるだらう。あゝそのロシア人の名はアントン・クロツキーと云ふのだ。所で、そのアントンの名義にして、その森林を伐採する手續をして、アントンと契約書をとりはし早速、浦鹽政府に出願したのだ……なあにどうせ浦鹽政府なんて、假政府のたため政府なのだ。それでその材木の伐採の手續にはうまく成功したのだ。所が、どうだ。そのアントンつて奴が、金山を持つて居やがつたのだ。これから話が面白くなるんだ。」

川田はかう話し／＼オーダブルを平けて次に来たスーブの、皿の底をみながら、スーブをとつた。そして、さも口の中に水分がほしいと云はぬばかりに、うまさうに、スーブを飲んだ。そしてのみながら、もうまちきれなくつて、話のつゞきをやりだすのだつた。」と云ふのはかうなのだ。僕ん所の調査員が見て居ると、其アントンの所にだね。ロスケの

子分みたいな奴が、時々砂金を持つてくるのだ。するとそのアントン親方が、それらに其報酬として食料を與へるのだ。それで僕の調査員は、その砂金の出處をしらべたのだ。所がそれは、元ロマノフ王朝家所有の大金礦のある處の附近から、取つてくると云ふ事がわかつたのだ。それで、アントンは實はその金礦に派遣されて居た技師だつたと云ふのがわかつたのだ。戦前には、それでも、支那人の夫人なんかをつかつて、その金礦も相當にやつて居たのだが、ロシアがみだれ、ロマノフ家がつぶれてからは、その金礦は、資本家はなくなる。又過激派——バルチザンなんかは攻めてくる。そして支那人の夫人共はみな逃げて了ふ。と云つた具合で、そのまゝになつて了つたのだが、シベリヤも日本軍が入つてバルチザンもどうやら、その附近にもあまり出なくなつたので、残つたロスケ共が、その邊の河原を掘つては、砂金をこし集めて、アントンの處へもつて来て、生活して居るのだと云ふ事がわかつたのだ。いゝかけんに河原を掘つて、不完全なもので、砂をこして、砂金を集めても、随分集ると云ふのだ。大いに資本を入れて、完全な機械でやるやうにしたら、どんなに金がでるか分からない位、有望な山なのだ。どうだ、面白いだらう。實際

金ときちや、こたへられないね。あは、あは。」

川田は、次に來たフライ、ブイシユにレモンの汁をしほりながら、さも愉快さうに笑つた。同時に川田の顔には、さも得意さうな表情がうかんだ。それはさも面白い話をしてやるぞと云はぬばかりの、調子にのつた、浮ついた、しかし人のよささうな笑ひであつた。川田はそして、又改めたやうに話し出した。

「いや實際この金、このゴールドだね、このゴールドつて奴程、昔から不思議なものはないよ開闢以來、このゴールドつて奴程、人間の衝動を驅りたてるものはないのだからね。どんなに怒つてる奴だつて、この金をみせれば、笑ひ顔になつちまふ。まつたく泣く子に乳以上なものだからね。あは、あは、所で少し學説になつてくるのだが……」かう云つた時私には思はず笑ひ顔をした。それとみて川田は又人のいゝ顔で、その笑ひをみながら嬉しさうに話しつゞける。「所でこの金、このありがたい金つて奴は又變な奴で、全世界、地球上、到る處にあるものなのださうだ。凡そ、どこの國でも金のない處はない筈なのださうだ。所が何しろこの金が、人間は欲しくてたまらないから、どうかして、この金を掘りださう

と考へる。そして金が出ると云ふことになる、どん／＼と人が集つて來てこの金を掘つて了ふのだ。それでも、エジプト、アツシリア、インドなどと云ふ、太古の文明國には、もう殆んど金は掘りつくされて、だから無いのだ。それで次第に文明を逐つて金は掘り出され、支那や日本からも掘り出される。それから西部のヨーロッパからも掘られて了ふ。さあ、かうなると金の値打はますます／＼出るわけだ。それで「金が出る」と云ふことになる、方々からそこへ人が集つてくる。さうしてその土地が繁昌するのだ。それで今度は、金を逐つて、土地が文明になると云ふ有様なのだ。近世になつて、北米合衆國のカリホルニアから金が出ると云ふことになつて、カリホルニアには、どん／＼人が集つて、今のやうにそれが元で繁昌したのだ。それからオーストラリアだ。こゝからも金が出ると云ふ事になつて、人間がうぢや／＼集つて來た。今又現に出つゝある。それから大きな金礦は、アラスカだ、こいつが又大きな金山でね。さあ「アラスカから金が出る」と云ふことになる。「そら行つて掘れ」つてな具合で、老若男女、西からも、東からも、陸續と集つてくる。うわん／＼とやつてくれる。押すな／＼と云ふ有様なのだ。さうすると、アラスカには

あの寒い冬がくる。しかし、掘る奴等は夢中なのだ。金のお顔を拜すれば、人間夢中たらざるを得んからな。無理もないさ。命よりも金が大切の世の中だ。寒いも、凍るも忘れて金を掘る。金を掘る。金を掘る。さうするうちにこっえてくる。さうして、懐や何かにだな、金をいつばい、つめこんで、手に金を、かうしてもつたまふ、こんなになつて、こっえて死んで居る人も出来てくるといふ有様だ。』

川田はかう云ひながら、ナイフを持つたまふ、右の手を、なぐめに高くあげて、「こんなになつたまふ」と云つて、つづつて死んだ有様を、さも本統さうにしてみせた。私は思はず、ふき出して了つた。するとその笑ひは川田に反射して、川田もぶつとふき出した。しかし、川田は、私が川田の黄金崇拜がをかくして笑つたとはとらなかつた。又金の爲めに命を忘れて、アラスカで凍え死んだ人を哀む心持が川田には少しもなく、只面白い笑ひ話にして居る川田を冷笑したんだとも、川田はとらなかつた。金と云ふ魔物が如何に恐ろしいものであるか、金は人の使ふものであるものを、金の爲に如何に人が使はれるか。如何に人は金の奴隷にされるか。それを知つて、それを又よい事として、その魔物に魅入られて

居る人々を利用する如何に多くの悪人が居るか。そんな事を私がどんなに今、考へて居るかを見ぬかうともしないで、川田は笑つて居る。川田は私もやつぱり黄金崇拜の一人だと自らきめてかゝつて居る。そして今、私が思はず噴き出したのも川田の話のうまさで、思はずもつりこまれて笑つたのだと思つて居る。勿論、私も川田の馬鹿に誇張した、身振り入りの話につひ笑つたのは事實である。しかし、私の笑ひは單にそれだけではない。笑ひのはじまりはそれであつても、その笑ひのものには、幾條かの伏線がある。しかし川田はそれを、わざと見ようとしなくて、自身の話上手の、その技巧を自ら楽しんで、無邪氣に、人のよささうに笑ひを反射させて居る。私は又それと氣がついて、その川田の無邪氣の笑ひの反射を、氣がるに引きうけたくなつた。そして私も私の笑ひの伏線をわざと包んで、その川田の人のいゝ笑ひを又、すなほに受けて又かへした。二人の間には今や、只無邪氣の笑ひが往來した。川田は、それでフォークを口に運んで一口頬張ると又話し續けた。

「まあそんなわけで、全世界到る處で、金が出たと云ふ事になると、暑い處であらうが、寒い處であらうが、どん／＼人が集つて来て發掘して了ふと云ふ有様なのだ。所が、わが

このシベリヤはどうだ？ お互にシベリヤに就いては、中學校の同じ教室で、あの禿頭の教師から、地理で習つただけだ。その時の我々の印象には、何が残つて居るか？ ねえ、茫々した廣い土地。何かかう渾沌としたわけのわからぬ、日本なんかの何十倍もあると云ふとてつもなく大きな土地が、地球の北部に、かう何か怪物の様に横はつてゐる。さうだ怪物のやうな印象なのだ。此處にはまだ千古斧鉞の入りざる大森林がある。此處からは千古よりまだ孔子も出ない。釋迦も出ない。そして耶蘇も出ない。まして、物質文明には少しも觸れて居ない。全世界のどの地方からも金が出るとすれば、此處からも出ない筈はない。只まだ、そんなわけで人が手をつけないのだ。大いに有望ぢやないか、そしてロマノフ王朝の盛んな時にもまだこんな東のはての寒國にまで、本統に手をつける餘裕はなかつた。只ロマノフ家が、シベリヤの端に大きな金山を持つて居ると云ふ事は、金の事をかいた外國の書物にも見えて居る。しかしすべてはまだ未知數なのだ……どうだ面白くなつて來たらう。所で僕はその調査員は、そのアントンが、ロマノフ家の金山の技師だつたと云ふのを知つて、大いに喜んだのだ。そして早速一つ、その金山を、我々日本人と共同して發掘

してみないかと云ふ話を持出したのだ。何しろその金山はロマノフ家のもので、もうロマノフ家がつぶれた今日では、誰も持主がない。それでアントンが只自分のものとはして居るものゝ、資本はなし、どうする事も出來ないで困つてゐる矢先だし、アントンは大の日本最良ときて居るから、喜ぶまい事か、すてきに喜んで、早速その金山に案内すると云ふ事になり、石油發動機の小舟にのつて、川を何十哩かのほつて、その山に行つたのださうだ。すると其處には、トロツコの跡や、バラツクの跡などがあつた、其處では元、その河原で支那人を使つて砂金をとつて居たのだ。勿論まだ金山を掘りだすと云ふ所までは、ゆかぬのだ。しかし砂金があるからには金山なのだ。それで、河原を六尺ばかり掘りさけて、砂をとつて、こすと、砂金が成程とれる。何しろ僕の調査員には、金の事は一向わからぬ素人なので、とにかくその砂金を持つて僕に相談すべく、歸つて來たのだ。』

私は餘り話がよすぎるので、なんだか狐につまゝれたやうな顔をしてきて居た。しかしそんな方面の一向暗い私には、又彼の云つてゐる事がでたらめだと否定する何等たしかな知識もない。只

「だまされるのぢやないか？」

と云つてみた。私自身も川田にいゝ、かけんの事云はれて居る気がして一つにはそれを己を知らないと思つた君はいゝ、かけん云つてるのだらう」と云ふ意味も含ませてさう云つたのだつた。川田は眼をほそくして笑ひながら「何こつちだつて商賣人だよ。君とは違ふからね。あはゝゝ。さうすぐだまされるものか。僕は早速、金の方の我國でのオーソリチイである。僕の方の或る技師にシベリヤに出張して貰ふ事にした。現にもう行つて居る。様子は太へんいゝのだ。とても僕一人で、その資本が出し切れなければ、僕の友人の、大資本家連をどんどん仲間に入れるのだ。もう是非入れてくれと云ふ奴も居るのだ。それでも足りなくて、とても我々に持ちきれなければ、アメリカの大きな鑛山家……まあヴァンダーリップ邊りにうんと高く買つて貰ふさ。實は僕等よりおくれて、今頃になつてアメリカのそんな奴等が、どん／＼シベリヤに入つて来て、そんな處を鶴の眼鷹の眼で探して居やがるのだから……」

私は只驚くより仕方がなかつた。こいつは己達と餘程違つた生活をして居るな。いろん

な生活もあれば、あるものだと、半分好奇心にかられて、いつも川田の話をきくときと同じやうに今日も又、馬鹿にこつちも上調子になつて、調子を合はせて居た。すると川田の話はまだつきない。もう食事もすみかけんになつて、ブツディングが運ばれて来た。

「所が君、こゝにもう一つ君にきかしたい事があるのだ、それは僕のその金山を占ふのに馬鹿に幸先がいゝものがあるんだよ。實に不思議なんだよ。それは昨日、僕は何の氣なしに子供が行きたい／＼と云ふから、活動に行つたのだ。僕は活動なんかに行く暇がないからまるで行つた事がないのだよ。所が君、昨日、子供の奴があまりせびるので、つひ行く氣になつて、家中の奴を引つぱつて行つたのだ。溜池の活動館だ。何とか云ふね、あれは……あゝそれ／＼その活動だ。すると面白いぢやないか。その又見た活動が、今度の金三の話にそりやあよく、符號するのだ。題はね「ジャックと豆の木」と云ふのだ。その筋は長いのだが、簡単に話せばかうだ。ジャックと云ふ小さな男がある。此奴は小さいが智慧があつて強い。まあ日本人なのだ。いゝか、すると此奴が播いた豆の種が、どん／＼と育つて行つて、天にとゞいて了ふのだ。それでジャックは、その豆の木によぢのほつて天へ行く

のだ。天とはシベリヤだ。「木」と云ふものによつて、シベリヤに調査に出かけるのだ。すると、その天國には、小人の國があるのだ。そしてその小人國王のお姫様と云ふのが、大それたジャックに好意を見せて仲よしになるのだ。そのお姫様をアントンに例へよう。いゝか、所が、この國の近くに悪魔が住つて居て、この小人國の奴等々を、毎日とつて食ふと云ふのだ。人喰ひ人種なのだね。それがロシア過激派なのだね。それでジャックはその悪魔の家に探險に行くのだ。さうするとその悪魔の女房は、こゝはお前等のくる處ぢやない、こゝわい處だから歸れと云ふのだが、ジャックは強い奴だから平氣なのだ。そのうち悪魔が歸つてくるので、ジャックは爐の中に隠れて様子を覗つて居ると、その魔惡の奴は「人臭い、人臭い」なんて云ひながら入つて來やがるのだ。しかし女房がいゝ具合にとりなして、だまかして了ふんだ。すると悪魔は人間のスープを飲んだり、人間の腸結なんかに食つてやがるのだ。さうするうちに悪魔は戸棚から「金の鶏」を持ち出してきやがるのだ。どうだ。金だぞ。いゝかい。そしてね。その悪魔の奴が、その「金の鶏」をカンと叩くと、ボンと「金の卵」を生むのだ。面白いだらう。忽ち金の卵を、澤山積上げて了ふのだ。それを陰から

見て居たジャック先生、その「金の鶏」が欲しくつてたまらなくなるのだ。それで悪魔が寝た隙を覗つて、その「金の鶏」を、かつさらつて逃るのだ。さうして、豆の木をつたはつて持つて歸つてきて大喜びをするのだ。それでもう小人國の事を忘れて居たが、其夜、神様に夢で叱られて思ひ出して、再び天へ登つて、小人國の軍隊を率ゐて、悪魔退治をするのだ。悪魔の家に火をつけて、悪魔が窓から出てくる所を油を石段にぬつて置いて這らして、網を張つて置いて首をしめたりするのだが、悪魔はとても力が強くて、そんなもの破つて逃つてくる。それで仕方がなく、ジャックはそのお姫様をつれて、豆の木をつたはつて逃げろのだ。すると、悪魔も、やはり豆の木をつたはつて、あとから逐つてくるので、こつちがおりとすぐ、その木を伐るのだ。それで悪魔はドーンと地に落ちて死ぬのだ。いゝか。シベリヤの森の木を伐つちやつたので、渦激派はもう住む處がなくなると云ふ事なのだ、それから、ジャックはそのお姫様と二人で「金の鶏」からどん／＼金の卵をうまして大金持になつたと云ふ筋なのだ。どうだい。うまく話が、びつたり合ふだらう、君、嘘だと思ふんなら、溜池の活動館に行つて見給へ。まだやつてるだらうから。實に不思議

の因縁ぢやあないか。面白いだらう。占ひでは大いに幸先がいよよ。あはよよ。」

川田は調子づいて、元氣に笑つた。私は煙に巻かれて、あつけにとられた。考へると馬鹿馬鹿しいが、かういふ陽氣な調子づいた「金」ばかりを考へた生活もあるかと思ふと、自分等の生活と思ひくらべて、變な氣がした。それはいつも川田に會ふときつと起させられる氣持ではあるが……其時はもう二人の食事はすんで居た。川田は葉巻を燻らしながら、笑ひのつゞきを軽く、くつくと口の中で笑つて居た。川田の葉巻の香が、疲れた私の嗅覺を心持よく刺戟する。

「どうだい君は、かへりは電車かい？ それぢや、僕のカーで中途まで行かないかい？」

川田に誘はれるまゝに、私は萬世橋の甲武線の驛まで送つて貰ふ事にした。

川田の自動車は、靜かなエンジンの音をきざみながら、レストランの玄關を離れた。十二シリンダアが小刻みに刻むリズムと共に、車は軽く振搖した。車内の腰掛けは、柔かで、その中に沈没するやうに包まれた疲れた體を、やはらかに振動させた。それが眠りを催すやうに心持がよかつた。川田も腰掛の蒲團に體をうづめるやう様に沈没させて、葉巻

をまだ燻らせて居る。

上野の山には、銀色の磨き切つたやうなまん圓な月が、浮んで居た。青黒い空の下に、樹々が黒く、黒繪のやうに浮彫にされて居る。その樹々の袂には、豆粒のやうな電燈が、小さな輪をきて光るて居る。殿堂の屋根が、青黒い空に、くつきりと、力の入つた弧を畫いて、そりかへつて居るのが、樹々のきれ目に見える。

「あゝ、いゝ月だ。」

私は思はず川田を振りかへつた。川田も窓から外をみて、

「いゝなあ。」

と云つた。自動車は走りつゞける。月は黒い梢を出没する。私の頭には、まださつきの川田の嘘のやうに面白い話が、煙のやうに濛々として居た。あの黒い樹々も、あの殿堂もそしてあの月も川田には金に見えるだらうか。こんな事を思ふと、貧乏な荒屋の窓から、しかし暖かい家庭を作つて居る空氣の中から、あの月を見て居る人、その人は今日の勞働に體は疲れて居るが、今は妻子にとりまかれて疲れも忘れて居る。そんな人もあるだらう

そんな事を思ふと、色々な生活もあるものだと思ふ。川田は何を私が思つてるとも知らず葉巻をくわへたまゝ、さも疲れたと云ふやうにほんやりして、軽く車の動搖に體をゆだねて居る。

自動車は上野の山を出た。街の電燈はまばゆく、輝やいて居る。その中を黒い人々が、波のやうに動く。自動車は、それらの人々を吐り飛ばす様な勢ひで、クラクションをならし、往來の人を右と左にかきわけて、その中を縫ふやうに、人々を蹴飛ばすやうな勢で走り續けるのだつた。

彼の鶏と野良犬

——幼き思ひ出より——

洋燈の光りに、その白い色が餘程黄色にほかされた鶏卵は、彼の小さな指に弄ばれて、その楕圓形をくるくると回轉させられた。この、これはやすい白い殻の中には、あの半透明などろくした白味と、まん圓の黄味が入つて居て、それが、幾日か牝鶏に抱かれると、あのむくくした、ビロードよりも柔らかい毛に包まれたヒヨッコになるのだと思ふと、この小さな自然は如何に不思議に、幼い彼の胸に映つたことであらう。彼の小さな頭腦には、それに對する知識慾と、半ば好奇心とが満ち溢れて居たのであつた。しけくとみまもる彼の眼は、黄色いラムプに、バツチリと輝いて、彼は鶏卵を手にとつて、ひつくりかへして見ても、又お盆の上にかへしくした。お盆の上には、一ダースの鶏卵が積み上げてあつた。それは彼の病氣見舞として、Kさんの農場から、寄越されたものであつた。

「爺や、僕かあ、これをヒヨッコにしてみたいや。爺やんとこの、牝鶏、貸してくれない？ 僕、これ抱すんだから」

爺やは日にやけて青銅のやうになつた顔や腕を、ラムプの光で、テカ／＼と光らして、その血脈の線のもり上がった頑丈な手を、言葉と共に動かしながら、

「坊ちやま、卵をだかせるのは、巢についてる牝鶏でなくちやだめでござえますよ。爺やのとこのは、只今巢についてをりませんや。が、ようがす。坊ちやま、これ孵化してえなら明日、爺やがどこからか、巢についた牝鶏をかりて来てあげますで……」

と云つた。彼はもう爺の言葉がたまらなく嬉しかつた。この白い殻を破つて、ヒヨッコがビヨ／＼と出る時は、まアどんなに愉快だらうと思ふのであつた。

翌日、爺やは約束通り、どこからか巢について居る牝鶏を借りて来てくれた。それはバフ色の、もく／＼とした、牝鶏で、絶えず、コツ、コツ、コツと鳴いて居た、爺やは、ビール箱の中に藁を敷いて、一ダースの卵をその中に具合よくならべた。そしてその牝鶏をその箱の側へやると、ひとり、さつさと卵の上にすわつて、又一聲更らにふとくゴツウと

ないで、體や翼を、ふくらして、卵を抱きかゝへた。そしてなほ氣になると見えて、嘴を盛んに腹の下に入れて卵を具合よく抱かうとした。彼は、不思議さうな顔をして、それをつくぐみたのであつた。そして爺やから、卵は、

『三七、二十一日目に孵化するんだ』と聞いて、二十一日目が早く来るといふと待ち遠しく思つた。そしてカレンダーをくつて、今日から二十一日目の所へ、たどくしい字でヒョコカヘルとかいて置いた。その日を忘れない爲である。

自然は間違ひはなかつた。牝鶏に抱かれた卵は、二十一日目にヒョッコになるのを決して忘れはしなかつた。彼が待ち遠しさに、そつと小さな手を、牝鶏の腹の下に入れて、卵を一つ握み出すと、その卵には、米粒のやうな傷がついて居た。すると、その卵の中でピーピーと云ふ聲が聞えた。彼は卵を耳にあてゝみた。ピーピーの聲は、手にとるやうにきこえた。彼は小をどりして、喜んだ。そして、その米粒のやうな傷を、爪の先でそつと、少しむいてみた。そこには小さなく黄色い嘴の先が、微妙に動いて、又ピーピーと云つた。彼は何と云ふ不思議な、面白いものだらうと、その小さな胸を轟かすのであつた。彼は又

その卵を、コツ、コツと鳴いて怒つて居る牝鶏の腹の下へ、靜かにかへしてやつた。

二三時間の後には、柔かなむく毛に包まれた、まんまるちな、ヒョッコが、黄色のデリケートな足と嘴を持つて、ピーピー云ひながら、親鶏の腹のわきをかけたり、背中の上につたり、翼の間から首を出したりした。そして彼の與へる粟を、その本能の嘴で、巧みに、ついばんだり、水を一々あふむいて、のんだりした。

それが、彼が鶏を飼ふ事をおほえた最初なのである。

十一になつたばかりの彼は、ふとした事から重い病に魅られて、殆んど一週間と云ふものを瀕死の状態に過したのであつたが、T博士の心からの努力や、肉親の者の愛のこもつた看護のお蔭で、やつと峠を切りぬけてから、百日と云ふ長い日を、陰氣な病院の白いベッドの上に、幽かな吐息を繰返して、やつとよろ／＼とおき上がれるやうになつてから退院したのであつた。限院するの間もなく、彼は瘦せ衰へた小さな體を、たゞ一人、大磯の別荘に、後養生の爲に、淋しい孤獨の生活を送つて居たのである。両親はいそがしいので

彼の側には中々居てくれなかつた。それでも時々、土曜から日曜にかけて、東京から通つて来た。しかしその夜毎は、親子の久しぶりのうれしい、愛のみちた一夜一夜であつた。祖母も、時々大磯に来て彼と遊んでくれた。彼が、かうした淋しい生活の中に、鶏を飼ふたのしみを味つてからは、東東から人の来る毎に、そのおみやには、何がいゝかときかれると、彼はヒヨッコを下さいと云ひくしたものだつた。両親や祖母や、又親類の者どもは、時々、籠に入つた、白や黄色や黒やの、まるつこいヒヨッコをぶら下けてはもつて来てくれた。其度に彼は、あのやはらかな、ヴェルヴェットのやうなうぶ毛を小さな手で、觸るなめらかな觸覚——温覺を、心持よく感じながら、抱いたり、おもちやにしたり、ながめたり餌をやつたりしては、小さな鳥小屋の中に、はなしてやる快感をかんじるのであつた。又彼は東東の或る養鶏場から營業案内を取寄せた。そして雨の日や、鶏と一緒に遊べない日は、きつと、疊の上にねそべつて、頬杖をついて此營業案内を見て楽しんだ。その時小さな彼の瞳の裏には、如何なるイマジネーションが畫かれて居たらう。この美しい寫眞版の、珍らしい西洋の鶏の卵が孵化つて、どんな珍らしいヒヨッコになるのであらう。そ

して、それが發育する有様も眼に見えるやうだつた。しかし、種卵は中々高かつた。それで彼もさう澤山思ふやうには買へさうにもなかつた。何しろ、一個三十錢も五十錢も中には一圓とかいてあるのもあつた。その頃は、普通の卵は一ツ二三錢で買へた頃だつた。それで彼は一個と云ふのは一ダースと云ふ意味も別にあるのではないかしら、そして「これは一ダースの事ではないかしら」と初め思つてみた。そしてその營業案内を、叔父にみせた。叔父は笑ひながら「一個とは一個の事だ。一ツだよ、一ダースなんて意味はないと云つた。しかし彼には同じ鶏卵でありながら、二三錢のものが、三十錢も五十錢も一圓もする階段があるわけがどうしてもみ込めなかつた。しかし卵はほしかつた。それで彼の鶏が巢につくと、とき／＼は東京から種卵を買ふ事もあつた。「こんどは雪白レグホンつて奴にしようかな、その次の時は銀色ワイアンドットつて奴にしようかな」などと考へるのは此上もなく愉快であつた。かうして、毎日々々營業案内ばかりみて居るので、しまひにはそのペラ／＼の本が、ボロ／＼に破けて来た。彼はそれを又、念入れて、裏うちをした。そして毎日々々やはり、ねそべつて凝視するのだつた。彼の姿があまりにきまつて居てを

かしいと云つて、叔父は又よくその眞似をして、みせては笑つた。彼はなんだかきまりが悪かつた。しかしそれを止めなかつた。がそして彼れの鶏はどん／＼その数をましたのであつた。

ほか／＼と照る日輪の、庭一ぱいに、擴がりみち／＼たなかを、小さな彼は、瘦せた體にいやに着物や羽織などを、たくさんに着させられて、お園子のやうにころ／＼圓つこくなつて、ちよ／＼と、數十羽になつた鶏にかこまれて、濃い緑の芝生の上で、淋しく一人で、遊んだものであつた。しかし、ヒョッコから育てた鶏が、どん／＼大きくなつて、牡鶏はをかしな調子で、時をつくるやうになり、牝鶏は小さな、白い卵を、巢の中にちよ／＼んと産んで、コツ、コツコケー、コツコツとけた、ましいい聲で叫ぶやうになつて、はては又一羽の立派な牡鶏にもなつて、上手に時をつくり、牝鶏も巢について、卵を抱いてヒョッコの立派なお母さんになつたりして行く小さなもの、成長の階段は、彼にとつて小さなものを育て、ゆ／＼喜びであつたばかりでなく、その度その度に、自然に對する微妙なる變

化に、奇異の眼をみはつては、幼い知識慾の胸を少しづつみたしてゆく小さな發見の、愉快でもあつたのであつた。しかし此等の生活は、彼にとつて半面、非常に幽かな寂寥とやるせない焦慮と幼い苦惱との生活であつたのである。或時、東京から從兄が來て彼が鶏に餌をやつて居る寫眞をとつてくれた事があつた。彼は、細つこい、ひよろ／＼した體を着物ばかりで圓つこくして、群がる鶏の中に突立つて居る。彼は片手に餌壺を持ち、片手に餌をつまんで、鶏にそれを播いてやらうとして居る。が彼の眼は明らかにキョトンとして、力もなくレンズの方にむけられて居る。そのくほんだ眼の淋しさ、やつれた手足の細さそしてなほも彼はほのほのとした日光で、彼自身のうすい影をな／＼めに地上に落して居るのが、何とも云へなく平和な、しかし淋しい感じのする寫眞がとれた。又彼の背景になつて居るのは、冬枯れの、しよほしよほした瘦せた林であつた。それが又、哀れな感じであつた。子供の彼も流石に其出來た寫眞を見て、つく／＼自分で自分が可憐さうでたまらなかつた。彼のその力のない眼には、そも何が映つて居るのだつたらう。さうだ。都會で産れ都會で育つた彼は都會が戀しかつた。それには博覽會の賑はしい上野や、屋外運動具の

そろつた日比谷公園や、美しい銀座のシヨオウィンドウ——それ等の都會生活に對する戀しさもあつた。しかしそれよりもつともつと彼の幼い心を苦しめて居るものは、學校の事であつた。小さな机の並んだ教場——そこには幼い彼の學友が、小さな體をならべて、先生の教へのもとにせつせと、勉強して居る。先生のあの優しい聲が、彼の耳には聞えるやうだ。又運動場で學友等がフットボールをやつたり、ベースボールをやつたりする有様……それから楽しい運動會。思ひ出せば、思ひ出すほど、彼の心を引くものばかりである。彼がこんな田舎で鶏の相手をして居る頃に、彼の友は日一日と學校で、新しい字を覚え、新しい算術を教はつてゆくのだ。彼はどんくおいてきほりになるのだ。いつまでこんなにぐづくして居られよう。しかし、この瘦せ衰へた體をどうしよう。彼の友は、彼をおいてきばりにして、この四月には、とうく六年生になつて了ふのだ。六年生になると、小學でも一番上級で、運動會の時などには、委員にもなり「用意！ ドン！」の砲をうつたりする役目や、お客様の接待も抑せつかつて、胸にしるしをつけて先生等と共にはたらくのだ。五年級からは英語もはじまつた筈だが、五年になつてから殆んど學校へ出ない

うちに病氣になつて了つた彼は、英語は知らない。學友達はうらやましいなあ。ABCはもうとつくの昔によめて、今はどんな六ヶして英語をよんで居るだらう。僕はまさしく一年、後れてしまつたのだ。知識も一年おくれたんだ。こんど學校に行く時は、もう同級生はずつと六ヶ敷い學問をやつて居るのだ、などと、それからそれへと、學校の有様を彼は思ひ浮べてはあせつて、幼い心を、いらくさせ、小さな胸を苦しめるのであつた。

こんな彼の、幼稚な煩悶に、唯一の慰安を與へてくれるのは、やつぱり彼の、仲のいゝ小さな鶏共であつた。彼はほとんど一日中を、朝から夕方まで鶏と遊んで暮したやうなものであつた。そして彼はだんく鶏以外の鳥類を飼ふ事も覺えたのであつた。或時は、爺やにつれられて、おとりの籠をぶら下げながら、裏の山にわけ入つて目白や四十雀もつて来て飼つた。又彼には狩獵の好きな一人の叔父があつた。叔父は仲々上手な射手であつた。叔父は、よく日曜に東京から一泊位でやつてきて澤山の獲物をもつて歸つて行つた。彼は叔父が、狩獵に出かける度に、生きた鳥をおみやけにくれくと云ひくしたものだつた。しかし叔父のみやけは、いつも生々しい血潮にそまつた哀れな鳥共の屍許りであつ

た、所が或日の事、叔父は舟に乗つて海に、鴨などの海鳥を打ちに行つた事があつた。所がその日叔父は數十羽の獲物の他に、翼だけ打たれて、生きて居る「うみすゞめ」を三羽、彼の爲に生かしたまゝも、つて来てくれた。彼は珍らしい海鳥に、またも輝やかなしい好奇の眼をむけるのであつた。「うみすゞめ」は傷ついた羽をばたくさせながら、それでも彼のあてがつた籠の中に可愛らしい眼をきよろつかせて居た。「うみすゞめ」は、初めのうちは何も食べなかつた。彼はそれで、一羽一羽、無理に捕へて、小わきにかゝへこみ、魚のはらわたなどを赤い嘴の中にねじこんで食はしてやらねばならなかつた。彼は朝と夕に「うみすゞめ」にさうして無理に食はした。所が三四日すると「うみすゞめ」はもう自分で、平氣で、魚のはらわたなどを食ふやうになつた。彼はよろこんだ。

又或時、叔父は友達の或る處の別荘に狩獵に行つた時に捕へたのだと云つて、五位鷺の子を四羽持つて来てくれた。彼は又珍らしい鳥がきて、いよく動物園みたいになつた事を喜んだ。五位鷺の子には、ある時には鱗をやつたり、爺やが池で蛙をつかまへてやつたり、又それらのものがない時には、魚のはらわたもやつた。五位鷺はどん／＼大きくなつ

た。初め五位鷺の子は目玉ばかりいやに大きい、嘴のとんがつた、とんきやうな顔をして足はひよろたかく、毛色は穢い栗色で、いかにも滑稽な、とほけた恰好をして居たが、だん／＼育つに従つて、あの繪にあるやうな、すらりとした瀟洒な姿となつた。羽もだん／＼ぬけかはつて、やがては、深いグリーン、ブルューになつた。そして夏のいゝ月夜の時は鳥小屋の窓から首を出して、ギャツ、ギャツとないた。すると、青い／＼海の底のやうな夜の空を、何處から何處へとんでゆくのが、やはり五位鷺の黒い／＼形を月の光に、くつきりと空にうき出して、四五羽宛ならんで飛んでゆくのが、その聲をきゝつけて、高い／＼空の上で、ギャツ、ギャツと答へた。それは如何にも、平和な、しかし淋しい感じであつた。父が、そんな夜折よく居あはせると、まるで奥山に入つたやうだと云つて、すっかり悦に入つて、月を仰いでその上と下で相呼應する五位鷺の聲にきゝとれて居た。そして、

「おい、おきゝ。あのいゝ聲を、深山みたいだね。ほら、上でギャア／＼、下でギャア／＼、何とも云へない淋しい靜かないゝ心持だ。」

と云つて彼を、自分の側近く引きよせて、頭など撫でてくれると、もう彼は、嬉しさと、幸福に恍惚として了ふのであつた。自分の飼つて居る鷺を、父がこんなにも喜んでくれると云ふ事は、彼には又この喜びを二倍にする事であつたのだ。

所が、それは或る夏の夜の事であつた。彼が小さな手を胸の上に置いて、すやくと安らかな夢路を辿つて居る時の事であつた。夜の暗黒な静寂を破つて、けたましい鷄の叫び聲が起つた。彼の幼い夢は、この突如として起つた叫喚で、もろくも揺り亂された。闇をつく恐怖にみちた鷄共の聲は、ますます激しくなるばかりであつた。愛する我が鷄共の上に、如何なる凶變が起つたのであらうと、彼の胸は早くも、どきくと高い波を打つて彼は小さな蒲團の上に、むつくと起上つて耳をすませた。勝手元の方では爺やも、この聲をきよつけて、起きたらしく、あわたししく戸を押しあけて、鳥小屋へ飛出したけはひがした。彼の體は不安と心配の爲に、闇の中にわくくとふるへて居た。爺やは鳥小屋をガタゴトと音をさせて、一々しらべて居るらしかつたが、やがて、その太い沈痛な叫び聲が戸を透して聞えた。

「坊ちやま。やられましたぞ！ 野良犬め。畜生。」

彼の心配が、的中したことは、彼の胸に又彼に豫期以上のショックを與へた。

「爺や！ 爺や！ 何がやられたのかい？」

彼は鳥小屋の方向にむかつた夢中で叫んだ。

「可憐さうにえ。坊ちやま。うみすゞめがやられましたぞ。それから、烏骨鷄とハンバータが四羽やられましたぞ。」

彼は彼の珍らしい鷄が、残忍な犬の齒牙にかゝる所を想像してみた。そして、ぞつと戦いて、掌で眼を掩つた。そして、

「畜生。おほえてるやがれ。」

と、ひくい、うなるやうな聲で云つた。憎らしいく野良犬め。きつと仇を打つてやるぞ。畜生め……彼はむかくと腹がたつた。胸のあたりが、ほうつと、何かに燃されるやうに熱くなつてきた。それは彼の痼癩が起つて來たからであつた。彼の小さな、堅く握つた握り拳には、小さなく玉の油汗がにじんで居た。彼の丹誠になる珍らしい愛鳥共は如

何にあはれに、ばたくとその血まみれになつた翼を動かせながら、喰ひ殺された事であらう。あの綺麗な、絹糸のやうな柔かな、なめらかな、肌ざはりのいゝ糸を打つた鳥骨鶏をもう見る事は出来ないのか。あの美しい蕃薇冠を頂いた、ハンバークの牝鶏はどんなに苦しみもがいた事だらう。それは思ふだに、彼にとつてたまらない事であつた。彼は太い／＼溜息をついた。野良犬を憎んでも／＼憎みたりなかつた。それから今夜取られた鳥は、みんな金網の張つてない竹や葦や木で作られ圍はれた小屋に居た鳥なので、金網の方の小屋のはみんな助かつたのだと、爺やから聞いてはとられた鳥に對して、彼の不注意がなんだか申しわけないやうな氣さへした。彼は早速翌日、金網を買つてきて、嚴重に残りの鶏を野良犬から防がねばならないと思つた。翌日は爺やは金網で、彼の鳥小屋を、堅く守る仕事をやつた。彼は少しく安心したが、しかし未だなんとなく不安な夜を迎へたのであつた。彼の不安は、再びリアライズされて了つた。怪物は再び彼の愛鳥を襲つたのであつた。そして今度は、その鋭い歯牙で金網を喰ひ破つて闖入したのであつた。そして又五羽の彼の愛鳥を奪つた。彼は怖り、そして悲んだ。畜生々と地だんだをふんでも、もう取りか

へしがつかなかつた。殊に金網を喰ひ破つたと云ふ擗猛さが、なほ彼の憤激を二倍にした事であつた。

彼は益々鳥小屋のかためを頑丈にした。併し又もや数日の後に、恐ろしい犬は三度彼の鶏等を犯した。數羽の雞はその血汐で鳥小屋を染めた。殊に雛をかへしたばかりの母雞を無残にも喰ひ殺して、親を失つた雛が、ピョ／＼と、悲しい聲で、暗黒の中を無我夢中になつて走りあるいて居る様は、一しほ哀れを増した。その雛鳥はもう翌日から、あのあたゝかい母親の翼の下に、はがひにされる幸福を味へないのかと思ふと、彼はたまらなくみじめに思つた。彼の怒は頂上に達した。そしてどうかして仇をうつてやりたいと思つた。爺やも、小屋のかための無益を悟つて、積極的に、犬を退治する事を考へた。彼もそれに大賛成をした。爺やは、かなり厚い板を買つて來た。そして一日かゝつてギリギリ、コンコンと音をたてながらその板をひいたり、うつたりして、犬の一匹入る位の頑丈な箱を作つた。そして其箱には魚を入れて、犬が、魚を引つぱると、そのとたんにボタンと箱の蓋がしまるやうな仕掛をした。

「坊ちやま、太え犬めをこんどこそとりますぞ。仇をうつてやりませう。な。」
なぞと、云つた。彼は一刻も早く、仇をうちたい、憎い犬をひどいめに合はせて、なぶり殺しにしてもあきたらなと思つた。おとしは其夜早速、鳥小屋の脇に仕掛けられたのであつた。

その夜、犬は案の定、おとしにかゝつた。鳥小屋の方で、がたごと何かのざわめきが聞えた、次にワンワンと二聲三聲犬の鳴き聲がした。それかゝつたと、爺やは喜んで屋外に飛出した。そしてすぐ、

「坊ちやま。めめた。めめた。めめこの兎だ！」

と凱歌のやうな聲をあけた。彼はむつくと蒲團からはねおきて、戸外に爺の後を追つた。夏の夜は海の底のやうに深青かつた。空には磨ききつたやうな月が、銀色に鋭く光つて居た。月のまはりの青い／＼空中には、星の雨が降つて居た。渾沌と沈んだやうな、眞黒な森を背にして、彼の鳥小屋がある。その脇の箱のそばで爺やが手まねきをして居た。

彼はあの憎い犬に對しての小氣味さよに胸をすかせながら、それでも何かこわいもの見

たさのやうな心持で箱の側に走つた。そして箱の蓋の、隙間から中を、恐る／＼覗いて見た。其處には二只のツ大きな犬の目玉が恐ろしく光つて居た。彼は先づギクリと膽を貫かれたと犬がクンクンと鼻をならした。その聲は、彼が曾て愛した彼の犬のクロを聯想する程ク口と同じ音色であつた。その聲は「助けて下さい／＼」と云つてるやうに哀れに聞えた「私は今迄悪い事をしました。もうしません／＼、改心しました」と云つてるやうにとれた。訴れへるやうな、哀願するやうな、忍び泣くやうなその聲、彼は急にこの犬が氣の毒でたまらなくなつた。鳥をとられた事も何もわすれて、許してやりたくなつた。飼つてやりたくさへなつた。二ツの目玉は、青白い月光に晒されて、だん／＼とうるんでさへきたやうに見えた。彼はたまらなくなつて、

「爺や、この犬どうするの？」ときいた。

「こん畜生、たゞき殺しませう。さうだ。この箱のまんま、池中へぶちこんで、ぶくぶくらはしてやりませう。な。坊ちやま……太え畜生だ」爺やは云つた。この言葉はいやに恐ろしく彼の純な心に響いた。

「爺や、僕、殺すのいやになつちやつた。なんだか可哀さうなもの……」
「いけねえ。いけねえ。坊ちやま。そ、そんな弱音吐いちやいけません。この畜生が悪いから殺すんだ。そんな弱い事だと、崇りますぞ。」

彼はこの崇ると云ふ言葉に、びくつと思はず戦慄した。ほんとに、こんな弱い事云ふと崇るものだらうか。彼は急にこの二ツの目玉が、可憐を通り越してこんどは、こわく瘠くなつてきた。

「どうして崇るんかい。爺や。」

「弱い心で生きものを殺せば崇るんですが。この畜生は、坊ちやまの雞を澤山喰ひやがつたんだ。爺やなんか殺してもあきたらねえと思ひますア……けれど、坊ちやまが、そんな弱蟲なら助けませう。坊ちやまは弱蟲ぢやいけねえ。きつくならんにや。」

「いゝよ。いゝよ。お前の思ふやうにおしよ。こん畜生。僕の雞をよくもたくさん食ひやがつたな。」

彼はかう云つて、箱の中の目玉を睨みつけてみた。それにもう明らかに彼の憐憫と、恐

れ氣を自分自身にごまかさう爲のつけ元氣に過ぎなかつた。彼の心は、只わく／＼と立騒いで居た。爺やは得意然と、その犬の入つてゐる箱をすく／＼と引つぱつて、庭の池の方へ持つて行つて、ボチャンと中へ入れて、その上に乗つて沈めた。

ワンワンと二聲ばかり云ふか云はぬうちにガボ、ガボ、と水におほれる音がした。彼の心臓はどき／＼と音をたかめた。もう凡てはおしまひだ。畜生々々。雞の仇だぞ。思ひしつたか。ざまア見ろ。こんな言葉を、彼はでたらめに口から放つた。しかし動悸は中々止まらなかつた。併し爺やは「小氣味がいゝ／＼」と繰返して、一向平氣で、心から凱歌を奏して居るやうに見えた。彼はなんとなく爺やがたのものしかつた。

翌日、爺やは土左衛門になつた犬の屍を引上げた。彼はこはいもの見たさでそれを又見たのだつた。犬は白と黒の斑で、毛はびしょ濡れになつて、水をいつまでもほた／＼と垂らしながら引上げられた。彼は思はず、びくつとして一足後ろに退いた。犬は四つ足をふん張つて、體はいやに、しやちこ張つて居るが、肉は水のためにむくんで居た。昨夜の鋭い眼は膨れ上つて、どろんとして、眼やにがたまつて、血さへにじみ出て腐つたやうに、

まはりがぐちやくして、穢なかつた。數羽の雞を喰つた口の、齒牙の間からは赤い舌が血みどろになつて、だらしく垂れて居た。彼はこの慘めさに思はずも顔をそむけざるを得なかつた。如何にも彼が酷たらしい事をしたやうな氣がして、いやな不愉快が胸を占めたしかし爺やは益々得意で、その屍を蜜柑の木の下の肥しに埋めて了つた。

彼は其後、あの犬の祟りがありはしないかと氣になつて仕方がなかつた。併し祟りは何もなかつた。しかし彼は時々あの犬の土左衛門になつた淺間しい哀れな姿を思ひ出して、その度に不愉快になつて、唾を吐いたりした。又よく夜などは犬のあの恐ろしい二ツの光る眼を思ひ出して、ぞつとして、夜中に眼がさめた時や、は、かりの中で彼はよくその二ツの眼に怯えた。そしてすぐあのぐちやくな腐つた、血みどろのふくれ上つた、翌日の犬の眼を聯想した。それは實に瞬間的ではあつたがたまらない不愉快であつた。そして其時彼は「弱いものには祟るが、強いものには祟らない」と云つた爺やの、あの時の言葉を思ひ出した。

其後彼の體は次第に健康に復した。そして、淋しい大磯の生活をすて、東京にかへり

中學の寄宿舎に入るやうにさへなつた。

其時、彼は、もう犬の事も祟ることも何もかもすっかり忘れて居た。

小品五題

I 船上のギニアアアオル

ガン／＼と云ふ銅羅の音が、キャビンからキャビンに反響して、その餘韻は、熱い潮風に乗れ、海の上を廣がり散つて鳴り響くと、ボウツと云ふ太い汽笛の音が、人々の胸のしんにまでもしみとほるやうな響きで、又一しほ強く鳴り響いて、その餘韻も太い波動となつて熱い海上の空中に響き渡る。

舳先では、盛んにガラ／＼と錨を巻き上げる音がする。ブリツヂの上と下とで、運轉士や水夫等のどなる聲がする。そのうちに船はいつしか動き出してゐる。船縁のわきの深青い海水が、泡を含んで流れる。紺碧の海の面に、あちこちに浮んだ船舶の、枯れ木の

やうに突立つた帆柱や、所々に浮ぶ小さな玩具のやうな土人のボートや、そして人間がけし粒位の大きさに見える位に離れた陸地の、桃色や白やの石造の家々や、その家の間や背後の緑滴るばかり青々とした熱帯植物や、そんなバナラマのやうな四圍の景色が、軽くまはつてゆくので、あゝ船が動き出したんだなと肯かれる位、甲板の上はビクともしない程静かである。

なま熱い風が吹く。それがべと／＼と汗ばんだ體に、それでも心持よく吹きつける。甲板の上の人々の白い服が、ひら／＼と翻へる。船は次第に速力を増して、陸地は次第に遠くなる。

土人の圓木舟が、帆を上げて走つてゐる。圓木舟の腹からは二本の棒が、横つちよの方によきつと出て、それに又小さい圓木がついて居る。ひつくりかへらぬ爲だらう。船の近くの圓木舟には、まつ黒の土人が乗つて居るのも見える。すると土人はこつちを見て手を振つたりする。海の上に居れば只人間がなつかしい。こつちも思はず反射的に手でも振つてそれに答へたくなる。船はそんなものをどん／＼あとにする。

築港を出ると、少しは涼風が吹く。波がいくらかあるので船もやうやくゆれ出す。なんと云ふ深青い海だらう。熱帯の海は殊更ブルーの色が濃いやうに思はれる。船はドブんと波を蹴つてゆく。船縁のすぐわきには瀧つせのやうに海水が、どつくと流れて、白い飛沫を空中に上げる。その白い飛沫に七色の虹が、さつとかゝる。

虹は消えたり、又出来たり、大きくなつたり、小さくなつたりして船と共に走る。

陸地は次第に遠くなる。あゝまたこれで、八日ばかり陸地を見ないのかなと思ふと、陸地が遠くなるのがいやに名残惜しい。

「ねえ、艦へ行つてみませうよ。もうだん／＼セイロンの海岸も見えなくなりますからね」
私は、となりに、手すりにつかまつて遠くなりゆく陸地の方を見てゐるミスHに云つた
「えゝ、行つてみませう。」

二人は手すりから離れて、コック／＼と甲板を歩いて行つた。梯子段をとんとんと下つて中央部の下甲板に出ると、其處には、このコロomboの港から乗つた澤山のデツキ・バツキンジャアがうよ／＼して居た。

中央部の下甲板の上には、カンダスの日よけ兼雨よけで掩はれて、その下にはまつ黒の黒ん坊が、色彩の強い赤や黄色やの布を體にまいて、ごろ／＼としてゐた。鍋で何か煮ては穢い皿の上につつして手づかみでむしや／＼しきりと食べてゐる者、まつ黒の體を半裸體に露はして、晝寤をしてゐる者、大聲に話をしてゐる者、子供をあやして居る者、そんな人々が一團となつて、うよ／＼して居た。そしてそれらの人々のいきれと一種異様の臭氣が私の鼻をついた。それらの人々は餘りにうよ／＼して居て、なんだか、かう、人間と云ふ感じから少し遠のいてゐる感じがする。しかし、人間と云ふ感じが遠のくと云ふ事を感じるのは、私には非常に何か悪い事、恐ろしい事、感じてはならぬ事を感じる心持がした。それで私は臭氣をむりにこらえて平氣な顔をしながら、人々のうよ／＼して居る中を謙遜した態度で通りぬけて行つた。

土人等は私達二人をみた。私は出来るだけ好意ある顔で彼等を見かへしたつもりだつた。そして可愛らしいまつ黒な子供には、一寸手を出して、可愛がつてみたりした。所が、ふと私の足元から鳥がヒョイと飛び出して、コック／＼と鳴いた。

その鳥は鶏位の大きさで、美しい鳥だった。一寸七面鳥にも似て居るけれど、もつと感じが優しくて羽ももつとやはらかで細かかった。

「あら、ギニアフォルよ。ごらんないMさん。可愛い、ぢやありませんか」

ミスHが英語で早口にかう叫んだ。そしてコツ／＼と鳴きつゝ歩いてゐるその鳥を捕へやうとした。すると、二三羽の又別のギニアフォルが、土人の間から飛出した。

鳥はみんな四羽居た。鳥はよく馴れてゐるとみえて、土人等の間をコツ／＼となきながら歩いた。ミスHにもすぐ一羽の近くの鳥が捕まつた。

ミスHは、捕へた鳥を横抱きに抱いて頭を撫でてやつた。鳥はおとなしくして居たが、熱いとみえて、喙をあげてハア／＼と息をしてゐた。鳥の眞黄色の喙から頭の上には赤い鶏冠があつた。そして頬も赤かつた。頬の下にも赤い二枚のトサカがぶら下つてゐた。

羽はこまかく柔らかだつた。體全體は鼠色の毛で白い斑點があつた。そして翼には白の斑點のある丈夫な羽がならべられてあつた。鳥はその翼をばた／＼させた。

ミスHは鳥を離して私を見て笑つた。私も笑つた。土人はそれをみて又笑つた……

二人は又梯子段をトン／＼と登つて、一段高い艦のデッキへ上つた。船尾には日の丸が、熱い印度洋の風にひら／＼と靡き翻つて居た。その旗のまはりには澤山の鷗が翼をひろがへして、ビホー／＼と鳴きながら船を追つてくる。そして時々、海面に、はたきしては何かを喙でつまみ上げて又飛ぶ。

船尾の下の海水は船のスクリユーで凄いやうな渦巻を作つて居た。船は一すぢの白い泡の線を紺碧の海面に描き、淡い黒煙をその上に一すぢのこして、沖へ／＼と行くのだつた。私等二人は、スクリユーのひゞきでビリ／＼と振動する船尾の手すりにつかまつて、幽かなセイロンの山々をなごり惜しげに見やるのだつた――

それも次第々に遠く幽かになつた。

そして暫くすると、それさへも見えなくなつて了つた。

どつちを見ても、もう茫々とした紺碧の海ばかりだつた……

それから又毎日、熱い倦怠な、どつちを見ても海ばかりの航海がつゞくのだつた。

海は幸ひに平穩であつたけれども、熱さは體をとかしさうだつた。とてもキャビンの中などには入つてゐられない。キャビンの中はトルコ風呂のやうにムツとする熱さだつた。船客は皆デッキの日蔭の側を集つて、遊ぶ者、長藤椅子の上で晝寐する者、カルタをする者などが、あつちに一團、こつちに一團かたまつてゐた。

退屈まぎれに、船客の中にはプロムナード・デッキの日蔭の側で、上衣をぬいだ人々が、デッキ・ゴルフやデッキ・ビリヤードや輪投げなどをしてよく遊ぶのだつた。

コツン、コツンと、木と木のぶつかり合ふ響きが、數を勘定する英語の聲の中にきこえては、笑ひ聲が起る……それから波の音……

夕ぐれると、カンブスのタンクの中に海水をくみ入れて泳ぐのだつた。その海水はぬるま湯のやうだつた。日中の海水は、海水でさへ八十度あるなどと云ふ日がつやくのだつた。やきつくやうな日輪が帆柱の上では赫々と照つた。

かういふ毎日が又續いた。

我々がかうしてデッキ・ビリヤードなどをしてゐると。時々あのギニアフォルが四羽づれで、コノ〜と云ひながら甲板を歩いて居るのだつた。

ギニアフォルの主人のデッキ・バツセンチャア等は、あの最も涼しいプロムナード・デッキは一等船客だけに外には出てはいけないのだつた。この最も涼しいプロムナード・デッキは一等船客だけに與へられた場所だつた。しかし鳥にはそんな區別はなかつた。鳥は時々打つれて、この一段と高い涼しいデッキに散歩にやつて來た。そしてスチュワードに追つ拂はれなければ、仲よくコツ〜と云ひながら我々の側をあそんで歩いて居た。

さういふとき、いつもミスHは、一羽を捕へて頭を撫でたりした。

いよく明日船はシンガポールに入港すると云ふ事だつた英國のリバプールから一所に乗つて來た西洋人の殆んど全部はこゝで上陸するのだつた。それで今夜は送別の爲にファッションイ・ボールをしようではないかと云ふ事になつた。

晚餐の時は皆假裝をしてテーブルに出なければいけなさと云ふのである。夕ぐれになる

と、私は或る英國人に日本服を借して著せてやつてから、熱いキャビンにたて籠つて、今夜の仕度をした。それはエジプト人になるのだつた。ボートセツドで買つて来たエジプトの布を體に巻きつけ、エジプト人の帽子を被つて出るのだつた。やがて銅羅が鳴る。男も女も思ひ／＼の假装をして食堂に出てくる。

チャップリンの眞似をしてよろ／＼しながら入つてくる人。女が飛行將校の服を着てくる者、勳章に胸をうづめた軍服を着てくる女、支那人、印度人、ビエロー、いろんな人々が入つてくる。その度に食堂の人々は手をうつてどつと笑ふ。

私のテーブルの向き合ひの人は、ミスHである。ミスHは運轉士コンダクターの服を着てくる。其れが馬鹿によく似合つて、可愛らしい。私の前に立つて擧手の敬禮をして、それから食卓へつく、食堂は殊更今夜は賑ぎやかだつた。

「食事がすむだら踊りませうね」

などと云ふ言葉が交はされる。私もミスHとワルツとフォックス・トロツトとワンステツプと一度宛踊る約束をする。

御馳走は次第に運ばれる。料理人も今日は腕をふるつて、却々珍らしいものが出る。と、私は献立書を見ると、ギニアフアオルの料理が一つある。私は若しやあのギニアフアオルではないかと思つた。しかしあれはデツキ、バツセンチャアのだから、そんな事もあるまいと思つてもみる。ミスHもそれを氣にしてゐる。二人ともたうとうギニアフアオルの料理は食べなかつた。食べる氣がしなかつた。

食事がすむと私は氣になつたので、甲板をエジプト人のまゝ方々歩るいてみた。しかしギニアフアオルは居なかつた。私はスチユワードを呼んで、きいてみた。スチユワードはよく知つてゐた。それは、やはりあのギニアフアオルだつたのだ。スチユワードは、あの鳥が方々に糞をして困るのです、そしてデツキ・バツセンチャアをいつも叱るのだが一寸油断してゐると一等甲板へやつて来て糞をするなどと云つた。それで今夜はたうとう料理番が思ひついて、買つて今夜の夜會の御馳走にしてつたんだと云つた。スチユワードは面白さうにそして得意になつて話した。そしてあの鳥を持つて居たのは女で、なんでもその女の亭主は今度の戦争で死んだのださうでそれでその女は兄の働らいて居るマレーに行くのだ

さうです、鳥を買ふ時、船の者が一寸きいたんださうですと、さも物語でもあるやうにおしやべりらしく云つた。

『さうかね。それは可憐さうな事をしたね。僕は食ふ氣になんかなれなかつたよ。折角の珍らしい御馳走でもね……』

と軽く私は云つたものゝ、心の中では、今度の歐洲戦争が世界中の方々にまで如何にその恐ろしい蔭を投けてゐるかを又しみぐと思はせられるのだつた。エジプトの沙漠の驕の或る一軒にも、印度の竹やぶのわきの或る一軒にもその蔭が射さなかつたと誰が云へよう。世界は如何に隣接して來たことよ。さうして支那にも日本にも、ヒリツピンにも布哇にもその恐ろしい蔭は投げられたのだ。そしてその蔭はこの人間社會の延長である船の上にもまで延長される。

私はふとあのスエズ運河で見た、非常に大きな印度兵の陣營を思ひ出した。其處にカーキ色の服を著た皮膚のまつ黒の兵隊さんが、うぢやく居たのを思ひ出した。又巴里の街を、印度人が英國の軍服を著て、胸に勳章などをつけて歩いて居た姿なども思ひ出した。

た。

あれらの兵隊さんの定服も、このデツキ・パツセンチャアの中央部の下甲板にごろ／＼した人々の中にも居る事だらう、中にはその戦場の彈丸の中をくゞつて來た勇士も居るだらう。その人々と、この船の一等船客の食堂に胸に勳章を輝かして、ゐばつてゐる多くの英國の將校と、何處が違はう。彼等は同じ戦争で、同じ彈丸の下で、同じ國の爲に働いたのではないか。しかもあの白人のあの黒人を輕蔑しようはどうだ。一體黒人は何處の國の爲に働いたのか。尊い命を投げ出して……世界人類の爲に横暴な獨逸の軍國主義を亡ぼす爲に戦つたのだと云へば餘りにきこえがい。勳章と金につられて戦つたのだと云へば餘りに彼等が無智にもきこえよう。それとも彼等は、結局彼等をしひたけて居る英本國の爲に戦つてやつたのではないか。所謂祖國の難に赴いたのだと云へば餘りにきこえがい。一體彼等はどれだけの自覺があつて命を投げ出して戦つたのか。いや自覺ではない。凡ては只一つの権力の下に動かされるべき方へ、命をなけ出して動かされなければならなかつたのだ……

さうして一人の人が戦死した爲に、まあ何人の人が不幸な月日をそれからおくるのだらう。何人の人が、印度の熱日の下に涙の生活を送つて居よう。無数の獨逸人、奥國人、英國人、米國人、佛國人、伊國人、白國人、露國人、其他數々の國、歐洲大戰の戦死者の家族と共に……場所こそ違へ、人種こそ違へ、同じ悲しさに泣いて居るのだ。さうしてその不幸は遂には人間ばかりでなく、其周圍の動物にまでも及ぶのか……

私はこんな事を思ひつゝ、とん／＼と梯子段を下りて行つた。中央部下甲板の隅の料理室の脇には、死んだギニアファオルの羽が石油箱の中に捨てられてあつた。

私はその中から美しい斑點のある羽を二三本とつた、

そしてそれを持つたまゝ、又アツバー・デツキへとん／＼と登つて行つた。プロムナード・デツキでは、もう蓄音器のダンス・ミュージックが初まつてゐた。人々は樂の音につれて幾組かにわかれて面白さうに踊つて居た。其處には人間の苦しみ悲しみは忘れられて居るかのやうに見えた。そこには歡樂が只渦巻いてゐるやうに見えた。やがて音樂がすむと拍手が起つた。私はその中に白い運轉士オラトールの服を着けたミスHを探し出した。

又音樂が初まつた。私はミスHと組んで、音樂につれて脚をそろへて舞ひ出した。踊りつゝ、私はギニアファオルの事を話した。

「まあ、可憐さうに……。妾に云へば、妾が買ったのに……可憐さうに……」

とミスHは繰返した。音樂がすむ頃に私は踊のグループから次第にぬけて行つた。そして音樂がすむ頃、完全にグループから離れて居た。

「ギニアファオルの片身の一つあけませう」

かう云つて、私は美しい羽毛を、一枚ミスHに渡した。

「可憐さうに……」

かう云つて彼女はそれを受取つてポケットに入れた。かうしてギニアファオルの羽毛の一つは、美しいミスHと共にシンガポールへ、一つ私と共に日本へ行つた。あとのあの石油箱に捨てられた残りの羽毛は、何處かの港で帽子屋に賣られて、何處の國の人の帽子の飾りになるか。それとも細かい羽毛は羽蒲團の中に入れられて、誰をその上に寝かすか、それとも或る羽毛は港につく前に、風に吹きとばされて海中に入つて魚に食べられるか誰

が知らう……誰が知らう……

銀色の圓いみがきつたやうな月がマストの上に照つて居た。海の上は青黒かつた。その中に煙突からドス黒い煙のやうな煙が流された。月のまはりには星が銀の砂をまいたやうだつた。圓い空に星が一杯だつた。蓄音器の舞曲と人々の笑ひ聲との中にザア／＼と云ふ船縁を洗ふ波の音が、リズムカルに響きわたつた。そして二人は又ダンスのグループの中に戻つて行つた。……(之)

(一九三三、九、三二)

II 海邊の笛

夕食をすませると、私は團扇を翳しながら、いつものやうに海岸に出るのだつた。それは又、あの漁師の笛の音が、きかれはしないかと思ひつゝ、そして、あの美しい夜の海の雰圍氣に浸る樂しさを思つて出てゆくのだつた。

家の中では、もう薄暗くなつてゐるものを、海岸に出ると、まだ夕暮の明るさが、沈んむやうに残つてゐる。西南の水平線上は、まだ太陽が落ちて、間もないと見えて、うす赤く、雲が彩られて居る。その雲の上の方は灰紫にほかされて居る。その雲も、みる／＼その薄赤い色が、橙色となり、オレンジとなり、どん／＼巧みな色調の變化を示してゆく。と同

時に、海岸の雰圍氣も、どん／＼と青い色がましてくる。海の濃いブルーの色は、みどり色とかはり、果ては、まつ黒くなる。そして、西南の隅だけまだ白くほかされてゐる。西の箱根山はくつきりと、大空中に浮刻りにされてゐる。東の鎌倉の山々、江の島は又、ごつ／＼とした筆致で、雲の中に描き出されてゐる。空氣は、鋭い感じのする透明さとなつて、これらの黒い姿を、明瞭に展開させる。夕暮の海岸程、すきとほつた感じのするものはない。

空氣には、どん／＼薄墨がつき込まれるやうに、薄くなつてゆく。その薄墨は、この大磯の町の背景をしてゐる高麗山の邊りからの天の一角からつき込まれてくる。そしてその薄墨と共に、山の縁に清められた涼風は、そよ／＼と流れてくる。その、流風に流されて薄墨が流れてくる感じもする。足の下の砂はどん／＼冷えて、冷めたくなる。それは、ほてりきつた足に心持よく觸れる。

やがて、月が、東南の三浦半島の山の上に、その上つて淡い光は、どん／＼と強く且つ濃くされる。光の下の海の面は、一すぢにきら／＼と反射して燦爛と輝やく。その日の光を

砕いて波がくる。波がしらの白い泡が一すぢに、白くみえる。波が磯にうちあたつて砕けると、その飛沫が空中に舞ふ。その飛沫の、一つ一つには月の光りが反射する。うちよせる波の音が一定のリズムを作つて、耳につく。そよ風のふく度に、霧のやうな海の氣が、汗ばんだ顔や手に冷たく心持よく吹きつける。

私は冷たい岩の上に、腰を下ろして、團扇を翳すのだつた……。と、海岸の石垣の上の、一軒の漁師の家から、あの笛の音が流れて來た。

それは、何と云ふ可憐の聲であらう。とぎれ／＼のその旋律は、巧みな節まはしに強弱をつけながら、玲瓏と流れてくる。其の細いメロディーに、波の音が、強く、弱く、伴奏をする。この海岸の雰圍氣に、この細い笛の音が、いかにもびつたりあつて、一種の感興の湧くのを、私は胸に感じるのだつた。あの逞ましい赤銅色の漁師の手から、こんなデリケートな可憐な音が流れてくるのかと思ふと、なほ面白い氣がする。それは、如何にも、生々とした音だ。それには晝間の勞働を休めて居る彼等の姿も暗示されてゐる氣がする。私はこのローカルカラーの強い色彩に浸つてゐるのを楽しんで居るのだつた。そして私は、

そのリフアインされたブリミテイヴの、その生々しい味を愛した。其處には、如何にも質朴な平和と、單純な自然の愛とが歌はれてゐるものがあつた。しかし、その笛は實はオーケストラの中の一部なのだ。雰圍氣な一つオーケストラだつた。月、空、海の面、舟、波、岩、漁師、笛、それらは一つ一つのオーケストラの樂器なのだ。さうしてそのオーケストラは、このローカルカラーが合奏する所の夏の自然が表現するオーケストラの氣がするのだつた。

所がふと私の耳には、雜音が入つて來た。それは、コンクリートで固め上げられた土手の上の別荘風の四角の中から。もれてくる、若い男等の聲と、マンドリンの音だつた。マンドリンは調子はづれだつた。歌は歌で樂器にあつて居なかつた。それにいやみなセンチメンタルでふるはしたりして歌つてゐるのは、實に閉口するものだつた。

私の愛した夏の夜の海岸の自然な雰圍氣は、これでこはされて了つた。あの歌を歌つて居る連中は、先日も、この海岸で、あの笛を大きな聲で悪口を云つて、それから歌をうたつた人々らしかつた。その時はなんでも何かのオペラに日本語譯の歌をつけたのだつた。今日の

は何か、アメリカあたりの俗謡らしい節のもので、英語で得意になつて歌つてゐた。その得意さ、己達は藝術的の歌をうたつてゐるんだぞ、しかも英語だぞ——と云はぬばかりに、海岸の人々にきこえよがしに歌つてゐるのは、實際、はなもちがならなかつた。私はこの前の時も、實にいやな氣がした。今度は又樂器が入つてゐるだけ尙たまらなかつた。勿論あの樂器も、ヴェニスの夜にゴンドラの上でも、名手が奏けば、それは又あの笛以上にいだらう。しかし、あの笛をあゝ漁師が、生々しい純な感情を盛つて、巧みに奏してゐるだけの、半分のもいや十分の一の巧まさにも、あの人々はマンドリンをこなせて居ないのだ。しかも、得意になつて居る。樂器そのもの、價值より、要するに、それは、その人如何の問題だのに……。私はたまらなくなつて立上つた。そして、どん／＼海岸を歩いた。冷たい砂は足に心持よかつた。私は砂を蹴とばしてゐるいた。

もうマンドリンも英語の歌もそして笛もきこえなかつた。そこは砂山であつた。砂山の上には、まつ黒な、老松が墨繪のやうに生ひ茂つてゐた。私は冷たい砂の上に、體をなけ出した。

私はふと、こんな事を考へてゐた。ある器樂をまづくやるより、ある樂器をうまくやつた方が藝術的には上だ。あのマンドリンの連中は、只西洋のものならいゝのかと思つてゐる……。澤山さういふ人々が、色々の方面にゐる……。尤も私もあの笛、それ自身は藝術的には勿論たいしたものだとは思はない。只プリミティヴで面白いと思ふだけだ。しかしあの人間の一つの氣持はつかむ巧みさは、もつてゐると思ふ。しかしそれは、到底ベートウベンや、ワグナー等の偉大な音樂とはくらべものにはならない。かゝる偉大な音樂者の音樂を名手がやるのをきけば、そこに人は、天才によつて完成された、力強い藝術的の力にうたれて、人は驚かすには居られないだらうから。

純な心持で描かれた素直な自由畫には、人の心が生々しく出てゐるものがある。それらは、餘りにアカデミックになつたり、又は餘りに職業的になつた美術家の繪よりは、ずつと尊いものであるし、そしてそれを見る人の心持のいゝ純なるものをなけ入れらうが、又人は、レンブランやミレーやの偉大な美術を見れば、其天才によつて完所された大きな藝術に頭を下けずには居られないのと同じやうなものである……。

欠

欠

足を早めたけれど遂に雲に挿つて了つた。ボツリ〜と大粒の雨が、ボツリ〜と麥藁帽子の上を軽い拍子をとつて豆太鼓をうつやうにたゞき初めた、と間もなく、ザーとやつて来た。土の匂ひと、草いきれの匂ひとが、水氣をふくむだ空氣にあふれて、ツンと鼻をつく。

「こりやあ、いかん。どこかへ逃げ込まう」かう云つて兄は四邊を見まはすと、三四丁さきの、雑木林の脇に、小さな藁屋根の家が見えた。妹も無言のまゝに、兄の目的が直感されて、其家めがけて兄のあとを追つた。そして飛び込んだ。家の内部は薄暗く、そして燻つて居た。大きな圍爐裡には、黒く燻つた藥罐が、しん〜とたぎつてぶら下つて居た。火の熱と、湯氣とが、ほの〜と天井めがけて立ちゆらいで居る。その側に爺さんが居た。「一寸、雨やどりをさして下さい」と兄は云つた。

「え、たと、休まつしやい」

爺さんは答へて煙管にいう〜と火をつけて、スバ〜やつた。

部屋の内ぢゆうは蠶の棚で一ぱいであつた。その中を、急がしさうに若い男女が立ち働

いてゐた。兄妹に腰を下した。その脇に一枚のモクダレバカマをはいた女が、一枚の蠶籠の中から、チョン／＼と半透明な、指程の蠶を一疋／＼つまんで別の方につしてゐる。

それはもう繭を作るんだなと兄は思はた。兄は面白がつて、その半透明の蟲を、つまんでみたり、桑の葉をやつてみたりしてゐた。それは實に美しい蟲であつた。小さな澤山の足を微妙に動かしてゐた。

纏て夕立は晴れた。兄妹は小さな百姓家を出て宿へ引かへした。宿につく頃、あとから妹が叫んだ。

『まあ、兄さん、兄さんの袂にお蠶が一疋とまつてゐてよ。』

兄は袖をひるがへしてみた。一疋の半透明は蟲が、しつかりと袖につかまつてゐた。それを掌の上にのせてみた。そして多くの群から離れて孤獨になつたその蟲は、どんなに淋しがつてゐるだらうなぞと思つてみた。夕立にあらはれ、めぐまれた空氣は肌に心持よくつめたく清くなつた。そのすき通つた雰圍氣の中に、樹々の露は夕日に寶玉のやうにきら／＼細かく輝いた。

宿へ上ると妹は早速、小さな手提籠の中に蠶を貰つて来て入れて、その中にその蠶を入れてやつた。

兄は其後勉強にいそがしく蠶の事を忘れてしまつた。暑い東京に逃れて、涼しいこの那須野ヶ原に勉強に来てゐる兄は、少しでも何かしなければ、彼自身の心持に申わけがなかつた。所が二三日してふと蠶の事を思ひ出して、あの手提籠を見たとき、小さな蟲は、やはり自然の法則を忘れなかつた。

其處には一疋の蠶の代りに、一つの白い小さな美しい繭があつた。その細な白い絹糸で蠶の中に中ぶらりになつてゐた。

兄は丁度其の時遊びに来た百姓爺さんに、その繭を見せて、これを東京へもつて歸り度いが、一疋では蛾になつた時、雄でも雌でも一人ものでは、がはいさうだから、おつれを四ツ下さいと云つた。人のいゝ爺さんは、すぐに承知してくれて、同じやうな繭を十ばかり持つて来てくれた。そしてふとこんなことを云ふともなく云つた。

『今年は繭が安くて困りますだあよ。去年は十何圓もはあ、しただから、今年も二十圓か

ら上もしべえと思つて、皆えら骨折つて、人夫までたのんでやつたに此安値ぢや人の給料も拂へませんがすよ、おらだちもはあ、するぶん困つてゐるでがす。何でも外國へ蘭が今年はちつとも賣れねえつちうことですがすよ。どこの家でも大頭痛でがすよ。こまつたもんだ。』

この言葉は兄の想像を驅つて數千里隔つた米國の空に飛ばした。重々しい石の、高く聳えた家々。アスファルトのペイヴメント。バスや電車の響き。行き違ふ燕のやうな女。それらの人々の着る絹の何れか。この山里のこの蘭と何かの關係があるのだ。遠い國々の財界の變動、それがこんなにもデリケートにこの山里の茅屋の中の人々の神経にまで觸れてなやますのか。それは如何にも不思議で、そしてちつとも不思議でないことだ。この小さな可愛らしい蘭。その中の一疋の踊も、人間の爲に生れて来て、人間の爲に死んで行く。この蟲の子や孫やの吐いた絲も、日本人の袂のはじになるか。ブルバール、ディタリヤンを行くバリジャンヌの着物の裾の一部になるか、少しもかはりはしない。さう思つてふと窓の外を見ると、其處には青い／＼桑畑が、兄の視野に展開された。あゝこの桑この桑、蠶

の食ふこの桑の一本の枝も、世界の何處かの、何かに關係がある。切つても切れぬ眼に見えぬものでつながつてゐる。そしてそれはちつとも不思議の事でない。兄はこれらのあたりまへの中の最もありふれたあたりまへを今更又こと新しく考へなほすことによつて、その眼に入る桑畑を又なつかしんだ。その時若い兄の眼にはそれらはより親しい空氣の中に包まれて見えた。そしてその時その暖かい空氣の中を、はばたきもかろく桑畑の上を一羽の百舌鳥が掠めて飛んだ。